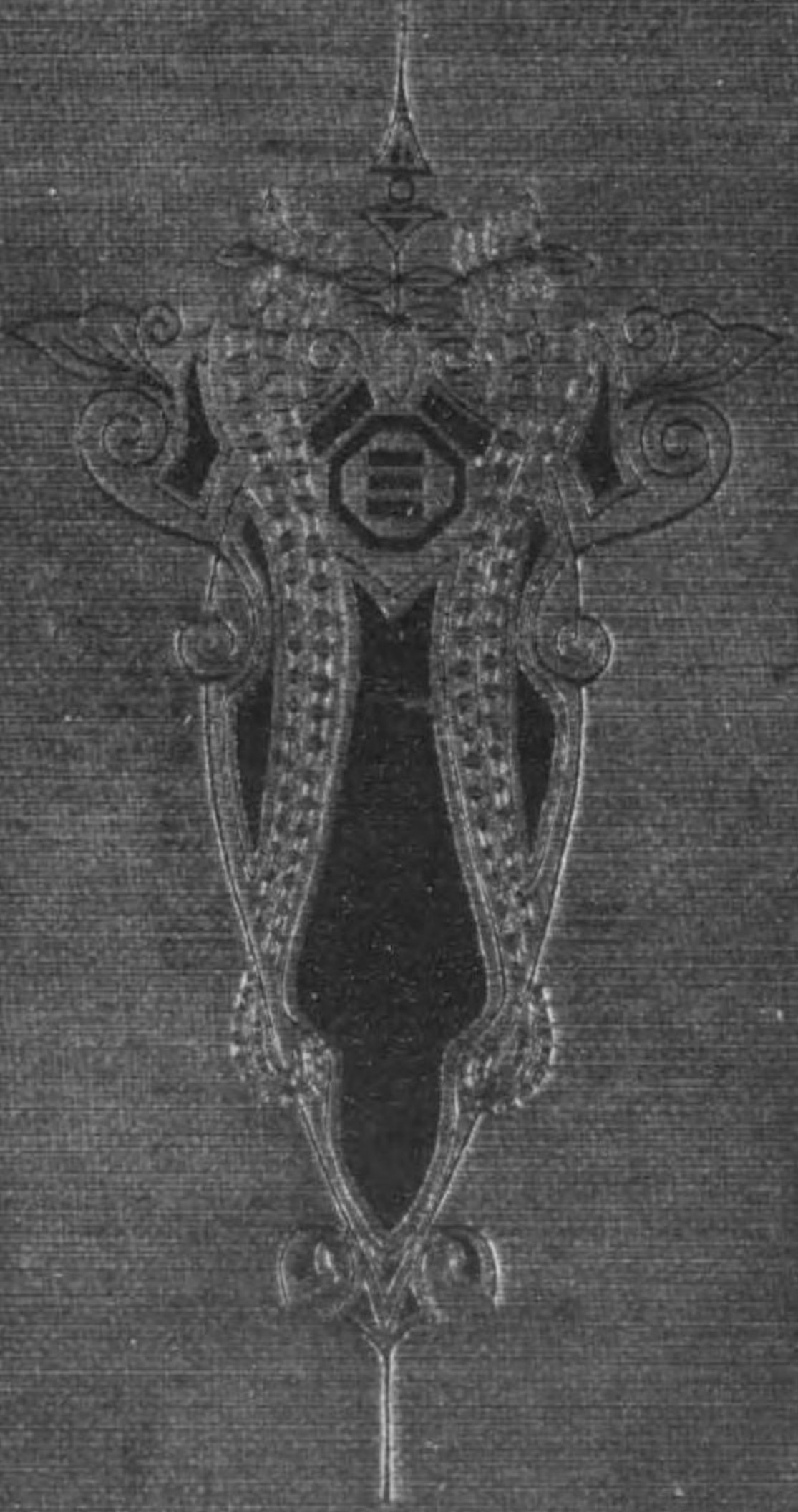


324

660

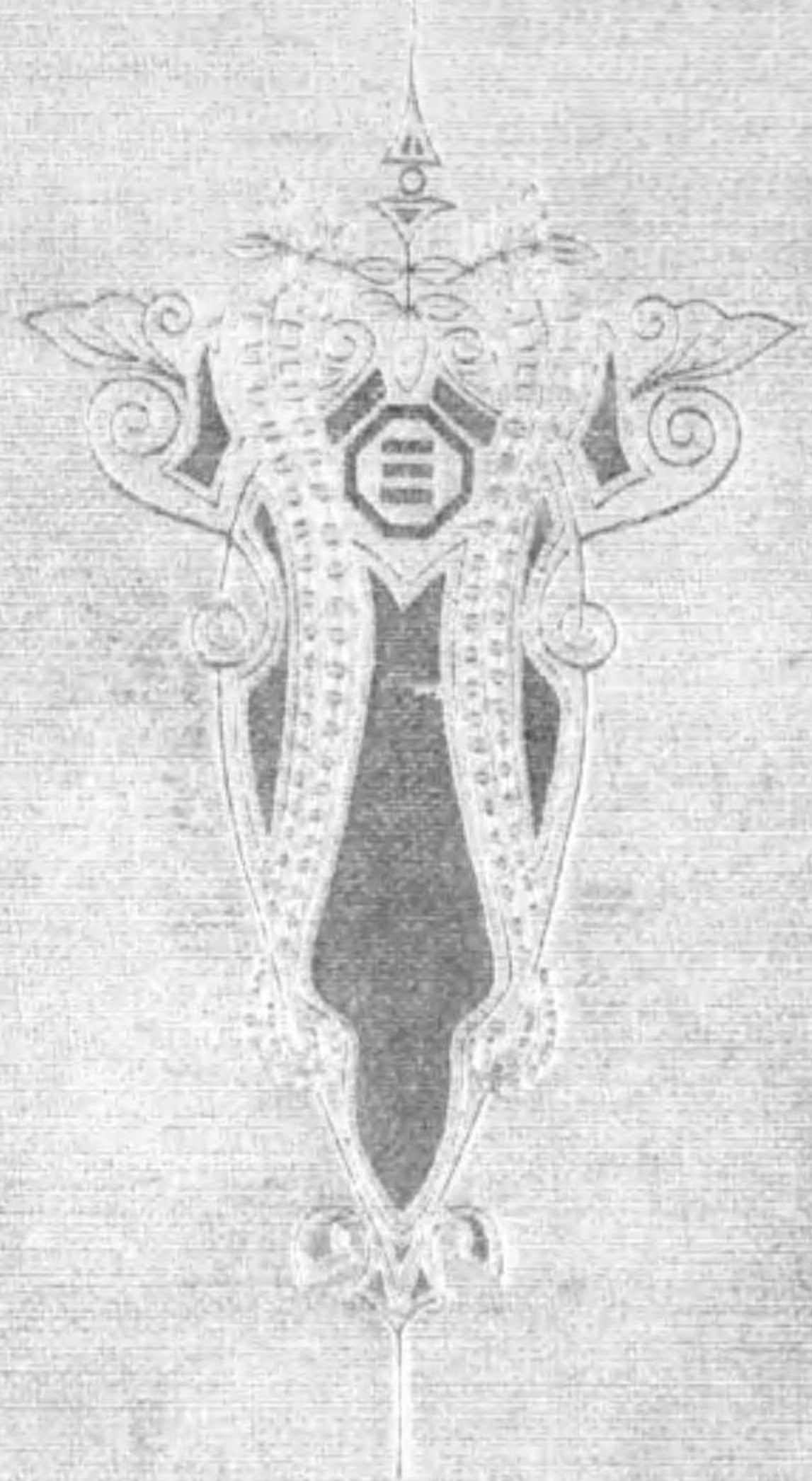


始



324

660



324-660



時宗聖典

大正
10 12 13
内交





宗聖典

目錄

- 一、一遍上人念佛安心抄一卷
- 一、時宗安心大要一卷
- 一、時宗要義集二卷
- 一、神勅教導要法集五卷
- 一、一遍聖繪十二卷
- 一、一遍上人繪詞傳直談鈔十三卷

賞	聖	法	如		
山	戒	阿	海		
撰	選	編	選		
自一六五頁 至四一六頁	自一六四頁 至一六五頁	自一四三頁 至一四四頁	自八二頁 至八三頁	自二五頁 至二六頁	自一四頁 至一五頁



一遍上人念佛安心抄

序文 義

上人はじめはたすけ給へと信心をおこし。念佛を申
べきよしすゝめ給へしを。建治二年の春くまのさん
けいありし時。ごんげんあらはれ出給ひて。善惡を
しらず不信佛をもわきまへぬしゆじやうのための法
なれば。只南無阿彌陀佛と唱なへよとすゝむべきよ
しをしめし給ひしより。三業の外念佛と云安心を了
得し給へり。經論にかなふて理ふかきゆへに。あま
ねく衆生是にしがつて往生ごくらくをねがふ輩。
念佛のくもなきに。先かならず現世の安穩成る
故に。諸國の神々隨喜して。皆遊行の守護神となり
給へり。諸宗のちしきたちも。念佛わらじやう安心
をとひきいて。みな歸依し給へしこと。傳記にしる
し給へり。

正宗 分

一遍上人念佛安心抄

此内廿八施問答出經論釋内典外典和歌等以宗門
大綱釋成見者意爲先了達安心云云。

離三業念佛安心如何。天台の曰。念佛の安心もろ
くのちしやたち。家々の義理かはりぬれ共。いづ
れも經論釋にかない候故に。をしへをうけし輩。皆
往生をとげるなり。今當門徒の一流を申べし。世間
にありとあらゆること。皆無爲の佛の行義に非ず。
五戒より初て。二百五十戒。五百戒。ないし一切戒
とていましめられたり。又人の身は地水火風の四大
和合したるなり。四大をべちくにはなれたる時は。
おこすべき五欲もなく。作るべき十惡もなし。しか
れば根本の四大ありのまゝに身をもてば。衆生をな
やますぼんなうなし。故に遺教經にいわく。妄念あ
らざるものには。もろくのぼんなうの賊いる事な
し云云。され共四大和合すれば見ることきくことに
あひよくの念ふかく。三惡道のたねとなるゆへに。
所詮此身命を今生より彌陀如來にゆづり參らせ候と

ゑかうし。ちかいをなしてより後には。我心身は佛の心身なりとかくごして。我身を我まゝにせぬゆへに。萬事の望をかなへんとせず。世の善惡せひにさはらず。行住坐臥に善心のうへにも惡心のうへにもしやうめうのこゑを往生としんじて。唱て死すれば。名號の中より佛のらいこうもごくらくもあらはれ候なり。般若經に彌陀如來みづからのたまわく。我國に生ぜんとはつせんものは。つねに我名をとなへてやむ事なかれと云云。三業とは身に佛を禮するを身業と云。口に名號をとなふるを口業と云。意に佛を憶念するを意業と云。爾るに初一念にほつきして。我心身を彌陀如來に奉つてより後には。我を我とせずして念佛するゆへに。三業をはなれたる念佛とは云なり。佛と我と一體成ゆへに。まよひとさとりと二つなきくらいに成なり。かくのごとくなれば。ぼさつの行をせず。凡夫の身ながらぼんやうをだんじ。生ながら死して佛果にいたるものなり。

淨土門安心起行如何。答云。安心とは南無の二字なり。起行とは阿彌陀佛の四字なり。代々のちしき此義也。此外にをくふかき事なし。善導大師の云。南無とは歸命と云事也。又ほつぐわん廻向の義也と云云。弘法大師歸命の二字をしやくして曰。歸は能歸也。命は無量壽也と云云。むりやうじゆとはみだによらいなり。彌陀佛によく歸するといふことを歸命とは云也。十劫以前彌陀如來のかたより衆生にきみやうし給へて。四十八願のおこし給ひて。今其本願にじやうじて。衆生のかたより佛にきみやうする也。命とは令命也。佛のをしへに歸依すると云事也。當門徒は別してきみやうの二字を立て。佛めいにそむかぬゆへに。今生我心身を佛にゆづり。佛のいましめ給ふよよくにかはらず。佛となへよとのたまふ。南無阿彌陀佛の外に心なかれとをしへ候也。問。十八願に至心信樂と云文を。鎮西流には信とは心にたすけ給へと思ふを云。それを詞にいだすは南

無の二字也。名號を唱るを樂と云。信と樂とさうわうすれば往生をとげると云へり。答。心にたすけ給へとおもわんとすれ共。惡業ぼんやうのみおもはれて。此まれにもおこしがたし。縦ぼんぶの心を以て信心をおこすとも雜善とす。我身の功をもちひば自力也。善惡において心をもちひぬを他力の念佛と申也。たうもんとはみだによらいにうち任て念佛すれば往生するぞと決定する。一念を信心と云也。其しさを。わうじやうらいさんの序に云。深心とは眞實信心也。十聲とても一聲にてもとなふれば。さだめて往生を得ると心にけつちやうするを信心といひ。此安心にうたがひなきを三心を具する行者とは云也。法然上人の觀經の釋に云。三心しなくかはると云へ共。肝要は深心の一に備ると云云。當門徒は我身心みだによらいの身心に歸命しぬれば三心は自そなはる也。是則大經の至心信樂なり。ある人二代上人に問。三業の外の念佛とて心をはな

れよといへる事おぼつかなし。松が崎の見佛上人の歌にも
心より外にみ法の舟もなし
しらねは沈みしれは浮ひぬ
とありと云。
他阿上人返事
心より外にも法の舟はある
しらぬもしつみするもうかはす
問。善導大師の定善義に曰。衆生佛をおくねんすれば。佛又衆生をおくねんし給ふ。彼此の三業相捨離せずと云云。此文の二心は。凡夫の身と口と意と。佛の身と口と意と一體に成と也。答。當門徒安心に初一念にみだによらいに歸命して。今身よりみらいさいにいたるまで身命を佛にえかうし奉るとちかひをなしてより後は。我心身は則佛の身心也と。かくごすれば。佛と我と一體に成ゆへに。善導の御釋にかなひ候也。

當門徒に名號實體とたつ義如何。答。彌陀はたとへばいわなり。名號はしゆじやうのぼんなうをだんぜすして佛果にいたる良藥也。今世間を以てみよ。醫師にむかはね共。やくしやうをしらねども。のめば病のゆる萬病えんなどと云がごとし。心の信不信を論ぜず。身の淨不淨をさらはず。口にまかせて唱れば佛に成ぞとけつぢやうするを佛心とす。さていきたへ命おはる時には。眼はひかりさへてもくぞうも見ず。心とをくなつて深心もあこらず。その時只十聲にても一聲にてもとなふれば。聲にしたがつて佛のらいこうあつて。行者を守護して正念ならしめ攝取し給ふ也。此ゆへに名號を來迎の佛とすれば。實體實佛とは用る也。萬善萬行に勝れたる本願名號成るに。念佛の行者聊目に當來迎を拜候はぬや。答。かたちにかげのそふごとく。唱れば來迎あれ共。ぼんぶの眼にて見るこたありがたし。たとへば風のごとし。形をみね共なきものは。梅と云へば口に

ばのたまる如く。聲にひびきのあるが如く也。此界にてみよ。春は物を生じ。夏は物長し。秋は物を實のらす。冬は物を納てかれゆく也。そのごとくするは神靈のしはざ也。目に見ぬとて疑はなし。いづれの神佛も名をとなふればあらはれ給ふこと也。たとへば地中に水あれ共。池をほる所にはきいつるがごとし。

淨土門に日所作の念佛を申て。その間に多く惡業の物語をし。念佛をばかぞへずして。じゆずをくり候事如何。答曰。所作は念佛を忘れまじきさうぞくのため也。かすのためにあらねばくはしくかぞへぬなるべし。日所作は何の用なれば。りんじゆう一念に念佛せんがため也。りんじゆうの念佛は往生のため也。往生と云は南無阿彌陀佛也。此ゆへにたうもんとは數にかまはず。老少不定にして出るいきの入をもまたず。死するばかりなれば。立にもゐるにも。善心のうへにも惡心の上にも。口をひらきて名號

を唱る也。念々に唱るをりんじゆうとかくごする也。しかれば常に佛の來迎とて行者をまもり給ふゆへ。げん世にては横死横病なく。惡鬼惡神のさいなんもなしと。十往生經にときたまふにかなひ候なり。

一淨土宗には師資相承にて。知識より十念を所化の人にさづける也。當流は所化の人より能化の方へ十念をする事いか。答。委は血脈相傳に有り。

一六時の行事に大衆佛には向はずして上人の方へ向ふこと如何。答。木佛物いはねば。あしへをうくる知識を生身の佛體としてもんとに成る僧。初め今身よりみらいさいに至る迄。知識に身命をゆづり奉るとちかひをなしかねをうつ。しかれば能化と所化と一體也と思ふゆへに上人の方へむかふ也。されば上人をばみだとも。大衆の僧尼をばみだの應化の佛菩薩とす。是ぼんしやう一體生佛一如と云道理にかなへ侍る也。三業をはなれたるあんじんをあらはす體

他流に佛を拜ひに珠數をすりもむ也。たうもんとは手にかけて置たるばかりにて佛を手にて拜むいか。百八煩惱をもみくだくとくはんねんして。てにじゆずをするは自力也。念佛は他力成ゆへに。我力ぼんのうをもみくだく事をせず。此ゆへに只じ佛はゆずは手に持たるばかりにてすりもむことなし。念體也。袈裟衣珠數などは用也。たとへば家の内にて主人は體也。諸だうぐは用なるがごとし。

臨終の善知識と云こと如何。答。是にがくもんしたる能化のみを云にはあらず。息たゆる時死苦にせめられて。あるひは死いとよて息たゆる時の到來することをしらぬを。そばにある人僧俗男女によらず。念佛を廻すれば聲を尋て佛の來迎にあづかる也。そばにて信ずる念佛を則來迎の佛と成なり。大念見大佛とて。大聲をあげて唱れば。大なる佛の來迎を見ゆる也。又息たゆる人は耳の穴もうつけて遠く成る

故に。大聲にて臨終の念佛をば信ずる也。

二代他阿上人御歌

名をよへは名にあらはるゝ佛にて

わか迎にそ我そきにける

一ある説に教者の云。眞實の念佛の行者はりんじう正念也。罪惡の人はごくそつの迎に来るゆへにりんじうに目口をばだけ惡相をあらはず也。又平生念佛の人も臨終の時惡念おれば。その念へんじてぢごくのつかいと成て。死すれば人を責る所に死相に惡をなし物に狂と云りさもや。答。病に六淫とて風寒暑濕冷熱の六の病を請る者。平生善根の人念佛の人を病苦にせめられ物にくるひ。あくさうをげんずる也。又七情とて喜怒哀思悲怨懼の七の因より起りぬる病をうくるものは。大あく人もりんじう正念也。しかれば心のみだるゝみだれざるによらず。かたちの善相惡相にもよらず。只念佛すれば十聲一聲もならず佛の來迎也。

我身命を佛に廻向して我身のためとせざれとをしへ給へ共。寒時は衣を願。飢たる時は食をねがひ。雨雪には家をねがふ心やむ事なしいかど。答。百年のよはいをたもつと云へ共。朝の霧のきへやらぬ間のごとし。我身のすぎにし方にてしるべし。七十のよはいをへても。昨日今日のごとく也。命のある間身を養事僧俗ともにあるにしたがつて臨終をまつべし。天ねんと財寶有人は。玉の臺にゐんもしうぢやくする事なかれ。夢の間のたはふれ長世の樂にも非ず。貧成人の草の菴も雨露をふせぐこと玉の臺も同じ事也。山海の珍物を食するもそさうなる野菜をあたゝためて食とするも腹に入ては同じこと也。只した三寸の間の善惡也。有にしたがいて飢をさへたすけば吉とすべし。欲念ふかく地ごくを作る也。人の身をたすくる肝要の物は衣食の二つにすぎたるはなし。木食草花の人壽命長遠なる多く。大福長者の人にあらはれすぐれて短命成る多し。能々思ふべき

こと也。總じてかぎりも財寶以て限りなき願を充んとせば。かなふ事なくして却て災と成也。

一三世の諸佛世に居給ふは女の胎内にやどり給ふと也。聊女人を佛者のいましめ候にや。答。三界に流轉する事は男女愛執より始まるゆへ也。人は心こそ肝要成り。かりそめに色どりたる貌の皮を愛して我妻をば愛せずして他の妻をあひするを邪淫戒とて五戒の内にいましめられたり。僧は一向に姪をたゆべしと楞嚴經に説給へり。迷ひのみなもとは愛欲なれば也。善導の散善義に云。深信とは佛の捨しむる物を捨。行ぜしむる物は行ふを。隨順佛教共。隨順佛意共。隨順佛願共。眞の佛弟子とも名くるとあり。一念佛の行者あるひは世にまじはり榮花成るあり。出家なども何れがよろしきや。答。只我身を佛にゆづり奉りてより。我を我とせず。しかれ共露の命の消ぬ間をすごすことは。よきにつけあしきにつけ。萬事をありあひにして。世の善惡ぜひを論ぜず。

常に念佛を往生と定て申ばかり也。かくのごとくなれば。在家は在家ながら出家は出家ながら往生をとぐる也。

置所なきにつけても歎く身を捨てもいと浮世成り
定顯法師

のかれても同じ浮世と聞物をいかにか山に身をかくさまし
是法法師

なれなはと何思ひけん山里は住に付けてもさひしかりけり
左大臣

住は憂浮世成けり餘所なから思ひし儘の山里もかな
兼好法師

世をいとふ心の奥を人とは憂ことしけき宿と答よ
基法師

今更に捨るとはいはしかくてよにありかひもなき
法印實性

同じ浮世に
かくれかを何望めけん人とはぬ心のあくそ住よかりける
讀人しらず

うかりける世々の報になり果てうけかたき身を又
な沈めそ 顯 實
とまらぬ月日はかりに任せて只とにかくに世を
わたるかな 頼 貞

此歌何れも新千載集にあり。此世にあつて世をのが
れたると云はゞ。血を以て血洗ふと云がごとし。縁
にまかせて身のありがにかまはず。只念佛して死す
る時にこそ。世を遁て極樂ならめと云ふべし。
信心の心におこらぬをおこさんとすれ共。うまれつ
きあくぎやくの心ゆへ。念佛をも疑ながら申さば往
生の業と成候まじきにや。答。疑ながら念佛申候へ
共。名號の不思議によつてかならず極樂に往生す。
され共五百年の間宮殿の内にこもる。大經に説給へ
り。さやうの大あく人のための念佛なれば。信不信
を論ぜず。唱れば佛には成也とかくごするを信心と
定る也。唱れば無量の罪ほろぶるとも。八十億劫の
生死の罪消ると説給へり。東西を辨へぬ凡夫身なれ

ば疑はもつとも也。疑罪猶消やすふして佛に成候こ
と。濁る水より蓮の生ずるがごとし。

一遍上人御歌
心からなかるゝ水をせきとめて

をのれとふちに身をしつめけり

世の善惡是非にかゝはることなく。世中の道理は他
人に任て我あくごうふかき身なりと思ひて。立にも
いるにも念佛すれば。五欲の賊の中にあるも害せら
れず。譬へば鎧を着て陣に入ば畏なきがごとし。

賀茂明神御歌風雅集に入

櫻花あたに散るこそうれしけれ

浮世をしらぬ人も見るへく

二代他阿上人御歌

身を思ふ心の中のかかはすは

身には心もあたとなるへき

一遍上人御歌

皮にこそ男女のかはりあれ

骨にはかはる人かたもなし

楞伽經には一切の佛をばさつもみだのごくらくかい
より出たりと説給へり。かりの身のために五欲にお
ははれ。根本の生れ付の佛心をくらす故に。迷ひ
の衆生と成て三惡道を流轉する也。三世了達のしや
か如来を縁なき衆生は度しがたしとの給へり。忝も
彌陀によらいの願は。十惡五逆をさらはず。無縁の
衆生極樂へすくひ取給ふ大願力に合こと喜の中の悦
也と思ひて。只ひたすら念佛申してこんぼんの出た
るごくらへ立かへるべきものなり。

心地觀經に曰。もし人常に彌陀佛を念せば。六方の
如来に護念せられて。げんぜ安穩に長壽を得て。前
後七代極樂に生ずと説り。しかるに今の世念佛の行
人惡受災難のみありて横死するはいかゞ。答云。當
流の安心のごとく。初一念に佛に業障の身命をゆづ
り奉てより。世間にかまはずたとひせひの心出來共。
我身命を佛に奉りたれば。我まゝに非ずとかくごし

て。世のことにさはらざれば。心を無事にて内證

のわづらいも出來らず。人のとがめもなくして現世
安穩也。念佛の聲を聞ては天魔破句を恐ずと業報差
別經に説り。鬼神の想をなし。かくのごとき安心
なくして念佛する人は。世の善惡にさへられて二世
ともに業とは成也。されば般舟讚に云。口に佛法を
のぶると云へ共。心の佛法にいたらぬ人のみ多し。
かやうの人に近付は。輪廻の基と成也云々。

菩薩と云は何成位ぞや。答。佛の説を聞て教の如く
唯行じて佛の果にのぼるを他受用身の佛と云。是な
り。菩提薩埵の四字を切てばさつとはいふ也。ぼだ
いとほ道の字の心也。さつたとは心の字の心也。道
心の二字にきはまることばなり。

問。道心とは何事ぞや。答。天親菩薩の淨土論に。
道心とは願作佛心也。願作佛心とは度衆生心也。ぼ
だいしんよりどしゆじやうしんは生ずると云ぞ。ぼ
だいしんぎやうには。自心を知を云と云云。是はしゆ

ぎやうがくげのうへにてのさた也。只念佛門にていはゞ。佛おしへのごとく身をもち。あまねく衆生を濟度するを道心者とは申也。

世の善惡にかまはずと云は。念佛の行者はぢひ利益をすまじきにや。答曰。四十八願の次の詞にあまねく大施主と成てもろくの貧苦をすくはんと彌陀如來の説給へり。又ぼさつ行にも檀波羅蜜とて布施を第一とし給へり。くわんぎやうには佛心とは大ぢひにして見もしりもせぬ無縁の衆生をすくひ給ふと有。念佛は大善根とし。だうたうを立。僧をくやうするは念佛の功力にあはすれば小善根なれ共。福徳の因縁とて還來穢國衆生濟度のために極樂より又娑婆界へ出る時。位高き身と生れ。福徳ある壽命長遠のむくひに成候也。もつとも往生淨土の他業に成と觀經の中品下生の所に説給ふ。山たかけれ共しぐれを嫌はず。善根はつむをいとはず。人々相應の慈悲を行じて。往生極樂のためとえからすべし。是ぢひ心

を以て貧苦をすくはぬは大欲の盛なるかゆへ也。人生れたる時に無一物なるにてしるべし。財寶はぼんなうのあつまる所也。前世にぢひを行じたるむくひにて今生富貴なれ共。しうぢやくして重欲なるはぢひごくの種と成也。萬事に執心をなさず。念々を思ひ捨るを佛法の肝要とす。法尙應捨とて佛法をさへ餘り欲ふかくねがふべからずと佛のたまへり。二代他阿上人も名號の外に臨終を求ず。しやうかうの中に往生をとげる也。又云。恒願一切臨終時と心得て。南無阿彌陀佛と唱て後念の用ざる也と云云。

一遍上人初は天台の修學をし。後には禪門に入てさんがくをし給ひしかども。只學者一人の成佛にして。あまねく衆生のように成がたき事を思ひて。念佛の行者と成て國々を遊行して萬民を勧め給へり。其時よめる。

證とはさとらてさとるさととりなれ
さとる了は夢の了りよ

此歌は念佛を往生と決定するを了とよめり。人の一生は夢也と佛の説給へり。其夢の中に迷ひの心て座禪工夫するは夢の證にして。眞實の佛の覺には非ずと也。此肉身をばはなれねば。佛の覺は得ぬ故に。往生淨土を願はしむる也。

一遍御歌

佛そと名あるはあやし佛には

ほとけと思ふ心あるかは

生なから佛の道はなき物を

南無阿彌陀佛の聲に生れよ

觀佛三昧經に云。釋迦如來の父大王にすまめて念佛三昧を行ぜしむる時。父王ののたまはく。佛地の果徳には眞如實相第一義空也。何に依て念佛を行ぜしむるやと仰られしに。佛答て宣く。諸佛の果得無上深妙の解脱あれ共。凡夫の行ことあたはぬゆへに。今父王に念佛を行しむると宣り。しかれば佛の出家の初。彌陀の名號を以て父母をすくひたすけん事を

ほつし給ひしことをしるべし。

般舟三昧經に。三世の諸佛彌陀三昧を念じて成佛し給へり云云。佛母經に曰。釋迦如來の本意は念佛往生を説ん爲に五濁の世に出給ふと云云。般舟三昧經に云。三世の諸佛も初は凡夫也。佛になることは彌陀の名號にすぎたるはなし云云。

稱揚諸佛功德經の下卷に曰。阿彌陀佛の名號の功德を讚嘆するを信ぜずして謗悔ものあらば。其答により五劫の間地獄に落て諸の苦をうくべしと云云。和讃とは何事ぞや。答云。經は佛の御ことば。論はぼさつの御ことば。釋は人師の詞也。是等の三教を日本の詞を以てかな文字にしてしるしたり。人のしりやすからん爲也。

經と念佛とのくどく何れがまされる。答曰。念佛鏡に曰。經をよむは藥の方をよむがごとく。念佛を唱るは藥をのむがごとし。醫書をよまねば藥をしらね共。病をいやす。急用には先藥也。故に在家の人も

出家も常に念佛のみを申候也。又經をよむことは實を數るがごとし。實を數ることは多けれ共貧苦を救ず。實を用ふる事は多からね共貧苦をすくふと云云。

彌陀正依經に曰。みだは三身に非ず。別因正覺して衆生にかはつて苦行すると云云。いかなることぞや。

答曰。佛に三身と云は。法身は大日如來無始無終の佛也。報身は彌陀也。有始無終の佛也。應身は釋迦なり有始無終の佛也。此三身の中に彌陀に本覺と云は理智冥合の佛也。始覺の彌陀と云は十劫正覺して四十八願をおこし給へり。正依經に三身にあらざとあるは此にて知べし。儒道にて云時は。無極大極兩義聖人也。又日本の神道も一源也。天神七代地神五代も別て云時は十二光佛なり。總して云時は天神七代は過去七佛也。地神五代は五智の如來也。一五體五輪を佛とすること如何。答。地水火風空の五と別々にすれば五智の如來也。地大は大日如來也。法界體性智と云也。水大は阿闍佛也。大圓鏡智

と云。火大は寶性佛也。平等性智と云。風大は阿彌陀なり。妙觀察智と云。空大は不空成就佛也。成所作智と云。

淨土門の安心に三心と云事觀經に有如何。答。一には至誠心。二には深心。三には廻向發願心是也。叡山の佛空の西土往因抄云。三心とは本願を信ずる一心也。人のしり安からん爲に三つに分たり。深心とは信心也。是をいはん用也。本願の信ずるに誠成を至誠心となづく。淨土を待て疑なきをば廻向心となづく。觀經には三心と云。彌陀經には一心不亂と云。天親菩薩の淨土論には世尊我一心と云へり。皆一義也。扱信心と云は。凡身を以て初て彌陀を信じて往生を願へと云には非ず。十劫正覺の昔より衆生の往生は南無阿彌陀佛と決定したりと覺悟のすはるを眞實信心と云也。

淨土門は法華經より前の法なれば小乘經にや。答。大乘無量壽莊嚴經に云。念佛の行者は小乘に非ず。

我法の中にをみて第一の弟子と名付と説給へり。

淨土の三部經に弘誓の舟のこと明し如何。答。無量清淨覺經に曰。阿彌陀佛と觀音勢至と大くはんの舟を生死の海にうかべて。娑婆世界につけて衆生をのせて西方に送り付給ふと有。法然上人の曰。ぼんぶはちへのまなこくらく行法のあしもあれたり。大くはんの舟にのせて西方へおくり給ふを易往といふ也。

九品の淨土のかはりめいかゞ。答。善導大師の觀經の疏の玄義に曰。上品上生は大乗極善上品のぼんぶ也。上の中は大乗の凡夫也。上の下は大じやうの心をあこす衆生也。中品上生は小乗戒をたもてるぼんぶ也。中の中は無善の凡夫也。一日一夜の持戒也。中の下は佛法にあはざるの人也。世間のぢひを行じたる人生るゝ也。下品上生は佛法にも世俗にも善根あることなくして。只あくを作る人也。りんじうの時十聲にても一念すれば化佛菩薩念佛の聲をたづね

て來り。地ごくのめう火もみだの光明にたいして消ると也。凡夫のきにしやべつ有故に。淨土に九つの品を説給へり。九品ともに念佛往生のよし大經下卷の初に説給へり。

流通分

一法然上人一枚起請に。念佛を信ぜん人は縦一代の法を能々學すとも。一文不知の愚鈍の身になして。尼入道の無智の輩になして。智者のふるまいをせずして。只一向に念佛すべし云云。是はいか成義ぞや。答。ゆいきやうくんに曰。しやくそんの入滅し給ふは病を除がごとし。我身は捨べき重あくの者をかりに名付て身と云。此身を滅と云は怨賊をころすがごとし。喜の中の悦也といひ。自受用身の釋迦如來の御身さへ娑婆の肉身なれば重惡の者也と宣へり。まして凡夫はいかに學文をし經論をほのかにならへ得て。口にはむりやうの法理をとくと云共。其身は凡夫なれば目に見耳に聞鼻にかぎ舌に味身にふれ意に

も妄念おこらぬことなきゆへに。尼入道に同くて念佛を申てかりの身にかの五欲の起るをおどろき。念々往生を願べき爲也。選擇集に曰。花嚴宗の元曉の遊心安樂道に云。淨土宗の心は。本凡夫のため。かねては聖人のため也云。所詮念佛さへ申ぬれば。たかいもひきいも彌陀如來と同じ位の佛に成候事。譬ば清くすめる水も濁てけがらはしき水をも。流て大海に入ぬれば。一つうしほに成がことしと也。

後序分

先師一花堂乘阿尊は。遊行二十九代上人の法の弟子也。僕は仕る事年をへて宗門一流の安心を決定し。血脈を請たるとかたるを聞て隨喜し欣慕せし人の爲に此一卷をしるし集侍り。假名文字を用はしり安からんが爲也。何れも經論釋の詞を引出て證據とし侍り。是を見て一念發起せん人は。一蓮託生をこひねがふといふことしかり。

時宗安心大要

一離三業念佛 遊行七祖詔何の曰。三業と云は佛を敬い口に佛を念じ意に佛を信するを云。口に稱有りとは云はずして念と云は。三業共に口業に有ることを明す。凡夫の身之三業を起すは。離毒之善とする故に。不生不滅之彌陀之三業に歸命して。身の功を用ずして己が三業を離る也。此信決定する時に佛の三業と行者の三業と一體不離之位を親縁近縁と名く。疑ふこと莫れ。理性は二無し。此故に事相も又一つ也。念々相續して懈たらざるを増上縁と云也。行者に有ては歸命と云。佛に有りては三縁と云成り。
一。南無之二字を善導大師之玄義に釋して云。南無とは歸命亦是發願廻向之義云。歸命と釋せる故に南無之二字を衆生に取る也。歸命とは凡夫之身命を彌陀如來之身命に歸入すると云成り。一遍上人之曰。小水を竹に入てをけば干乾也。大海に入るれば日で

りにも干かはくこと無如く也云。身之功を立て佛に向信し行じて往生せんとするは自力にして他力に非ず。信も不信も不知東西をも辨ぬ凡夫之爲之法成れば。彌陀如來に打任せて唱れば佛に成ると決定する是を信心とは云也。此故に十八願之至心信樂と云文を善導大師は稱我名號と釋し給えり。
一。三業を離るゝ念佛と云は未心得。口と身と心とを離れていかように願ひ候はんや。答曰。南無之二字を衆生とする時は。根本より佛と衆生と一體にして離れざる體名號に顯れたり。故に一念發起する時南無と唱るにはや極樂に往生之位定り。故に十惡五逆之身乍ら彌陀如來之請取給ふ御誓十劫正覺之四十八願に決定しぬる上は。御本願に任せ生乍ら死て此身を佛に歸入て廻向して我身之功を用ざる也。生乍死するとは我を我とせずして佛に任せ奉るを云也。然者佛に奉たる後は我心則ち南無阿彌陀佛成れば。息たえる時は南無阿彌陀佛が極樂に往生する成り。

一。南無之二字之こと。南之字之作り様。十は十方世界。十方衆生。十惡。十善に形取る也。圖は古螢切。林の外曰圖。象遠界と註せり。十方世界之圖也。扱又なかの五の點は立の二は天之陰陽。横之二は地之陰陽。其中有。豎之一は天地萬物之初りたる根本也。一發句とも本來之而目とも眞如實相とも云所にかたとれり。是則五行也。木火土金水と次第相性する時は。天地萬物を生ず。地水火風空と相刻する時は萬物滅す也。目に見て體有る物は必ず滅す。此滅する位を無之字に形取る也。無之字之下に火を書も火には殘る物無く亡ふる故也。然者南無之二字は生死とも陰陽とも晝夜とも取る也。此南之字無之字に成る位に阿彌陀佛顯るゝ也。人々此受たる五體を離れねば眞實之佛を見奉ること無く。此體を離れば眞實之悟りも開けざる成り。

一。佛之御本願に任せ。我身命を佛に歸してより後は。我身命を佛の身成故に煩惱即菩提也。生るも死

も佛の御計成れば。生死即涅槃なり。

一。佛に身命を譲り奉りて。我を我とせざれとは教え被れ候得共。衣食住之三の欲は身のあらん限り捨難く侍る。

答曰。衣食住之三を晝夜之願として結構を求る故に我身を惱すなり。さのみ惱と云え共人々之満足すると云事無し。欲に極り無き故也。佛神に祈ると云共自由成らず。過去之因果次第也。故に佛に歸命してより後は。衣食住御あてかいに任せ。富る身成らば富りに相應じてをこない。富るに心を著すること成かれ。千金をもてる人の萬金に成さんとするは大欲成り。地獄之種也。又まつしき身はまつしきに隨て行て。なつしきに心を惱すこと無かれ。命あらん間は盛相或る食物にてもうえを助。麻之衣にても寒を防がんは富人と同じ樂み成り。身に觸る欲にて錦繡を願。舌に觸る欲にて珍味を願成り。息のあやつり絶ゆる間。百年を過すとも夢之間に移り變る。金銀をもと

むこと山之如しと云え共我を惱す煩惱也。一遍上人曰。千疊萬疊たゝみ一疊成らては身をゝかす。千披萬杯も飯一杯成らては用無し。

一。一念彌陀佛即滅無量罪現受無比樂後生清淨土と云文も。先現世を本とせるとや。答。此無比樂と云は晝思こと上下萬人ともに皆輪廻之業地獄之種成る事を恐れて。常に極樂を願ひ念々種名を心として世間之善惡是非に心を付されば。此世之苦樂を通るを無比樂とは云也。此世之樂と云は苦のやすまる間を云により。眞實佛之樂にかはれり。如是心得て是非ともに通るれば祈り願はざれども世之笑難も無く苦樂を離るを無爲之樂とす。扱て露之命之消やすきこと出る息の入をまたぬ理りを思て。念々臨終と心得ぬれば。往生極樂は決定する也。

一。此身を常に有物と思ひ。千秋萬歳と祈り。我さる能くは人は何と有らんと云心より。現世後世も佛神之冥慮に背き。賢き難有のみ成らず。後世は

地獄に墮ること疑無し。無病なる人も頓死す。生子も死する世の習也。何としても七十八十を過ぐすは稀成り。譬百年生ても僅か三萬六千日也。昨日今日の間に一年の過るにて知べし。但だ一生涯は電光石火とて稻妻の光り火の光りの間に譬。貧福は佛天之御あてかい次第にして。夫に心を著すべからず。常に目の前の無常を思て唱るを臨終と心得て念佛すべし。

一。南無は能歸の心也。衆生に取る阿彌陀佛とは所歸の佛也。名號を唱て餘念無き位。則生れ乍らの往生也。是を己心の彌陀とは云也。佛と衆生と一體に成り。迷と悟りと二無き故也。

一。一遍上人の曰。世の人思はく。自力他力の理りを能く知り。我が心が心を願して他力本願にすがりて往生すべしと云り。是は一向初心のこと也。我こそ法を聞得て往生を願ふと思は三毒の離れざる心のしはさにて我慢憍慢也。自力も他力も打忘れて唱れ

ば佛に成ると計りにて。無我無心に成るを本とす。是を大經には法藏菩薩は住空無相無願三昧に住すと説給えり。或は通達諸法性一切空無我専求淨佛土必定如是利とも云り。又我の心を本として我真實に佛に向信し行ぜんとするは。三業起行多慢と釋し給ひて嫌侍り。

一。本分の心は流轉せず。妄執の心が流轉する也。是一遍の御詞也。本分の心とは世の善惡をわかつ無爲成る心を云ふ。此心の移り乘たる物を眼耳鼻舌身意と云也。此六の物の爲に執著而本心をくらし邪に成る心の妄執の作用に百廿の心を説給えり。其中に狗心と云犬の如くいがみ廻り口を養ふを鼠心と云。僅に口を養はん爲に物をそこのを云。かの本心と云は。根本は極樂より出たる佛性也。此佛性を人々具足する故に佛には成と也。譬は火燧に火の性有故に打てば出る如也。此本心は神靈有りて體無し。無ものか残て不生不滅にして有る也。其の神靈の化用

は道理也。世果也。善惡ともに流轉の種也。眼に見るにも執著を成さず。耳に聞も鼻に香ぐも舌に味も身に觸るにも意の動にも。理に叶て最負偏頗無く。邪しま成らぬを佛心の化用とす。罪の極りたるは殺か道理成り善根也。是を助くるは惡業也。又助かるべきかろき科の者を殺も惡逆也。善惡ともに道理に叶べし。邪淫戒と云は我妻を愛せずして人の妻を愛するを云。妄語戒と云は無きことを言掠むるを云。一切の戒法皆道理に背きたるを我導は主人公也。世の善惡津加い者也。善と惡とにかた墮て主君とする道理をくらす心のみ盛に成り行故に流轉する也。一日一夜に八億四千の妄執煩惱の起るを佛のあはれみて。念々稱名に其罪を亡して。現世も後世も御助け可有との御本願有難き大慈悲に有らずや。

一。諸宗に改悔懺悔を本として萬の罪を亡し候。答念々稱名常懺悔と説れて。念々に稱る名號にまさる懺悔無く候也。

一。臨終を大事として常に口馴ずんば。臨終の念佛成難からんことをおそれ又病におかされ。臨終正念成らずして。念佛せざらんことをおそれ。又一念妄執に引かされ。妻子珍寶に名殘を惜み。念佛をば忘れて惡道に墮らんことをおそろ。是行者の常にうれひ也如何。答。阿彌陀佛十劫以前に一切衆生の往生を南無阿彌陀佛に決定し給えり。御誓願を聽聞して遠切より此方六道に輪廻して我力にて成佛の難成を。たやすく御助け有に打任せ。始て南無と佛に歸命し奉りたる一念に。はや極樂に往生の決定する也。一遍上人の曰。一念に往生せずんば無量の念にも往生せざらん。善を成すも一念成り。惡を作るも一念云云。然は此身を佛に廻向し奉る時が臨終也。其後に命の存らる候は佛に奉りたる身なれば。佛の御計ひの儘也。然ば我身は佛の御身と成しぬる後は。平生の稱名は念佛が念佛を唱る也。凡聖一如にして佛と衆生と一體不離の位也。息の絶ゆるを待より外のこと

無ければ念々の念佛則臨終也。

一。我身命を佛に譲り奉るの信心決定の後も。猶我儘の欲心妄念は命の有ん限り止むこと無しと見えたり。然ば凡夫に不相應の安心に有らざらんや。答。譬は奉公する人主君の命にそむき。我欲心をほしひ儘にすれば大に惡し。我身は主君に奉りたる心を得て私の働きを止め。いかやうにも主君の仰に少も違ねは御恵みに預り。子々孫々迄安穩快樂成る如く也。此世は夢幻の間成るに。萬年も生んことの様に思ひ。見る物聞ものに欲心妄念をこし。無理非法の事を工み。人を掠め我身を達てんとする故に。佛天の罪に當りて受難き人身の定業を待たずして。横難横死の有のみ成らず。來世は地獄に落ち。長き苦を受んことをおそれて。佛の御誓に任せ奉る上は。我身命は佛に奉りて。我私の振舞は生々輪廻の種成りと思ひ留り。佛の戒め給ふ欲心妄念の世間の業に心を染めざれば。惡事災難濃來る可き便り無くして。祈ら

ざれども現世安穩也。總じて人の身は木火土金水の五也。此五を離々になす時は。惜欲最愛など云欲心妄念は一も無し。其源に背き其根本無きものを我身に願候故に。此世に災難來り。來世には地獄の種と成る也。其根本の如くに何心無く世間の妄執に心をそめぬ様にせんとならば。此身を佛に歸命して。我身をば我儘にせず。一切の望を叶えざる可し。

一。歸命と云歸命と云ふは同じことにや。

答。同じこと乍ら少しかはり侍り。彌陀如來の本願を聞に。愚癡暗鈍の淺間敷我等を大慈大悲の御憐みにて一念歸命せば。たやすく助け給ふに決定せる難有に。此浮世に早く離れ。不退の極樂に往生を願計り成れば。則我身を彌陀如來に打任せ。生乍佛に譲り奉るを歸命と云。歸とは歸依也。歸はよするとよむ。依はよざすとよみて。任せゆずると註せり。我身命を佛に任せ。春日の臣下ゆづりと云心也。中臣秋にも依の字を依とよめり。日本記神代卷には任の字

をよざすとよめり。扱て右の如く歸命して後には。佛の戒め給ふことをば打すて。佛の教系に少もたがはぬを歸命者と云。此時は命は命也と註して法度也。佛の掟てに歸してちがはぬと云義也。是を善導大師の御釋にも隨順佛願隨順佛意と有り。

一。一遍上人の曰。佛法にはあたひ無し。身命を捨るを以てあたひとす云云。此は念佛門のみに非ず。諸宗同じく此心也。法花經の壽量品に曰。一心欲見佛不自情身命と有り。此心を勝命法師の讀歌にかりそめの憂世計の戀にたに

あふに命を惜みやはする

玉葉集に入たる歌也。離三業の念佛の安心に。佛に譲りて身命を我物とせぬも同心也。

右の一卷は遊行廿九世法の弟子一華堂老師に尋。條々を記し付候。高祖一遍上人往昔難作能作の修行修學有りて。三國傳來の聖教を見。其上熊野權現の本地彌陀如來の利現を蒙り。三業の外の念佛と云安

時宗安心大要終

心を領解し給ひ。普く衆生を濟度有可きの神勅を受けて道體を一切衆生にあたる。身を我物とせずして諸國を廻り。たやすく衆生の往生する事を勧め給えり。加様の有難き安心を聽聞し侍ること。偏に元祖上人の御出世の恩徳。並に代々相承の佛知識の御慈悲に依れる者也。此御恩徳を報する勤めは。ねても覺ても南無阿彌陀佛と唱可し。

時宗要義集卷上

第一神勅問答章

問。何故名神勅宗耶。答。鼻祖一遍上人。出淨土門後。建治二年夏。紀州熊野山於證誠殿。蒙念佛弘通之勅。負本釋名號。普遊行扶桑六十州。勸念佛故。名言神勅念佛宗。問。此義難依用。凡本朝神國也。以神道真入道。天地開闢。陰陽之二神現。已來。風不為變。代々。帝此道。受繼事明。今汝名神勅。弘念佛。天竺之教。異域之聖道。此教神道。忌所名神勅。奇怪亡言。取其證大和姬世記中。引實紀本記曰。吾國。屏佛法。息。依之延喜式中。七言忌在。禁祕抄云。內侍所。僧尼。贈不獻之。又云。神事六種。忌中。強忌。惡佛事云云。爾。何放盞之語。永不。恐神慮。哉如何。答曰。所難。趣。一往。有其理。強。非可遮。至。再往會之。汝。所難。神道。一偏旨。著神風。故。不知。本地靈神。失垂迹。光。忘。利物。昔。譬。失。本月。似。取。影。月。其。所以。體。用。二。物。中。吾。國。

立神道神事一往化用也。今以本地。昔思。垂迹。今。佛。法。者。絕。人。倫。生。死。愛。道。教。且。似。破。入。道。故。愛。道。萬。物。生。根。元。天。地。自。然。以。愛。道。教。本。時。自。愛。情。絕。倫。教。其。場。不。居。以。之。今。日。神。道。以。佛。法。假。示。忌。和。光。垂。迹。不。明。方。便。利。生。其。事。不。可。有。經。基。兩。部。習。合。抄。云。神。代。事。皆。以。內。證。慈。悲。哀。萬。物。故。內。宮。胎。藏。界。報。身。妙。容。外。宮。金。剛。界。法。身。御。形。三。身。圓。明。萬。物。恒。乘。移。照。故。內。宮。胎。藏。四。重。曼。荼。羅。也。外。宮。金。界。界。形。五。智。習。大。日。法。身。智。體。彌。陀。報。身。果。名。忌。詞。產。屋。言。生。氣。五。十。日。忌。也。死。言。死。氣。五。十。日。忌。如。是。忌。事。死。生。□。生。死。始。生。共。忌。也。是。不。生。不。滅。道。理。顯。示。佛。道。云。其。上。內。證。不。忌。佛。法。取。現。證。依。釋。書。聖。武。帝。后。光。明。后。宮。合。心。十。六。丈。欲。鑄。舍。那。像。上。勅。云。吾。國。神。國。也。異。朝。□。聖。形。大。神。宮。恐。在。僧。以。行。基。窺。託。宣。旨。不。忌。故。奏。之。左。右。疑。云。行。公。僧。職。也。再。以。臣。可。窺。則。遣。臣。窺。託。宣。不。異。依。鑄。佛。像。今。南。都。大。佛。是。也。何。以。唯。一。屈。情。本。地。之。破。內。證。乎。問。熊。野。山。者。

先代舊事陰陽本記云。陰神伊弉册尊生火神神去。即熊野葬。有馬村云。又云。日吉鎮座記。客人宮。熊野。同體。伊弉尊隱。后。大日靈尊其靈。有馬。以湯灌穢。奉。上天。敬。隱御後。即今。熊野山是也。爾者神。初隱陽之根元。萬物母。是神道本源。此神何。忌神事。以異域。教。託。穢物僧乎如何。答。此難唯一。致。偏局。所也。誰。謂。熊野。非伊弉册。今本跡。分水波。迹。是伊弉册。初。人物。根元。其本地。報身。果體。彌陀。報身。者玄義曰。因行不虛。定。招。來果。以果應。因。名。為。報。安樂集曰。備。修。萬。行。能。感。報。佛。果。以。因。酬。果。名。曰。報。身。證。真。私。記。云。修。因。行。感。果。報。故。言。報。身。報。酬。萬。行。本。覺。顯。照。智。惠。明。上。冥。法。身。下。契。衆。機。云。今伊弉册尊者。陰陽互通。教道。五行五色種々人物。產。事。彌陀報身。以種々因。如。生。種。々。果。是。即。祕。內。證。慈。悲。迹。垂。粟。散。邊。土。化。陰。神。生。萬。物。種。子。又。欲。施。起。世。悲。願。顯。南。紀。熊野山。以和光方便。本朝。施。本地利益。此故。鎮座之地。呼。名。無。漏。那。豈。有。漏。境。陽記云。室那在。□行熊野。本宮名。

證誠殿。阿彌陀經。六方恆沙證誠護念。故。奉。敬。證誠殿也。三。御山。十六觀經。中。標。三。心。十二御寶殿。無量壽經。顯。十二光佛。故。當。山。一。度。詣。人。永。不。還。惡。趣。是。成就。如。是。功。德。莊。嚴。御山。故。云。又。肖。柏。番。神。記。南。紀。熊野山。兩部山。依。勅。賜。大。靈。權。現。唯。一。賜。權。現。不。開。例。爾。汝。何。以。唯。一。旨。徵。兩。部。義。乎。既。云。兩。部。求。本地崇。垂。迹。明。也。今。案。唯。一。神。事。化。用。神。通。一。往。也。神明。本。意。非。忌。佛。法。取。其。證。解。脫。增。賀。惠。心。大。神。宮。依。神。託。發。道。心。事。本。朝。僧。史。見。空。海。渡。支。那。時。詣。字。佐。得。託。最。澄。乎。依。日。吉。詔。開。一。乘。止。觀。山。是。神。明。非。冥。助。爾。何。吾。祖。一。遍。熊。野。依。勅。弘。念。佛。豈。妄。說。哉。近。世。長。秀。如。俗。說。辨。汝。同。局。情。獨。哀。自。他。不。恐。惡。是。謬。大。故。也。矣。從。古。依。諸。神。冥。慮。發。善。提。心。有。祖。師。祈。冥。慮。蒙。神。勅。建。宗。旨。吾。祖。獨。也。將。來。宗。傳。來。故。可。謂。異。域。教。吾。宗。依。神。助。弘。異。朝。法。故。神。道。可。難。發。便。高。倉。治。天。空。師。依。觀。經。疏。往。生。要。集。唱。專。念。宗。徒。弟。善。信。立。一。念。義。開。一。向。宗。日。蓮。下。山。門。依。法。華。首。

題。立。題。目。宗。如。是。解。經。論。領。解。見。性。立。所。宗。也。故。欲。弘。妨。難。多。空。師。道。台。嶺。隱。洛。黑。谷。盛。弘。念。佛。山。門。僧。徒。怒。之。時。帝。願。念。佛。停。止。宣。旨。上。山。僧。恐。逆。慮。令。空。公。遷。讚。州。善。信。流。北。州。越。後。又。弘。安。初。日。蓮。相。州。鎌。倉。於。片。瀨。欲。弘。首。題。副。權。時。賴。不。用。後。極。樂。寺。良。觀。諍。權。不。許。搏。蓮。籠。石。獄。終。述。安。國。論。破。四。宗。故。欲。及。害。是。雖。弘。法。自。己。以。領。解。開。宗。則。魔。軍。礙。之。吾。祖。捨。自。己。領。解。神。國。屏。佛。教。忌。僧。尼。中。仰。和。光。冥。慮。欲。奉。驚。內。證。後。宇。多。治。天。詣。熊。野。山。祈。念。佛。最。要。顯。本地。慈。悲。悲。憐。却。末。最。下。群。類。示。無。上。深。法。稱。名。傳。觀。進。方。便。巨。益。故。此。宗。立。四。百。有。餘。至。今。立。熊。野。神。輿。先。遊。行。扶。桑。六。十。州。諸。神。為。念。佛。護。法。神。知。識。補。佐。行。化。世。世。帝。敬。之。代。代。將。軍。崇。之。故。貴。賤。如。蟻。集。受。化。者。不。能。算。數。是。非。大。權。冥。慮。故。自。祖。師。行。化。至。今。日。更。無。妨。難。傳。燈。之。知。識。神。乘。移。故。內。外。魔。亡。影。逆。徒。陰。跡。是。併。神。佐。功。擁。者。也。超。世。別。願。稱。名。可。施。退。代。依。勅。立。宗。旨。故。號。云。神。勅。念。佛。宗。矣。

依。神。勅。開。宗。旨。故。名。神。勅。宗。爾。釋。迦。的。傳。不。宗。何。傳。來。佛。宗。敬。之。答。此。難。狡。白。蒙。勅。立。宗。本。朝。弘。通。之。念。佛。彌。陀。本。願。釋。迦。的。傳。金。口。凡。傳。宗。雖。的。傳。依。教。分。宗。故。人。師。所。立。也。吾。宗。日。本。雖。開。宗。神。勅。故。非。人。師。所。解。是。二。尊。真。傳。也。其。所。謂。垂。迹。前。且。神。明。和。光。源。釋。迦。彌。陀。二。尊。也。吾。祖。熊。野。受。勅。後。詣。大。隅。八。幡。蒙。示。八。幡。釋。迦。熊。野。彌。陀。番。神。記。云。南。行。阿。闍。梨。如。法。經。時。八。幡。現。吾。舉。田。靈。神。昔。靈。山。釋。迦。也。告。云。依。之。傳。來。宗。傳。傳。故。的。傳。吾。宗。神。勅。故。直。傳。也。本。朝。師。渡。支。那。傳。法。是。不。為。辛。哉。吾。師。不。趣。支。那。唯。仰。和。光。方。便。信。本地。冥。慮。遠。不。遊。十。劫。正。覺。佛。直。口。授。末。法。萬。年。餘。經。悉。滅。流。通。法。燈。國。師。年。譜。師。從。宋。歸。居。鷲。峰。山。時。時。熊。野。八。幡。來。說。禪。師。語。徒。曰。宗。傳。無。門。不。異。云。如。是。何。不。傳。故。難。敬。是。何。謂。速。退。可。恐。神。慮。以。神。勅。弘。通。故。師。行。化。間。諸。神。受。法。味。隨。喜。守。護。事。詳。僧。史。詞。傳。諸。神。守。護。者。熊。野。迹。伊。弉。册。尊。本。朝。三。千。七。百。廿。二。社。神。母。也。故。吾。法。守。

護歸敬之事勿論也。本阿彌陀佛。此尊無量名。無量體。無量功德在。故諸佛依此佛。唱無上菩提。是即諸佛正覺母也。故般舟三昧經云。三世諸佛依念佛三昧成等正覺云云。又念佛六方諸佛證誠護念。故小經一切諸佛所護念經說。諸神本地皆諸佛菩薩。而本迹隱顯助化其理明矣。爾者入時宗。僧尼。先開宗元由。深生信心。知識奉敬。意不可移他所道場矣。

第二時宗名義問答時宗得名之章

問。何故名時宗耶。答。時者臨命終時之義也。佛教之大綱。以出離生死為最要。到涅槃無為果。為至極矣。凡出離生死。到【考】下有臨終一念之時。故此宗之意。厭穢欣淨。為本意。恆願一切臨終時存。是時之義也。宗者。法華玄義曰。宗者要也。明曠菩薩戒疏云。宗者要也。從始至末。依體護持。趣期果名。為宗。爾者一經。依體護持。命終時。期往生果為要。故略云時宗。委可謂臨命終時宗也矣。問。依真宗要法記。先師舉三義為宗名證。一。宗家玄義分造流之偈云。

道俗時宗等文。二。大經下曰。我以慈悲哀愍特留此經止住百歲。文三。小經執持名號若一日乃至一心不亂其人臨命終時。文。以之今宗為得名。爾者以三義可為宗名。何以第三義局今為宗名如何。答。先師舉三義為宗名時。分別傍正。而以第三義為正義。故今為名問。第三義為正義。意旨如何。答。第三義。今宗名。文義契當。故為宗名。問。初以二義何為傍義乎。答。各各淨土經釋。故雖並不相違。前二文義有便。文今違宗名故。舉為傍義。是當流之相承也。光淨等師。前文可憑。二義。內阿真光相州麻流義之祖。淨此等師。異流。故不知當流相承也。故舉不能細判矣。問。何故名時宗乎。答。時者六時。義。衆者大眾也。即通四部。故。宗家道俗時宗釋矣。集會六時。禮佛。願西方名時宗。【傳通記】玄記釋。鈔註。道場。問。時宗名義局。本朝歟。通中華。歟如何。答。既道俗時宗。云。可通中華。問。以何知通中華。答。宗家善導於長安集衆禮六時。東林慧遠。緇素共白蓮社。禮六時。故古詩。遠公獨刻蓮華漏猶

向山中。禮六時。是支那。行時宗始也。問。本朝得時宗名。始宗祖如何。答。不爾。本朝。相洲鎌倉泉谷淨光明寺開山宣阿真證國師。實朝公時。務時衆法用。是名往古時衆。今。薩州淨光明寺。從鎌倉遷。宣阿之開所法利也。建治頃。一遍依行化。歸時衆矣。今泉谷淨光明寺。四宗兼學也。出鎌倉誌。歸時衆者。尊任僧正集。見古錄。繁故不誌焉。宗祖依宗家行狀。道俗共六時禮讚。依故師之行法。可言六時衆。又依神勅約弘念佛。可名神勅宗。或依小經文。則名時宗。依文依義稱宗名不一準。如華嚴宗者。名圓滿一乘宗。又云能入法界宗。如天台者。又名法華宗。或名本迹宗。如宗家大師依觀經。見彼世界清淨國土。文。名淨土宗。又名真宗。或釋觀佛念佛兩三昧宗。天台宗下。【弘決】。大部補註四同。真宗下。一。同見開出。繁多故不記。

第三宗義出問答章

問。於宗有經論釋。三宗。今時宗者。三宗中。何乎。答。

三宗中。經宗也。問。爾經中。何經可云耶。答。依傍正傍。總可依一百落又部一代種種經。若指將來大乘經者。依六百三十七部二千八百八十三卷經。是云。傍依經。唯依淨土三部大法。宗家大師釋云。此觀經。彌陀經。無量壽經。云云。是云。正依經。問。於正依三經中。宗祖正依何。立時宗。宗義耶。答。總依一代別依三經時雖依三經。總依三經別依一經時者。依彌陀經。開宗義也。問。依彌陀經。開出宗義。祖意如何。答。付別依彌陀經有三由。一。者宗祖有緣經故。二者相傳經故。三者領解經故。問。別依時。彌陀經中。依何文立時宗。答。總依一經別依一句時。臨命終時四字也。於四字中。宗祖之發得。所憑時一字。此以一字攝二代立宗旨故。以彌陀經為有緣經。相傳經者。彌陀經。是無問自說。如來隨自意故。一經之始終。有執持名號。一法。爾者持名。一法。臨命一念之時。為臨終。稱名。截生死。致淨土之利。劍果故。熊野八幡之相傳。所唯小經。執持名號。一心不亂之外。無別事。兩神

以本地大悲勅持名。故云相傳經。領解經者。三昧發得。經故也。宗祖上人初有台嶺。讀止觀。見巍巍。還可有自損損他。失下橫川。讀往生要集。發淨土願志。故下山入洛。入聖達門。學淨土。十一年於之深。發菩提心。欣求淨土之志。外無他事。終辭出聖公利。遠走九州。字佐。八幡託。可詣信州善光寺。自九國下。詣善光寺。依如來告。元^考元^考治元年冬詣南紀熊野山。百日籠屋。權現託示念佛勸進方便。同二年夏。任託賦算勸念佛。詣熊野山。本宮證誠殿。權現直傳。因中萬行功納六字。果號。一稱益。施十方。與旨。時宗祖終發得三昧。故云領解經矣。問。付阿彌陀經一部之文。可立時宗。何依臨命終時一句立之如何。答。依神勸推宗祖意。臨命終時之句。收小經一部也。其所謂彌陀本願大悲。釋迦出世之本意。臨命終時。執持名號。出離生死。到淨土勸。故淨土經所說。皆有臨終之一時。平生稱名。臨終一刹那時。不忘失為故。云。小經云。執持名號若一日乃至一心不亂。其人臨

命終時說。爾者持名一法者。收小經一部。其益至極。臨終究一時故。時之一字雖言微。意廣理明也。大經三輩。觀經定散通說名號。世尊之安心。彌陀本願名號。故下三品逆惡。臨終時說。南無佛事。稱名。力用深。故造惡臨終之時。纔一念十念。依功德。生淨土。故持名一法有臨終一時又明也。故依臨命終時一句。從時一字。開宗旨。是全宗祖非私。熊野相承。上領解所開也。故天親。流支。玄忠。西河。光明。吉水。依深心。弘淨土。其深心一句。全攝臨終時一字。懇可思合。問。依教分宗。一經。綱要。宗旨。不同也。依宗教別。一代教相之批判也。於中三照五味。兩字八藏。是金口教相也。論師。人師。教相。差也。故依一一經。肝要也。靈芝云。一經。主。云義。須辨示。戒度記上云。以主釋宗有三義。一。獨尊義。天無二日。國無二王。二。統攝義。如網之綱。如來之到。三。歸趣義。星拱北。水口東。今經。主。備此三義耶。若不爾。立宗無功如何。答。宗祖所依。彌陀經者。一經。獨尊也。其故。念佛。彌陀如

來本願行也。以觀經之兩三昧。分獨尊。觀佛。淺也。念佛。獨尊也。其上十三定善之三福。上六品。散善。本願行也。念佛。獨尊。非本願。餘行。不可類。依之。絕待。流類。無獨尊。談。彌陀經。之非獨尊。釋尊一代之經卷中。獨尊也。其故。五千餘卷中。小乘經。雖免六道流轉。不免界外。流轉。大乘經。雖免內外二界。流轉。以自力。營自己。佛性。故根鈍障重。愚人難。叶教。末世。有教無人。有名無實也。依之。末代。以念佛。為獨尊時。小經者。以念佛。為一經。體。不說餘行。是隨自意之本願之故。於末世。獨尊明。又念佛者。此經之中。不可以少善根。說。亦大經。為得大利。無上功德。說。復云。大集念佛三昧經云。當知念佛三昧。則為總攝。一切諸法。云。或云。根本祕密神咒經云。陀字八萬諸法藏。三字之中。是具足矣。又。但能念號。具包眾德。釋念佛。中。統攝。無量功德。有即名體。陀羅尼。章句。諸佛名號。甚深法門之故。三字所攝。萬法也。是統攝。義明也。又如來一代。教門中。萬機得益。施用教。彌陀本願。念佛也。依大經。文。上

十四佛國大士。皆生極樂。下。止住百歲說。依之。至下三品。世尊說。十惡破戒。五逆臨終。業苦責。身心。火車來現時。勸此稱名。乃至十念。忽脫業苦。消滅火。神。移實報高妙淨利。是萬德所歸名號。生因本願。六字也。其六字者。彌陀經。總體。故歸趣之義。是明也。爾者一經。大綱。以持名。為要時。依教分宗者。自顯着。理在絕言也。問。依宗教別。一代。批判也。私曰。華嚴。立五教。批判一代。天台。立四教。五時。批判一代。真言。立二教。十住心。批判一代。今宗祖立。宗分。教時。一代。教相。批判如何。答。立教。相。判。一代。人師。所立也。吾宗。神勸。弘教。故。強。雖。不及。判。教。相。弘。通。念佛。彌陀。本願。釋尊。金口。三國。傳來。淨土。教。故。以。三師。教。相。判。一代。其。所謂。宗。祖。學。止。觀。今。時。難。證。知。入。念佛。門。是。准。鸞。師。難。易。二。道。天台。聖道。末代。難。解。知。歸。淨。土。門。是。綽。禪。師。准。聖。淨。二。門。宗。祖。發。得。已。前。深。信。讀。善。導。疏。至。發。得。已。後。示。時。宗。宗。家。疏。外。不。說。餘。事。尚。又。宗。祖。課。誦。依。宗。家。法。用。禮。讚。六。時。爾。何。不。准。宗。家。二。藏。教

相言耶。問。依三師教相判一代。可謂淨土宗。何謂時宗如何。答。此義不然。以淨土教勸念佛。謂淨土宗無妨。例光宅依法華。立三車宗。智者依法華立四車宗。俱以可謂法華宗。是以法華為宗旨。為宗旨故。今如其諸師依解領分宗義。人師執見。一宗大綱是同淨土教故。俱可謂淨土宗。是一往准三師教相時。如是可心得。再往不爾。淨土宗者。依觀經立宗旨。同雖三部淨土經。一經中說觀稱。分定散。隨自意隨他意故。正雜二行之說在。教相者。三師不同也。是人師之所立。故。三師意樂各別。故約教行證。成教相云云。十八通上。依彌陀經立宗旨。同淨土三部。宗旨門下。此經釋迦大師本願念佛說。不說餘行。故隨自意。非隨他經。依之但正行稱名。無雜行說也。大權神說。濁世凡夫。為執心穿固。但著有相者。彌陀本願以名號。廣可弘末世。宗祖上人。信此託宣。開宗旨。所謂。大權所託之名號者。六八中第十八生因本願稱名。釋尊隨自意念佛也。其隨自

意念佛者。即阿彌陀經。執持名號是也。爾彌陀本願大悲。釋迦出世本懷。令眾生離生死。往生淨土。本意。往生者。臨終時。大事。於此一時。誤則永流來。故。平生行業。顯臨終一念云云。人間一生。大事。不過之一期。極。臨死之時也。古德云。臨終切斷。一毛間也。故小經。是人終時。心不顛倒。說。世尊五百願。是眾生若臨終時。誓。宗祖願文。臨終時。心不顛倒。釋。故臨終一念。勝。百年業。若過無利那。生處應一定。諸師勸進出佛意。依之宗祖以時一字。為宗名。立宗旨。有此理。故。時者。廣。亘一代。教意顯密漸頓。至極。唯。有此時。其所謂。臨命終時者。豈。生死一刹那時也。是轉凡入聖。故。往生成佛。自他二力。異名。出離生死之義。以一同也。問。此義不爾。往生者。捨此生。彼。義成佛者。此土入聖。得果也。爾。臨命終時者。往生。義。成佛者。此土得果。故。聖道淨土。其。教門不同。爾者。何時。一字。亘一代云耶。答。如所難。此土入聖。聖道門。意。往生者。淨土門。意也。如是。談。能門前。於所門理。斷迷開悟。

以一同。故。二門。意。出離之當體。直。佛果也。不離生死。到果地之道理。不可有。然。今。時者。指出離時。故。依聖道門。此土出離之時。依淨土門。彼界得生出離之時也。又約諸佛出世。因行既滿足。超出三界域。指正覺時。其正覺者。發菩提心時也。故華嚴云。菩薩於生死中。發心求菩提。彼一念功德深廣。無涯際云云。於生死中。求菩提者。大悲大慈也。是即度眾生心。發起時也。故觀經云。佛心者。大慈悲是。以無緣慈。攝諸眾生云云。淨土論云。菩提心者。名大道心。是即願作佛心也。願作佛心者。度眾生心也。從菩提心。生度眾生心。故。諸佛。正覺。為度眾生。出現於世。此以正覺時者。諸佛出世時也。故法花云。唯以一大事因緣。故。出現於世云云。方便無量壽經云。如來以無盡大悲。於哀三界。出興於世云云。宗家釋云。故使大悲隱於西化。驚入火宅之門。灑甘露。潤於群萌。輝智炬。則朗重昏於永夜云云。亦約小乘三乘。聲聞依四諦十六行相修行。得三道四果。入無餘涅槃。云聲聞出離生

死時。緣覺觀十二因緣。一座成正覺。是云緣覺出離時。菩提。修四弘六度。經三祇百大劫。修相好業。滿足。自行。八相作佛。二利圓滿。後云示涅槃時。復依初分教意。捨聲緣善。局情。互令共學。三乘各經十地位。故。三十地也。聲聞。斷見思。入涅槃。獨學。侵習氣。入涅槃。菩提。出假利生時。經。塵點劫。斷不染無知。八相成道。入無餘。是初分教。三乘。出離時也。或依復分教。六位六十一地。階級也。六位者。十信。開教位。伏見思。十位。斷見思。明。空。論。十行。悟。假。諦。斷。塵沙。十迴向。修中道。伏。無明。十地。證中道。斷。無明。若依瓔珞經意。十地。滿心。立。等覺。一位。此位。最後品。無明。斷。故。經。多。劫。間。十地。下。十迴向。十迴向。下。十行。乃至。十信。終。下。成。凡。夫。是。長。時。故。歷。緣。退。境。是。云。倒。取。凡。事。又。重。發。心。從。十。信。乃。至。上。等。覺。是。云。入。重。玄。門。如。是。上。下。練。磨。畢。其。間。百。劫。修。千。三。昧。千。劫。學。佛。威。儀。萬。劫。化。現。成。道。後。最。後。品。斷。無。明。入。妙。覺。位。智。光。圓。滿。無。復。可。增。遂。成。道。是。後。分。教。善

薩出離時也。依性頓教真言化他門立地前地上位階。盛妄極細妄之微細斷妄執。登五智究竟高臺。開悟父母所生身速證大覺位。是真言離生死時也。天台修中下寂光。斷四十二品無明。難修難行。後入六即智斷一生可辨。是台家出離時也。禪家但莫增愛。盡人情洞然明白。毫釐不差。指人身醒悟見性成佛。是佛心宗出離時也。如圓教華嚴意。行布圓融二門在。行布門時。一障一理一切理斷證立故。沒因果海。信該果海之談淺深。依之初住。雖沒因果海。是自性分域也。二住已上增進。二利圓滿至。如是自證化他滿足。一斷聖智圓滿時。華嚴宗云出離時。爾漸頓二教。聖淨二門修行離異。至出離期。非經時劫。一念開悟一時也。故世尊成道晨。至涅槃夕。所說法門悉出離生死外無他事矣。二門本意。出三界流轉域。證果位佛智。少不過一時。故以時一字。攝一代立宗儀。其理顯著矣。雖然如是以道理立宗旨者。且一應化約化儀而以准人師所立之宗旨。傍

義也。今宗正義者。二神佛智傳本意故。仰神勸弘教。開宗旨也。其本意者。念佛一法。念佛者彌陀經。執持名號。一心不亂。稱名故。依此經開宗旨時。吾宗阿彌陀教宗。非釋迦教宗。爾何今日依一代化儀之教相耶。問阿彌陀教宗故。不依一代化儀。彌陀經者非釋迦金口耶如何。答。同雖釋迦金口。一代化儀。隨機之所說也。彌陀經者。彌陀隨自意外。不說餘事故。一經始終彌陀功德莊嚴。六方證誠之旨。至正宗正。說稱名。至流通說阿耨菩提。菩提者佛果也。末世濁亂衆生。稱名號。至佛果。流通施故。隨類應同。所說類不可混。以之立阿彌陀教宗。何有難勢。故玄秀一念發心集云。阿彌陀經之阿彌陀者。昆盧遮那法身本願力故。名號酬因之報身菩提心也云云。是使因衆生往生發本願。一念心也。故始覺佛依本覺衆生。成正覺時。成名號酬因報身。此故始覺彌陀。依本覺衆生。發願以名號決定往生時。始覺彌陀成。本覺法。本覺衆生成。始覺機時。始本合成。凡聖不二。

機法一體。顯南無阿彌陀佛也。故播州問答集。曰。南無始覺機。阿彌陀佛本覺法。故始本不二一體。顯南無阿彌陀佛也云云。依此義則酬因名號。依衆生本覺顯。衆生依酬因名號決定。指一念時。云臨命終時。是命終一念口稱之端的底時也。是即彌陀一佛已證。餘佛非所測故。大經云。如來智慧海深廣。無涯底。二乘非所測。唯佛獨明了。乃至盡壽猶不知佛慧。無邊際云云。小經說不可思議功德。爾今日依隨機所說立宗旨耶。去臨命終時宗者。名號酬因報身。以本願力。三世載於南無當念。以一念時為宗要。執持名號為本據時。彌陀經之外。別不求餘經證。同修淨業。勸念佛。雖彷彿淨土宗。彼人師所立。此神勸所立。彼依觀經兩三昧為宗。此依彌陀經。唯以獨一念佛為宗。其上彼釋迦教。此彌陀教也。論教主。彼穢土應身。此西方報身也。觀經隨他隨自意故。攝隨宜說。此隨自意本願稱名也。故似同不同也。問。此義不爾。空師立淨土宗。依順彼佛願故釋。何依釋

迦教云耶。答。空師雖依佛願釋。其所為宗要。依觀經深心一句。觀經三心者。能領解三心故。釋迦所說三心也。此所領解三心故。彌陀本願三心也。分別其三心有差異。不可同類已上。此下宗門一算之論議也。後學可著意。器朴論三心料簡。十八通。播州問答。所可合見矣。右宗開出下。玄秀和尚一通之切紙也。於武陵芝崎道場。是習受雖不可郭爾談。近世之時衆僧。入淨家學故。假令雖受宗傳法。本闡故。勸化等多分誤。有故。以秀公教。不得已書顯畢。

第四宗門安心無安心為證問答章

問。何故立無安心耶。答。機法不離一體之故。約機不立安心。此故不立。是三心者。為名號所具法。故令機。勸發非安心。立機法不二三心故。不約機安心云無安心。問。安心者。決定往生心。若無安心者。以何決定往生耶。答。無安心者。觀經中。分定散二機。以三福為正因。以九品為正行。時以下品。為無安心。是吾宗往生機也。說經中。下品下生者。或有衆

生作不善業。五逆十惡，具諸不善，乃至如是愚人。臨命終時，遇善知識，種種安慰，為說妙法，教令念佛。此人苦逼，不遑念佛。善友告言：汝若不能念者，應稱無量壽佛。如是至心，令聲不絕，具足十念，稱南無阿彌陀佛等云。一生造惡，愚人故。臨死，悶絕，顛倒。或亂或妄，不定。故知識高讚，勸稱名。速察開，火車，長柄，化為涼風。是即酬因報身，慈悲加祐，令心不亂力。爾如是逆惡人，有何安心耶。故立無安心也。證無安心，初引要法記。此宗機，末世衆生，五濁亂慢之機，不改接之條。生來無願惡人，造十惡五逆等。臨命終，死苦逼來，顛倒無量，而或散或妄，故遇善知識，十聲一聲唱，即預來迎，必定也。於其機，何可有安心乎云。問有云。今此機者，初重，卷愚鈍念佛，機可同。爾何吾宗獨取此機。定無安心耶如何。答。此難未在本也。初重，卷於往生投機，破戒念佛，大舉愚鈍念佛，機就之有十六。其中，下品造惡，機不舉之。今造惡機，愚鈍中，別機也。大論云。愚有二種。一頑愚癡。二邪愚

癡也云云。今依二種下品機。邪愚癡。邪見故。造無間業。何云。一同。是鎮西定逆者，十念滿機。問於當流。可定逆者，十念滿機。何煩立無安心耶。答。就之鎮西。同滅罪中。一念滅機，重淨心起故也。十念滅機，力微心劣之故。一念時分。一息切斷。五逆罪障殘。往生不遂。其所以餘流。三心具不生類。立。鎮西三心具不生類。不立故。逆者往生定十念滿。已上源譽。爾當流。意。先師十聲一聲釋。一念二念，不分差異故。不立十念滿。要法記。其上或一念或十念往生修因，決定業決定故。依之鸞師天台釋之。就心境時。業決定三。一在心造惡時。煩惱本虛體，故虛妄念也。稱名時，念佛。實體，故內外真實也。是說涅槃經。大信心者。即是如來心。生念佛者。一虛一實暗來去也。挑一燈。時。闇去迹無。闇對明得名。體本無。爾名號實體。挑明時。虛體罪障其消。無迹。是本罪惡生虛妄念。故。二在緣。造罪時。虛緣境。稱名時。彌陀因位。萬善萬行成就。名號中。納佛體功德。名體不離。緣真實境。

故。生因決定也。故先師云。自本定善之智。歸名號理。三心等安心。為所具名號法。唱一切機法不二也云。要法記。三在決定。造惡時，有間心有後心。平生後念相續時也。今臨終迴心，下三品共無間無後心也。於此時，惡心立還，間無。生因決定也。智度論云。命終一念善心生。無始善業引起。生善處云云。法句經云。其方有佛念，生其土。三決定論註同。翼解十疑論如是造惡人平生依妄境作業。至死決淨業。慈加祐故。最後願心無始起善業。一稱一念十聲十念。生極樂。善根福德因緣故。無上大利廣大功德。何疑耶。問曰。今無安心造惡機者。依釋迦教。定之可云耶。答。宗家云。定善一門。韋提致請。散善一門。是佛自說云。爾釋迦大悲。本懷。為說彌陀本願。其本願者。末世逆惡。為出離誓故。下輩中明說。六字名號。彌陀於因中。諸佛無他方便逆者。欲度。因願剋果。顯南無阿彌陀佛時。五逆十惡。火現滅。至佛果。其名號。本願念佛也。依本願念佛。滅逆惡機。故。今日應化。非所說。此故。不依

釋迦教。依彌陀教。當流定無安心機也。問。五逆十惡人。依本願生淨土故。今機依彌陀經定之。此義不爾。本願文。唯除五逆誹謗正法。在。爾何攝五逆機耶。答。是聖道家難也。以通理會。本願不攝五逆。今日佛何下品說念佛。本願攝故。逆惡往生。下說念佛。世尊若妄語。諸佛妄語。其上文。十方衆生。在。十方衆生中。何無五逆十惡。聞提誹謗機。又依文。不取正覺誓。後唯除五逆誹謗正法。在。爾唯除五逆。今日世尊。加祐說見。本願文明白可着眼。若是論。宗家譯此義。仰。就抑止門中解。如四十八願中。除謗法逆。然此二業其障極重。衆生若造。直入阿鼻。此歷劫周障。無由可出。但如來恐其造。二過。方便止言。不得往生。亦是不攝也矣。故於本願不攝抑止門也。下品是攝取門也。就之釋迦之抑止。彌陀抑止二義。依願文考釋文。釋迦抑止。可存。又二尊內證一意。故。可心得彌陀抑止。二尊抑止之下。鎮西宗可見故。本願除逆。為來迎機。抑止門也。下品造惡。已造機。故。

攝取門也。問。下品中。不攝誹謗大乘。爾。無安心機外。可云耶。答。彌陀如來。不有漏。章五逆。雖無言復。五逆中。誹謗說。五逆中。故宗家云。下品下生中。取五逆除。誹謗法者。其五逆已作。不可捨。令流轉。還發大悲。攝取往生。口謗之罪未作。又止言若起誹謗法。即不得生。此就未造業而解也。若造還攝得生矣。又云。五逆之局。十惡誹謗法。闡提迴心。皆往釋。禮贊云。十惡五逆等貪瞋。四重偷僧誹謗正法。釋。玄忠師云。誹謗正法毀賢聖。如是之人。聞阿彌陀如來至德名號。口業繫縛。皆得解脫。釋。又經中。誹謗迴心文多。觀佛經云。誹謗法。方等經。作五逆罪。如是人繫念。相好。罪障盡滅。云云。又六度經云。誹謗法。方等經。一聞提便得消滅。乃至說法。多羅尼藏。若爾無上功德。名號。既滅五逆十惡之道理。誹謗大乘。罪滅無耶。依當流無安心機者。五惡十重誹謗闡提。但此納一機無安也矣。

第五名號所具之三心問答章

問。三心者安心也。是蒙機所法故。往生淨土。心淨信心手也。以正直心趣向菩提。功在信心。謂其體則大善地法。忍許澄淨。為義。佛道根元故。華嚴賢首品第七云。信為道元功德母。增長一切諸善法。智論第一云。經中說信為信心。如人有手入寶山中。自在能取。若無手不能有所取。有信人亦如是。入佛法寶山。自在所取。無信空無所得云云。華嚴四十二。涅槃經佛性者。名大信心。大信心者。即是如來說。爾者最初華嚴信以道元說。終涅槃大信心說。佛法至極有信心。一故觀經云。若有眾生願生彼國者。發三種心。即便往生。何等為三。一。至誠心。二。者深心。三。者迴向發願心也。具三心者。必生彼國云云。散善義云。至誠心者。至者真。誠者實也。身口意業。所修解行。必須真實心中。信云云。不得懷虛假。言深心者。即是深信也。決定深信。自身是罪惡生死。凡夫乃至無有出離之緣。言迴向發願者。過去及今生身口意業。所作世出世善根。乃至真實深心中。迴向願生彼國故。名迴

向發願心云云。又往生禮讚云。具此三心。必得往生。若少一心。即不得生。又觀念法門曰。三心為內因。三力為外緣云云。選擇集曰。念佛行者。必可具三心。故授手印鈔中。於三心各以四句分別。舉內虛外實。外虛內實等機。不往生定。是即行者就信心所說三心故。宗家嫌虛假雜毒善行云。如是作安心起行者。縱使苦勵身心。日夜十二時急走急作。如灸頭燃者。衆名雜毒之善云云。如是依經釋。三心者念佛行者。具足一心安心也。爾此於宗門三心等。安心為名號所具法。故立名號具足三心。此義背經釋。如何答。我宗以無安心。為往生機。無安心機。末世造惡愚人。平生不善業。故不願當來惡果。故作惡業。此人臨終責業苦逼不遑。依願力令正念。口不克稱名。一息切斷。端的。稱胸意六字。遂往生。經說如是至心。唯慈悲加祐。故去業火成。正念所也。更平生決定心。此愚人會無何具三心。是本願三心名號所具。故於機雖不求。自然具足三心往生。所難經釋。就

平生善業勸所三心。故善業機不善業機是不同。善人愚人不同。一生造惡故。不聞教也。不聞故。不決定。無決定故。願往生無信。無信故。無安心。爾者所難經釋。還函蓋不相應也。宗旨意。以此機往生機。定時立名號所具三心也。問。名號所具三心立者。下品造惡機。可謂不具三心耶。若造惡故。不具三心云。宗家釋云。又此三心。亦通攝定善義。爾三心。應通定散。何下品獨云三心不具往生。若依之三心不具足存。下品下生。是一生造惡機也。造惡故不具三心存。違經。具三心者必生彼國。文釋。若少一心。文如何。答。總釋三心。以觀大經。三心立名義。觀經三心。豎三心也。大經三心。橫三心也。是即立淨家三心。名目也。此名目。空師天台。依一心即三觀立所。名義也。是橫三點豎三點。意也。豎橫之下。止觀七之。十七。經金論出也。吾宗。觀經三心。立能領解三心。是釋迦教三心。故。又大經三心。名所領解三心。是本願三心。故。名云彌陀教三心。立能所名目。七祖御義也。器朴論出。玄秀之支論中。立能領解。何所領解義并

顯義隱問。能所三心堅橫。三心義可云同耶。答。異中。同。同。異。問。初。異。中。同。義。如。何。答。於。三。心。立。名。目。異。同。佛。本。願。故。以。可。云。一。同。問。後。同。中。異。如。何。答。雖。同。本。願。三。心。彼。宗。三。心。就。機。解。三。心。故。同。中。異。其。所。以。一。二。三。次。第。具。三。心。名。堅。又。雖。具。次。第。於。一。心。具。足。三。心。一。心。即。三。心。故。名。橫。念。佛。行。者。具。自。己。三。心。蒙。機。三。心。故。授。手。印。抄。爾。何。云。三。心。中。至。誠。心。發。時。實。具。後。深。心。迴。向。二。心。也。三。心。中。具。一。心。者。必。具。餘。二。心。一。者。二。者。三。者。置。各。別。為。行。者。於。往。生。心。為。知。發。三。種。心。故。若。念。佛。行。者。為。發。虛。假。心。用。至。誠。心。治。其。心。教。之。時。置。一。者。至。誠。心。等。云。云。如。是。三。心。念。佛。行。者。決。定。一。心。安。心。故。機。功。不。離。三。心。分。二。經。三。心。雖。存。堅。橫。共。能。領。解。釋。迦。教。三。也。爾。者。料。簡。三。心。且。似。同。論。機。之。於。功。離。不。離。則。豈。一。同。其。義。之。異。也。故。云。同。中。異。今。當。流。三。心。所。廢。義。以。機。勸。所。非。三。心。故。所。領。解。三。心。者。無。量。壽。經。說。所。本。願。三。心。也。此。三。心。彌。陀。

於因中誓所三心者。選擇從願心發三心也。其所
以自佛智以真實深心。迴向衆生。本覺信心。納果號
六字。讓與末世濁惡衆生時。三心體顯。南無阿彌陀
佛所也。故玄義云。言南無者。即是歸命。亦是發願。迴
向義。言阿彌陀者。即是其行。以斯義故。必得往生
矣。又法華讚云。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下
至十聲。若不生者。不取正覺矣。又云。彼佛今現在。
世成佛。當知本誓。重願不虛。衆生稱念。必得往生
矣。故具自己廢三心。念佛以三心為本意。故六字
具足。立三心。是云離三心。捨離信機三心。故一心
發心集。南無者。始覺。阿彌陀者。本覺。往生云。是彌陀
如來法藏因位時。歸命衆生。本覺始覺。機即南無。二
字也。法藏歸命衆生。本覺。十劫成佛。體顯阿彌陀佛
四字。時始本不二。機法一體。成六字。於之正覺。往生無
二別也。爾唱南無所。機法一體。具足三心。若如異流。
能領解。故勸機為本意。當流機。造惡愚人。故不拘
機。唯名號所具決定。勸南無阿彌陀佛也。故黑谷御

辭源空。目三心。四修。五念。皆南無阿彌陀佛也。御傳又八通出又御言。往生有志念佛申居裡。自然三心具足也。十八通上御傳西宗要又起請文云。但三心四修申事候。決定南無阿彌陀佛。往生思。內籠候也。此外。奧深事。存外。二尊。哀洩。本願。可候。宗祖御義云。三心者。但名號也。所以至心信樂。欲生我國。文。是稱我名號。釋。爾。稱名。全。無。有。三。心。云。云。又安心者。南無也。起行者。阿彌陀也。作業者。佛也。故三心四修五念。皆南無阿彌陀佛也。依之名號。入心。名號。心。不可入。其所以。名號。信不信。共。稱。往生。是他力。不思議。故也。以自力。我。執。不。可。持。兔。角。極。樂。無。我。土。故。以。我。執。不。可。往。生。以。名。號。可。往。生。云。云。又云。三心者。金口誓。南無當體是。ナリ。宗祖云。古本播州問答用。又云。二祖語出。道場制文矣。以此等義。名號所具。三心。立也。彌陀本願。故。名。彌陀。教。三。心。不。勸。機。故。名。所。領。解。如。是。有。道。理。故。具。三。心。者。等。文。若。少。一。心。即。不。得。生。釋。皆。勸。機。故。能。領。解。釋。迦。三。心。云。云。問。觀。經。三。心。者。本。願。三。心。何。名。能。領。解。是。用。不。如。何。答。

誰謂非三心本願。雖爾彼經之三心。為初信行。三
心次第。明說具三心者。就機勸能信為方便。如來
以大悲取本願三心。勸往生機之一往。說教也。次至
散善義釋。定散具勸誠二門。為初信行時。勸門者
一切衆生身口意業。所修解行。必須真實心中。又雖起
三業。以雜毒善為之時。名虛假。不名真實。是即被
定散機。明其信相。故除虛假勸信心。此故釋云。
解行真實。二誠門者。奸詐百端。惡性難侵等者。內懷
虛假。故外現賢善。精進相。賢善精進。故求諸行。故
不免雜毒善。以此為誠之。不得外現賢善精進。
相。內懷虛假。賢善精進。故求諸行。本惡性。故煩惱
賊害。不免雜毒善。釋令機發信相。故初誠之也。
是即被機三心。名之釋迦教。三心云。又廣通定散。
使發能信。故。名。能。領。解。三。心。觀。經。定。散。所。被。故。就
機。離。時。約。能。信。機。大。經。本。願。三。心。彌。陀。迴。向。三。故。
具足名號。不約機也。故於機被三心發機。不被方
各別。探佛意。三經一徹。三心本願念佛所具。故。觀

經非廢三心。廢機約方不為本意也。宗祖云。觀經三心者。為廢自力我執。憍慢心。如來以大悲。被定散機也。其所以。我能行可。離生死思。故。智慧進。行進。吾程。智者吾程。行者不可有思。舉我身下。他人之為除意地。依機。懇說三心。是離自力我執。令歸他力之方便也。歸他力。無慢心。無卑下。放下身心。心無我。名號歸入。自他是非。無有人我。至田夫野人。尼入道。愚癡無智。無差別平等。得往生名號。我執憍慢可起。無意地。是他力行者也。為此機發。無上菩提心。廻心。念念。至安樂勸時。先勸三心。令發信相。自力。行多。障。憍慢。故。應通定散兩門機。發三心。勸也。是即捨自力。令成他力。如來大悲也。又云。至誠心者。棄自力我執心。歸命。彌陀。真實。為體。故。釋貪瞋邪偽奸詐百端。是衆生。嫌意地也。其所以。三毒。三業。中。意地。具足。煩惱。故。深心者。捨煩惱。具足身。歸本願。為體。本願者。名號也。故。釋自身。是罪惡生死。凡夫也。然者。至誠深心之二心。棄衆生身命。二歸

他力名號。委也。廻向心者。自力我執時。諸善及名號所具時。善成一味時。能歸所歸成一體。顯南無佛也。於是三心即施即廢。是名獨一名號也。依此義。三心者。捨身命。稱念佛外。別無子細。捨身命者。捨自力我執。身命所也。其委。只南無阿彌陀佛也。又黑谷起請文曰。念佛。信人。縱一代。法能學。一文不知。愚鈍身成。尼入道。無智。輩同。智者。振舞。不為。唯一向可念佛。又辨阿教訓云。念佛者。初入專修之時。南無阿彌陀佛。稱具三心。此心中。廻向發願心。納也。慢癡還。尼入道。同。自力我執。機。離所也。是即三心機。即廢他力念佛。教也。他力念佛者。機。離功所也。機。功離。機。三心。即廢東西不辨。嬰兒。稱名。等。初入專修之時。念佛。具三心者。正示所領解三心。爾。黑谷御義三心即廢。故。名號所具三心。教訓最。觀經三心者。本願三也。此故。共。彌陀教三心。雖不可云。釋迦教三心。機分。善惡品。在三品。故。廣。施。勸。往生。信相。故。宗家釋三心。以兩義。勸。誠制。其兩義者。一者。定散

機。一。佛。廻向也。初。定散機。明。信相。次。勸。誠法。言。解行真實。是初淨土。令發信相。故也。又本願三心者。正覺往生之願心也。是云。因位三心。果位三心者。彌陀經。執持名號。一心不亂。一心也。是即十劫正覺時。一切衆生。往生。決定。果號。所。一心。開。名號。者。名號。所具三心。云。到。是。絕。隨。自。隨。他。差別。亡。善。惡。輩。者。機。名號。獨。一。三。心。者。定。也。其。子。細。者。彌陀。正。覺。時。歸。命。衆生。本。願。不。僞。心。此。心。即。南。無。阿。彌。陀。佛。故。名。號。外。不。可。有。三。心。然。三。心。者。名。號。名。號。者。彌陀。果。號。一。切。衆生。往。生。委。故。宗。意。廢。能。領。解。所。被。三。心。立。所。領。解。名號。所。具。三。心。問。上。上。品。三。心。本。願。三。心。分。能。所。文。論。師。上。人。何。依。憑。耶。答。經。釋。分。明。也。依。憑。不。有。外。問。經。釋。依。憑。如。何。答。依。觀。經。說。三。心。廣。令。被。定。散。機。宗。家。釋。此。三。心。通。定。散。攝。三。心。時。外。嫌。賢。善。相。內。破。懷。虛。假。勸。解。行。真。實。是。即。就。機。令。發。能。信。其。義。明也。故。此。憑。經。釋。立。能。領。解。又。三。心。廣。雖。互。定。散。二機。三。心。本。據。本。願。念。佛。所。具。三。心。故。互。定。散。廣。被。

其結歸。所終。納念佛一行。故宗家釋云。上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在。衆生一向專稱。彌陀佛名。矣。爾定散兩門之利益。所詮有念佛。故三心。即施即廢。共其體不離名號。本願文。至信心樂欲生我國。乃至十念誓。故。稱名所具三心。故。依本願文。宗家釋。大經三心。立所領解也。私曰。能所相對。且約機法。依相傳。能所不二。機法一體。三心習故。論中。舉能領解隱文。實所領解三心相傳。故。使義含。但。為知神勸相傳也。是又論師巧也。又云。論師從元祖七世的流六祖。相承人也。何私執固。依之於三心。分能所釋。異流之以玄義。分判。同日。不可謂。何強責。依憑。假。令。言。無。依。憑。神。勸。故。不。可。疑。况。其。理。經。釋。面。明。也。相。傳。三。心。者。所。廢。三。心。也。所。廢。三。心。者。名。號。所。具。三。心。名。之。果。上。一。心。教。也。宗。祖。云。熊野參籠時。權現宣示現三心四修趣。不可有。此。凡情善時。惡時。皆迷。故。不。成。出。離。要。道。唯。南。無。阿。彌。陀。佛。往。生。也。若。此。時。捨。自。力。意。樂。依。宗。家。釋。文。見。一

文一句。無不有法功德。玄義分始。先勸大衆發願。歸三寶釋。南無阿彌陀佛也。爾時御疏九帖文文句句。只名號也。又長門顯性坊三心所廢。法門能立。其社往生彼。遂云云。義古本播州。亦二祖傳云。師一日示南條九郎云。不謂煩惱厚薄。不論罪障輕重。唯口稱南無阿彌陀佛。聲則往生也。中中才覺立人。拘教則方在。南條問起云。妄念上。唱名往生。可任佛否。師答云。就善惡不用心。他力念佛云。唯勿生死讓身命於知識。不契心。所望永盡用事。不爲我當我。居不移他所不用心。與心不叶思萬事。是歸他力。顯至極。振舞三心事相也云云。如是所示云。皆以廢機三心。示所領解三心。故師資相承無異途明也。其上宗門安心者。元祖非學解。一一安心之趣。十念深秘。熊野八幡兩神御相傳故。三心立。樣人師。依文義異。故不用入師所立。何拘智解。假令於三心異流。存勝劣。彼學解。此大權教勸也。何致難破。又神勸三心其義付合。宗家黑谷釋義。是以和光方便。示本

地悲願。至難有也。爾三國傳來念佛往生安心。其決定所名。所具三心究竟事。異流。知不知處。又異他。此度入時衆。決定此安心。二佛不可言中間。靈山發遣。世尊金口相承等。杏待龍花說。對誠。此去不遠。諸佛護念大會處。十萬億利。現稱名一念。彌陀果上三心。顯穢惡口業。非兩神冥助耶。仰信之謹而可敬也。今於三心。諸師廣雖解。悉人師。執見。落在解會。或於三心取深心。則釋依就。就人。分三三心。成立機法各別。以所信法。結歸本願。正定信。所。雖同名號所具三心。心存助給故。不廢機法故。三心具不生許在。不許有。是不捨故。異義蘭菊。其解所執能信不棄機。則惑多歧。廢機存名號所具時亡。多歧決定一路共。當流三心二尊直授故。不互多義。無願三味名號。三心。又無願三味也。其所以淨土無我。士故。能領解三心。信機爲本。此故。同自力立機。則似我執。爾能信。不可往生。所領解三心。無願三味。故。至極他力也。他力三心名號。以念佛爲往生業。

依之選擇。初引往生要集云。往生之業。念佛爲先。是其證也。極樂無我土者。大經云。通達諸法性。一切空無我。專求淨佛土。必成如是刹。是其證也。歸無我名號。絕舉下。獨一三味。故。同經云。空無相無願三味。云云。是其證也。名號者。無爲無我法故。稱名當體往生也。稱名全。往生。名號云。凡夫出離。姿也。故。彼土往生。同經。非天人虛無之身無極之體。是其證也。故。宗祖釋云。名號即往生也。依此義。往生即名號故。自然虛無。非青黃赤白黑色。非長短方圓形。非有非無。離五味。口稱。不覺法味。思量。不落義味。故。六方。諸大士讚。不可思議。又宗家。無疑無慮。乘彼願力。定得往生。釋。宗祖唯任。聲唱離。無究生死。故。言語道斷。心行所滅。法釋。爾三心者。名號所具。故。名號。外不可有三心。是混機智。格外安心也。何。依機論。三心耶。龍樹立二道。勸念佛。易行。至極歸名號。天親論。偈。世尊我一心說。心外。不有往生業。五念。念者。上一念。所具論也。此念。即歸命心。歸命。即一心也。是併名號

所具三心也。廣。五念。則約能信。約所信一心。五念。即彌陀經。結歸稱名一心門。依之神勸。無三心四修。趣示。又黑谷。三心四修。五念。皆有。名號。釋。又宗家。於往生。釋。五念門。釋。終。衆生障重。境細心麤。識麤。神飛觀難。成就。故。大聖悲憐。直勸專。稱名號。正由稱名。易。故。相續。而即生云云。依之。吾宗。三心。懇。料簡。直。佛意之相承。故。不背龍樹。天親。流支。玄忠。西河。光明。吉水。釋。若以學解。爲人我見。天地間隔。其所。以安心。不有學解。離人我安心。例。不求他所。以。名號。安心。爲本意。故。要法記。三心。等。安心。爲。名號。所。具。法。條。釋。要法記。廿一。祖。述。當流。面上。相承。師。也。不。可有。謬。矣。於。異。流。聖。道。發。迹。我。家。約。因。分。我。家。施。他。約。諸。宗。果。分。尙。當。談。依。佛。密。意。可。爾。無。安。心。之。上。立。所。佛。意。約。三。心。還。是。因。分。可。說。也。所以。如何。單。信。大。信。者。不。識。本。願。眞。實。不。知。名。號。大。利。不。分。安。心。起。行。單。直。愚。癡。人。疑。惡。無。也。是。不。墮。迷。生。覺。佛。之。類。不。預。知。解。悟。解。死。猫。兒。頭。知。無。價。果。分。上。果。分。談。

爾吾宗及立三心所廢。單直愚癡大愚也。是佛心宗示鏡裏愚。同悟解。鏡裏之下。其不分安心云。既知心存助給。豈是云安心無。然約能信不離機功故。雖果分同因分。立宗門所。單直愚者。三心所廢故。不拘善惡。無安心故。信名號無意。造惡造惡。稱名往生。不造。不造。稱名往生。於機。毫釐解知無。不悅善惡共。是離肉真。死貓兒頭也。禪林類聚四卷四十七葉元祖上人神勅。後一向還愚癡。捨利門名路。讓四儀於菩提。萬事任天運。而行者。信心顯踊躍。報佛聽許響金聲。而異朝少康本邦空也。慕此師之跡。通俗衆共稱念佛踊躍事。是不隨迷生覺佛之數。不預悟解。單直仰信振舞。離見聞覺知。發迹入源故。聖道淨土二門談所發迹。吾宗同施化利生。依之。法器人。以此領解。宗決定安心。可願出離。少勿求異流。安心故。二祖云。初入時宗時。今身盡。未來際。此身命。讓知識。此衆中。永可滅命。若破制戒。出此衆。例尋他所。今生。成白黑癩。後生。彌陀。漏悲願。永墮惡趣。

不可浮。誓打磬後。歸他力三心。肉身奉讓知識。手足居動。吾非境界思究。他境界故。斷機功。施物我。是入他力時來人云也。又云。就善惡任。上今更非可思打殺。流轉。廿五有情身命故也。然損打煩惱具足。依體。無始以來之怨敵。可取濟云。已上二祖傳之意此故。入時衆人。捨智解亡。入我。不惜身命。歸能化知識。離機功。釋命。可念佛。上來三心。趣。余住九品山時。玄秀師從甲陽吉田來。宿國府山。一夕慧水師。共對秀舉問。責宗三心。其答不謬如翔龍。率爾不能記憶。終請之。後一通贈余。故非私義。元祿初於音響山。余宗法傳法再吟之後。秀公語。吾歷山昔。安居暇日上藤澤山。觀上人坊掛錫。一日觀師示曰。三心。沙汰西山鎮西六派雖多。決定所宗門安心。落居。其所謂神勅云者異樣。尋本地探佛意。彌陀直授安心也。一遍二祖。觀音勢至二大士迹。其推本。報身悲智也。凡大乘法門。不離理智悲。與深安心也。爾者當流意。立三心所廢。決定名號為體。發迹之至

極也。家家流義忘源末。為本故。人我之見不止。能可思合已上。

第六 離業念佛問答章

問。離三業念佛如何。答。離自力三業。歸命他力三業念佛故。名離三業念佛。問。自力離三業云。得心如何。答。宗祖云。極樂空無我土。以自力我執不可。生。其上能信。機同自力。故離機三業念佛。云三業外稱名也。問。以能信。機何同自力耶。答。三業清淨。除虛假心。故同自力。問。三業不實。不除虛假。大集月藏分云。大念。大見佛。小念。小見佛云云。群疑論。大念者。大聲念佛。小念者。小聲念佛云云。是名號即來迎其證也。又無安心者。云念佛入繫。自力德。不歸他力故。口稱上。嫌我執情量故。二祖云。他力稱名上。可欣無極樂。可恐無地獄。一聲。問。即證無生云云。雖定散應。有三福九品。如鸞師無罪品釋。若於散善無罪品機。三福。又無也。爾三福九品於機。令發願。方便。明。故隨自意本願。以名號。誓往生。彼

士德。以光明莊嚴。一立古今然。淨土何落機情。隔歷。為罪惡生死。凡夫誓。光明。佛意本以名號。濟度故。選機立非本願。故三福九品。約機邊。不約佛意。淨土。同一念佛。土體。三輩九品。如鏡中像。佛智。雖非遮。依本意。名號淨土體。故如鏡。三輩九品。如影。依之三輩九品。約能信故。離機三業。獨一名號。落居。時。名號外。無機法。三輩九品。定散事理。機法不二。名號。領解。自不用機功。離自力三業。是為離三業。落居。宗祖云。名號外。起信。可許往生。其義如何。答。所領解。念佛三心所具故。離機功念佛故。他力中。唯他力也。能信念佛。拘機故。嫌虛假等。立機功故。依心品。是同自力故。他力中。自力也。問。此義難許。既往生者。以願心之故也。願心。拘機。若無願心。為往生。不可有此義。其上宗家釋云。使人欣慕。許無願往生。答。其釋約能信。故播州問答云。立淨土。生欣慕心。為勸往生心。令生欣慕心。所詮。為稱名故。使人欣慕釋。聞淨土相。彌彌可發願往生心。此心

發必被稱名號。爾凡夫妄識內證散動。外用虛假也。故唯歸往生心於名號之初發心也。是以能信經所信。欣慕云。此心六識分別妄心。故彼土非修因。然三心即名號。名號即往生。故唯名他力往生。是可信他謂也。又曰。人思我願。志切可往生。又行者依待思有來迎。如是人。不離機功念佛者也。何苦待來迎。若依自己見佛。自力見性也。非他力來迎。除自己離度量念佛。念佛即來迎也。故宗家稱我名號下至十聲等釋。亦謂二心雜亂。我發非妄念心。二祖云。無用機功。思生易往淨利。開口唱南無阿彌陀佛。計也云云。問。離三業名目。宗祖意樂將神勸如何。答。於神勸上立所名目。雖意樂同神勸。問神勸於上立離三業意趣如何。答。乘阿云。一花堂之御義也。宗祖上人初有念佛門時。心存助給口稱南無佛。發信心可往生。勸。然而後依神勸領解。意樂離三業名目也。問。依神勸立。依託語中何語耶。答。依乘師意。不辨信不信淨不淨。依語。

三業外領解念佛。問。不辨信不信淨不淨語。宗祖何領得。立離三業耶。答。辨信不信淨不淨。則拘自三業。此身五蘊和合。假四大。著之故。以五欲。繩被縛。十惡。居三界牢獄。或時出六道。刑處得苦。皆幻化虛妄。故也。散歸根本。四大。可作無五欲十惡。我知我見我愛我慢。四煩惱。自無籠故。諸佛出世。說五戒乃至無盡戒相。制煩惱。佛祖三經。曰。非妄念者。無入諸煩惱賊害云云。四大和合。則於見聞覺知。起著相之念深故。悉成三惡道業。依之以無量修行。拂念見性。是皆自力聖道門意也。又他力之念佛。雖正。為凡夫就機勸能信三心時。信實心。禮佛稱名憶念願往生。是淨土門意也。爾神勸。三心發得機。約異朝上古。及末代。不為機教齊同。此故。和光神慮。以悲憐。不辨信不信。唯可勸念佛。是初末最下機。何有真實深信。故宗家釋云。眾生散動文。識劇猿猴。心遍六塵。無由暫息矣。又云。但以境緣非。一觸目起貪亂想。安心三昧。何易可得矣。縱。

暫雖有似信心。暫信暫不文。俱妄分信。不可謂信實。真實欲唱名號六識。凡情。轉外境故。能緣心本虛妄。何所緣淨土有實。然依能信發願勸念佛。則當機最下之凡夫。久墮三惡道。少戒善力故。雖生人間。餘殘習氣。昔有惡趣。染煩惱泥濁。身身業不成。清淨。惡口誹謗。故口業又不成。善。貪欲我慢。諂曲意業。不成真實。三業皆不善業也。意業既不真實。故隨意業身口。三業皆虛假也。是欲真實。現身所得。如碎耳鼻。曠劫已來常沒流轉曲情。故今更不為真心。六識散亂。凡夫心。至誠心。深信名號。不用念佛禮拜。故大權悲憐。示云。彌陀正覺之時。以名號決定。眾生往生上。不論不淨不簡心亂。可念佛。宗祖於是明他力易行。旨後。領解三業外念佛勸。眾生。是入時衆之初門。最初示之。立離三業名目之間。於念佛立意業名目。有其例耶。答。非無例證。如大原良忍。依多聞天告。立融通念佛。如黑谷。立選擇本願念佛。念佛者諸佛通號。故。觀稱共。

通諸佛。法花方便品說。以深信念佛。諸佛通總念佛也。楞嚴圓通之念佛。雖彌陀念佛。通觀稱。如是以有義。同本願念佛。為簡別觀稱通總餘師。終成一意。念佛上立意樂之名。今如其念佛。選擇攝取彌陀名號。神勸念佛。唯他力稱名故。恐混餘師。為簡觀總。立離三業。但他力之中。他力顯也。畢竟宗祖意。立離三業。所詮。入時衆之初門。離自力。為令捨機功。勸安心也。其所以此。身假和合。四大所成虛妄物也。恒有三毒。賊內。自六根門入。六賊亂。則於見聞覺知。末那七情亂動。愛欲念根。不為寂靜。故。以自力不能治。此故。入時衆初。自今身盡未來。此身命奉讓。與阿彌陀佛之後。我非身命。吾心身佛。心身落著。曠劫流轉此身命。扶持故。自欲遁世者。六賊隨逐。失法財。貪著五欲。畜諸惡。是無力凡界古習氣。己不克制斷。依之讓與佛。諸絕所望。斷用。不為吾吾。不障善惡。不偏是非。今生後生。臨終平生無二。則可用自力。無便故。身心安穩。此。

上發所厭欣心善惡心無隙唱南無阿彌陀佛何不用臨終往生無疑也爾禮佛稱佛名憶念三業入時衆初發起一念任佛決定誓言下捨離自力三業是名離三業也總離心念者佛教徒故播州問答云於聖道門者心是生死道無心是涅槃如是則離生死者即離心也一切虛妄境界從分別想念發起故以有心爲生死有心第一怨縛人致焰羅所於淨土門淨土是無心領納自然知又無有分別心釋爾者聖道意依自力行離心念淨土門意任他力離心念故法事讚云六識縱橫自然悟未藉思量一念功離自力依他力離生死之謂也以是離生死者離心念爲本時聖淨二門自他二力雖異離心念所以一同也故二祖云一代半滿教法三乘漸頓根機蒙其益置不論但機教時背難解難入也今往生淨土教門正爲凡夫面愚薄底下衆生無隔五道關提不選吾等仰六八弘誓歸命果地佛智三世截南無當念云又播

州問答云我等不成無相離念觀法是名自然悟道教門故觀經說廓然大悟是他力離念醒悟也云即萬行離念稱名故奉讓三業佛後可決定無心以名號爲決定此故播州問答決定往生信不發每人歎是無謂事也其所謂凡夫心無決定決定名號也然決定往生信不立任口念佛必得往生也往生憑心品非可成可依名號也決定立信雖可往生猶以可歸心品打算心品一向依名號可遂往生得信心決定心發者也云已上宗祖爾時決定信有名號名號他力故離自力機奉任佛是他力決定云散善義云佛遣捨者即捨佛遣行者即行佛遣去處即去云遣捨者歸他力意業離自力意業云遣行者歸他力口業離自力口業云遣去者居他力淨土離穢土遣去云所居身業所住歸他力意業離自力身業云故宗祖離三業念佛如契宗家釋故乘師云離三業念佛領解人者自成迷悟不二位菩薩道不行凡

時宗要義集卷下

第七 成三業之名義問答章

夫不斷漏身獲得生死當體佛果云云是一乘無價之稱名相頓即是妙術故諸宗知識皆歸此念佛願往生事宗祖傳詳也以是四百有餘之間歲去人改念佛梵音覺九界塵金磬響遠通徹鬱頭四蘊燒熱大燒熱及無間達多五道焰永消滅是非師德乎爾朝昏金磬報身益踊躍形顯他力三業是即摸報土三十七尊躍依而入時衆之本意速棄自力念可歸他力矣上來離三業安心解其要畢此一章秀公任教訓若於謬解後人可改之矣

問何故名成業耶答離自力三業成他力三業故名成三業問如何成就他力三業耶答入時衆初讓佛身命誓捨自力成他力心身也是即離機劫後一向吾非身心決定念佛時佛三業衆生三業一致成處彼此三業不相捨離云於之廢機三業具他三心也故二祖三心南無體當金口誓文即於知識前讓身命誓鳴金磬處離三業也然而後非身心吾物我他彼此念慮其儘不改念佛自成他力三業也故離三業次名成三業也問成三業名目宗祖立歟但餘師領解耶答餘師非處立二祖安心也問二祖安心如何答二祖依離三業成他力三業云示語也問離自力則直他力三業也爾離三業當下成他力三業何煩立成三業答次離三業立成三業其處由在問二祖所謂如何答宗祖上人遊化時諸

時宗要義集卷上終

宗頌德來。最後尋法門。其時宗祖云。雖同三業。外念佛。只言計不得義理。於之二祖到滅後。立成三業也。問。二祖依不得義理語。立成三業。意旨如何。答。離三業。有一念發心處。離三業。外不可有菩提心。然諸師依本宗執見。離三業。當體佛果。不醒性故。離三業者。即發菩提心也。此心阿彌陀經阿耨菩提心也。此他力三心執持名號一心也。此心佛心。衆生心。合顯獨一名號。其名號者。萬行離念故。離機三業。成他力故。此中標六八弘誓。明一乘機法。因中萬行納功六字。果號一稱施益於十方。是即授一切衆生往生記。勸處也。又一切衆生往生決定南無佛所。此依二義離三業當體。爲知一念發心。立成三業。問。成三業證據如何。答。定善義衆生憶念。佛者佛亦憶念。衆生。彼此三業不相捨離。故名親緣。此即離自分三業成他力時。佛吾爲一體處。云彼此三業不相捨離。親者親近。緣。結緣也。捨自力雜善。彌陀奉親近結緣。此名歸命。即奉讓身命義也。奉讓身

命後。佛捨者。即捨。行者。即行也。捨者。即信機自力難行也。故宗家釋自餘衆行。雖名善。比念佛者非比技。是捨義也。又云。隨順佛教。矣。是行義也。爾乎者。離三業者。捨廢義。成三業者。一行三昧稱名義也。即他力三業。佛三業故。諸邪業繫忽脫。念念稱佛除多劫罪。預來迎生極樂故。是增上緣也。宗家釋之。衆生稱念。即除多劫罪。命欲終時。乃至自來迎接。諸邪業繫無能礙者。故名增上緣矣。爾乎者。離機三業。成他力三業時。自具足三緣力也。此以播州問答釋攝取不捨四字。攝者親緣也。取者近緣也。不捨者。增上緣也。是即爲念佛衆生故。稱名之當體具三緣力。明也。依之離機三業。成他力三業時。禮拜讀誦觀察供養。助行。屬稱名行故。以自力三業不可思。此故播州問答云。三業起行皆念佛也。禮拜憶念等之體。非謂念佛。手取念珠。見稱口身爲禮自顯名號。是名云三業起行即念佛。今問成三業當體。播州問答云。開六字爲三重。解云。爲三重者。南無二字。十方衆生能

機信也。阿彌陀三字此法也。佛者所覺人也。又終成一體機法覺。三是合。則終成一體名號。成一體時。無能歸機處歸法。無機法無處覺人。於此絕自他二力。亡機法處。能處不二。機法一體名號云。喻如火薪燒薪盡。火自滅。機情盡。法又息也。故黑谷御義云。名號中無機無法。立機法執迷悟。成病藥對治法。非真實法。絕迷悟。不聞自他二力分別。言不可思議云云。宗祖云。以名號領解往生云。名號其德不可思議。故不可領解。領解德信人云也。其所以念佛者。無塵法界凡聖齊圓。普設智識。寂用湛然。故而施恆沙功德。故三賢十聖。弗測處闕也。依之小經。諸佛同心讚揚不可思議功德。大經。諸佛光明處不能及說。光明者智慧也。爾者諸佛深智不及處也。何以凡夫妄識思量耶。往生者始一心也。一念云。猶就機之義也。名號從本往生體也。往生無生也。過無生處。暫云一念。三世際斷歸命名號。無始無終往生也。故於吾宗。臨終平生。不分別。臨終平生是分別。約妄分機法門也。捨

名號。全無臨終平生。三世常恒法也。不待出息入息。當體一念外。不定臨終。然念念往生也。故慧心先德云。念念生安樂。若如是則一念十念。非往生業。名號即本願。念念往生念見佛也。故於五台山。文殊大士授法照禪師云。雖有經。一念十念文。但可仰念佛往生云云。爾則觀經具足十念。願成就。一念。互具稱名也。釋。十聲。百即百聲。有。何論。一念多念耶。又一念十念者。名號利益功德顯廣大也。本誓深意。稱名也。何互數量乎。故餘師誤。十念往生。願釋。彌勒問經。十念見。惑。十念言。故。宗家之爲偏之恐。十即十聲等。釋。但觀經。十念。故在鸞師總別釋意。有華嚴。亡相。爲白誓。則那箇本分名號也。爾者一念十念。十即百聲。總別等。釋。教化門落在。今實義實體名號。不論有無二相。總別二體。聲聲南無阿彌陀佛也。如是則宗門。一息。名號實義也。口授相承人。懇。公案。今離三業當下。他力佛體成三業者。自力爲體我宗。我者煩惱障。執者處智障也。是法執無明。源遠其本深。斷二惑。離二

種生死脫二種。本無煩惱。元是菩提也。一代ノ說相大
小權實。自他二力。依機論時。暫雖有遲速。圓頓一念
不生。別教五十從位。道教被攝。俱以斷二障。是即自力
我執外。見思塵沙無無明。爾彼此三業。成位。本覺凡夫
境界直。具理智悲。理者法界身。衆生即佛。自受用即
彌陀理體也。理智悲處具三心。本願三心者。悲智所
成一心也。一心名號理體也。故至誠心者法身理體。
深心者自受用智也。迴向心者他受用大悲也。若三心
即一心。解三體即一體名號。故。三心者名號化用也。
化用者教門前故。能領解三心。教門也。教門三心。化
用故。令化用歸實體。實義此一體名號也。名號者
萬法體也。名即體。故。萬法皆名號也。播州問答云。念
佛三昧者。無色無形不可得法也。名號能成法。萬法
處法故。極樂莊嚴者。萬法形也云云。又云。一切法名號
所具萬法。知。皆成真實功德。是功從體非云真實。
名號真實也。以此至誠心。至者真誠者實也。實義釋。
只是名真也。名真者名彌陀真實。非發我心真實。以

凡情思量。法莫有誠。處以如何。能緣心虛妄。故。
名號真實。名不思議功德。故。真實者彌陀名。爾。至誠
深心迴向。皆他力。真實心也云云。故。入時衆之當下。能
緣塵妄三業。其儘歸命佛智。離三業成。真實三業。
云也。歸命者南無也。即十方衆生機。此機虛妄故。離
機三業。歸名號。生佛三業爲一體。機法合成。虛實不
二。獨一所。一心不亂。南無阿彌陀佛云也。故。播州問答
云。他力不思議。名號自受用深智也。故。言自說言隨
自意。自受用智者。法爾天然。自受故。水飲水。火燒火。
松葉細荷葉圓其儘。功用。本體不變。故。生死本無。然
衆生迷我執一念以來。居流轉開宅。成常沒凡夫。此
度仰彌陀本願。歸他力。不覺。覺無生死。不知。還本
願。故。宗家不覺轉入真如門。釋。努力翻迷還本家。釋。
若不歸名號。我不可到本分家。名號者南無字也。
故。龍樹大士爲衆說。法無名字。法性法師云。名號者。
無名。故云阿彌陀云云。無名字者。大論七云。諸法相
不生不滅。真空無字無名無言無說。而欲作名立字。與

衆生說令得解脫。肇論新疏下云。有無跡也。末也。無
名實也。本也。此名號實體也。故。虎角四義頌云。無名
字。上立名字時。無得還含萬德矣。無名字。即阿彌陀
三字也。天台翻之阿。無。彌陀量云。問公用此義。經無
量覺云故云云。處證無量壽計得心。只此一德。其開狹
也。但。無量云時。無量處有一切事。此佛悉成就故云。無
量。佛名體義用皆名號實體也。有上十八通。又宗家三字
相翻。壽者佛名字本體也。即壽名體義用故。無明上
立名字時。無德還施萬德。是壽者萬法性。無量壽
也。證之覺云。即涅槃常住。故。不生不滅也。華嚴云。
法界法身彌陀等云云。是一切衆生壽命也。譬。少分水。
入土器。土器乾也入恒河。解爲一味。如其南無者歸
命也。即十方衆生流轉命根也。此命歸不生不滅無量
壽。入功德海。我執迷情土器解成一味時。能歸所歸
爲一體。生死本無。委顯名號。如是得心處。云三心
智慧。其智慧處證爲失自力情也。吾捨本體歸名
號。無我執情慮脫。這情無三心智慧於之亡絕得失

是非。稱名念佛念佛也。故。不離自力執。不可往生。
念作意總不綺。我分處云他力。是名獨一念佛。又說。
一向專稱。自己本分。從本以來非流轉。但妄執流
轉也。本分諸佛已證之名號也。妄執本無所因。無所
因。無實體。實體云不生云云。已上播州問答之意。流轉
迷惑。闇無明處也。見浪忘水。不知瞥見空華。楞嚴
云。擲目見第二月。皆此虛妄一念。失本性。故。流來
生死。若拂塵勞念。則迷情無處因。知。無處因。波全
水也。空華瞥眼。故。本月外無用。此即性法不理。隨緣
真如緣起常住。實相妙用歷歷。如是。此即聖道淨土
修行異。自力他力不同。就機處論。故。遲速機有根
力。若到實義。無二門教。無二門二力又無也。如。聖
道。一念不生談斷妄念。淨土自力。雜念捨歸佛。不
作意。當體決定往生所。他力證萬法不生。理云也。
爾。聖道家。人一念不生談。不離我執。故。還損。自
他。失有。如淨土願人。則他力往生決定談。不離機
三業。故。不捨自力雜修我執。還失自他往生。以之

宗祖讚云和讚抄中聖道淨土法門悟人皆生死妄念不盡輪迴業是自他二門共不捨我執故也如來一代說法至極此一句有學者克付意可見博學薄知少學厚知云此謂也宗祖云人分別自他依他力可往生思此義就機不離自三業入也自他二力初門事名號者自己本分故捨自他位離所獨一念佛云故權現不論信不信不謂有罪無罪南無阿彌陀佛往生也示時捨自力我執念佛法師領解云已上播州問答也爾名號者自己本分故不生也故宗祖頌云六字中本無生死矣無生死故不謂自他亡自他時離機功離功者離智慧者捨自力我執處是離三業云離三業當體歸自己本力本分者萬法周徧體即是十界依正一遍體名號故名號本性亡智慧無智慧故大愚也愚故無情慮無情故無分別法也離分別故無願三昧虛空無相境界周徧無窮故名盡十方無礙光如來無礙故不染煩惱摩尼珠入淤泥如不染黃金在糞中如不穢身

是不淨穢惡器界口吐謗誹之門矣妄念家賊離三業無礙摩尼珠名號者有三業穢惡不染穢惡清淨法也擲珠泥濁水還為澄清此珠力用也名號者本分理體故稱名全體澄生死濁澄生死泥濁則自煩惱拂塵爾居生死即無生死具煩惱即無煩惱明即明時本來南無阿彌陀佛也是本不生心地入一法句理性云其理性者三世諸佛法界眾生無二無別也厭欣抄中末初故觀經云諸佛如來是法界身入一切眾生心中故汝等心想佛時乃至是心作佛是心是佛等云彌陀如來曠劫行道悟我等心理成清淨依果即第一義諦妙境界相淨土此也我等離自力機稱名彼此成三業故超入淨土會合彌陀清淨依果云入一法句極樂入法句云サナガラ吾等本有悟也其彌陀佛修得顯現故宗家云歸去來又云本家還宗祖本分名號釋但如是云聖道云己心彌陀唯心淨土故外云不可求雲泥萬理也今名號實體談此下十八通下卷定善義下內故唯己心沙汰窮智慧出生死之法門也宗意離

機善惡住所作天然奉讓威儀佛後愚鈍其儘境界令聲打舉打舉稱名號念念往生念念臨終俱會一處念念見聖聚時不斷煩惱得涅槃分也空也云任三業於天運讓四威儀菩提云又古洪云煩勿轉破只任天運宗祖云名號此自然無作法也萬事不為思量捨一切也又或人奉問於念佛異義多何可依耶宗祖云異義多我執最也於念佛更無多義依義不有可往生往生是己非智德鏡德也鏡者彌陀所具五智中大圓鏡智也是眾生不有己鏡諸佛所證之明鑑即今是名號體也爾者以名號實體鑑開見本來面目他力不思議成三業念佛也故觀經如執明鏡自見面像說喻雖有火依中不能燒必欲燒以外火如燒萬法以因緣和合成物時雖有自性即佛火不能燒煩惱薪必欲燒外以三學火是燒盡密教一念阿字超三大僧祇說華嚴萬法唯一心說法華眾生從本來常示寂滅相說涅槃常住佛性說圓覺始智眾生本來成佛說皆以自性火非

得悟徹以修行火燒盡塵勞終見自心處見佛種火外三學火無也故雖談本來成佛還機修行上事也一代說教如來大圓覺明鑑也依此鑑珠磨無明己鏡則見性自己圓鑑己鏡見性後凡聖二鏡一體為明鑑亡諸相故宗鏡錄云光非照鏡鏡又非亡鏡光俱亡云宗祖云能所絕位可止生死何宗此位解脫生死云爾者聖道門雖談自性可依念佛法師勸勿信念佛疑云法師勸念佛故不往生不往生乍思念佛可往生往生名號德也故黑谷勿疑念佛在喻之如火付薪意不燒思口不燒言不依此言不依念力火自然燒物火功能故不燒思燒水潤物為功能故不潤思依水自然潤名號如其不往生乍思念佛往生也滅罪生善自然備名號已成之功能故持往生功德名號不預義味思慮不憑智慧分別賢愚得失貴賤貧富共唯稱起居動靜念念往生是名他力不思議云故散善義云一心專念彌陀名號行住坐臥不問時

節久近。念念不捨者，是名正定之業。順彼佛願力，故云。黑谷云。淨土門意。還愚癡往。生極樂。宗祖云。見領名號。不可領名號。是即他力。不思議實體。故以智慧不可領解。天台云。智還成妄。法華舍利弗云。以信得非己智分。爾者於聖道門。以智離生死不為本意。況於他力門乎。萬法一心讚。不能顯其體。譬己以目己不能見故。向鏡如得見。即佛旨。依佛教修行。出離生死。則他信教證聖道時。於此彼解脫。異得果無二也。速疾頓成。約機利鈍。依教如說修行。方聖道宗共他力。不依佛教。何已得見證耶。爾聖道淨土二門共。如來依大悲。出生死。故自他共他力也。唯云。聖道自力。就機以智慧自學。約修行。自力云也。何以本來成佛。自力頓教。勝談。他力往生。機權劣云耶。此下大聖道他力下口決抄。今他力實體名號者。機三業讓佛後。自他三業不離。機法不二。名號顯時。自己本分外無佛。本分。生佛一如。故。南無阿彌陀佛者。本分姿也。衆

生佛同一法性。故。凡聖三業一體合成。名成三業。是即決定法業所。往生即成佛也。成佛者名號故。名號即往生釋。故稱名外不可有往生。往生全成佛。故。宗祖贊云。名號酬因報身。凡夫出離佛云。酬因報身。彌陀正覺昔。以始覺智。衆生誓往生。真實深信一心也。此心生佛本具。本覺故。境智冥合。始本不二。清淨體也。又云。盡思。其後始終無二。佛衆生。一可申。南無阿彌陀佛。即是能所不二。機法一體。彼此三業不相捨離所。成他力實體三業云也。爾者名號。本覺名。稱本覺名。還本覺出離往生云也。稱名者無安心云。今此。閻浮提。聲塵世界。能居衆生耳根最利故。聞音聲領解。故以稱名所化衆生。聞耳德在。故。聞音聲。生智慧得利。稱名即言語。言語即音聲。音聲即風大。風大即命根。命根者衆生一息也。此一息者法界風大。取方東方。依四季春也。取五佛。阿閼佛。教令輪身。降三世明王。所掌風大也。取五色五味青色酸味也。取五臟肝臟。五常中仁德也。取形。

圓形。取律。仲春來鐘中。有韻。平調也。彌陀五智中。大圓鏡智。金剛部三春少陽水德位也。若依身意識。五根。總體。意識配宅所。四大流攝以安立。故。森羅萬像。悉是影迹。育物無私。走口唇。賦滋液。吐音語。納時。彌陀五智中。法界體性智。故。中央毘盧遮那佛。教令輪身。不動明王。所掌地。大黃色清淨法界。智灌頂部。取味甘。取五臟脾也。五常中。信德也。爾者彌陀是西方教主。妙觀察智。蓮花部佛。教令輪身。大威德明王。所掌金白色。三秋金德位也。取臟肺。取味辛。取調律。仲秋而呂黃鐘。調也。肺掌鼻。故。鼻是息風門也。五常。義德也。於五智中。法界體性智。彌陀根本種智。故。根本智。生後德智時。大圓鏡智。風大聲塵德。妙觀察智。彌陀實體實義。故。備義德。以是根本智。彌陀如來本有自性信智也。從是智發所。本願名號。後德大悲。稱名。聲塵德。風大。所攝者。大悲。仁慈德。故。以風大。為仁德。爾者法界體性。從信心顯發。名號。大圓鏡智。風大。故。稱則音聲中。成無量功德。消滅無數罪業。

此故。元祖釋稱息佛。三祖讚云。聞聲不二名號。聲塵世界。唱行者不而已。聞人即往生云云。又三心所具。稱名。三心實體者。法界體性智。信德。生佛所具。直心也。名。此心云。菩提心。是即從根本智。生後德智。大悲心也。是本願至心。信樂欲生我國。三心也。故。黑谷云。上上品。有念佛。若爾者。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心也。今此三心。即是開本願。三心也。云云。依之。依本願。三心。開觀經。三心時。大經。三心實體。上上品。化用三品也。化用是教門。故。就機勸能領解。三心也。化用。所即實體。教門。三心全。定義。一心也。是即彌陀經。執持名號。一心者。實體化用。教門實義。相即融通三心也。實體。三心。施化用。教門。則為衆生信心。歸化用。三心於實體。則實義是一心也。此心。即南無阿彌陀佛。故。法界體性智。信心。顯。大圓鏡智。風大。所攝。聲塵。法後得智。稱名。一致。生佛。信心。凡聖三業。成一體時。歸所領解。三心實義。能所一體。一心不亂。執持名號。決定時。離機。三業。故。吾信心。

佛信心也。思窮念佛之所。云名號所具三心。是劫末最下之機。為出離要名號。造惡亂雜。凡夫實我實法。虛妄虛偽念所。識毫。不改轉。直超入佛地。稱名故。執持名號。一心不亂。說勸三心實義時。一心不亂者。散一心。離機功所。如嬰兒。意不辨善惡。不分黑白。樵子野人。其儘境界。任聲念佛。所不亂云也。一心者。稱名當體也。止妄心。唱非一心云。名號即一心故。凡夫妄心。虛妄故。非真實。但忘自他念佛。無餘念云。一心不亂。故靈師云。具縛凡夫。屠沽下類。剎那超越成佛。法云。爾者歸三心實儀念佛。自然施自他。是成彼此三業。不相捨離云。念佛者。故二祖云。十劫正覺昔。催平等慈悲。無隔十方。眾生入諸佛揆棄。以凡夫可發。貪瞋具足安愛底。少一念歸命時。身心非我。彌陀成一致者。彼此三業成。謂而行住坐臥。即彌陀四威儀也。佛衆生成一。迷無二者也。此上終日念佛。即具無念功能。終夜願往生。即得無生益。滅見性火自然。寔哉我等。本分自己心。

兼如如含識。隔塵塵法界。無為障礙。客塵煩惱。自他彼此。分別情量。此故以聖數量云。法門以菩提心。談佛法。意大異也。故宗家釋云。口說變空。心行怨。是非入我。如山岳。如此不可近。育名利身。惱思愛。清淨於法體。何有相應耶。爾者早歸命。果地佛智。離機功。則思生。易往淨刹念佛時。截三世。於南無當念矣。已上二今執持名號者。彌陀經四紙。十七段。總體。其功德廣大。不可思議。而出離最要通。凡聖也。其所以念佛三昧。雖通諸佛。十劫正覺時。立此三昧說。前前名此佛三昧。從彌陀成念佛三昧。主之後。遠遠久久諸佛。依彌陀三昧正覺成。有也。諸佛無量。德名具足。別其主宰。成無量佛云。名成就故。以總攝別時。無量佛本師成正覺。得無量報應身。及變化身。皆從無量壽極樂中出矣。又大經云。獨留此經。止住百歲。禮讚云。萬年三寶滅。此經住百年云云。此經者即念佛三昧也。念佛者彌陀經總體。隨自

意說云。此經。是即諸佛。依是三昧成正覺。劫末衆生。稱此三昧成彌陀三業。出離生死。故凡聖共以念佛證菩提果。明矣。宗家云。晝夜六時。強發願持心。不散業。還成。見佛花臺主。須臾變作紫金身矣。二祖依成三業。念佛勸事。以彌陀經大綱。顯三心實義。如獨一名號矣。上來成三業安心其要解畢。

第八 發心問答章

問。一念發心者。其義如何。答。菩薩於生死中。初發菩提心。名一念云。一念發心。問。元祖上人何依經論。立此名目耶。答。華嚴經曰。菩薩最初發心時。一向求菩提。堅固不可動。彼一念功德深廣。無涯際。窮切不能盡云云。依此文。立一念發心也。一念發心。記鈔云。竊以釋迦一代之本懷。彌陀六八弘誓。本意得其所詮者。唯以菩提。即為宗骨者乎。以是最初從華嚴。至梵網等戒經。論其所詮菩提心。外更無餘事歟。又妙法蓮華者。諸佛出世。本懷衆生成佛。直道也。考本迹。二門之心髓。唯是志求菩提。全無別

法。提婆品云。為求大法故。推作世國王。不貪五欲樂。追鐘告四方。已上。明知三界六道。如幻果報。宛如空魂。又妙莊嚴品云。誓入山林。得菩提。獨出市中。感名聞云云。此品中。切明彼事。佛意唯以菩提為重焉。今私云。如密教有菩提心論。二教論引金剛頂發菩提心論云。諸佛菩薩昔有因地發是心。已。勝義行願為戒三應地。乃至成佛無時暫妄云云。又大日經百字成就持誦品疏第二十二曰。前說虛空心。即是菩提心生也。又答釋云。虛空心者。法界體性種智故。名根本智。從根本智生菩提心。是即名云後得智。諸佛因位。於此智發心。一念不誤。名金剛心。於此心自誓。四弘六度。堅固。則成正覺。而於生死中。自在分身。周徧化衆生。名云後得大悲。故法華云。我本立誓願。欲令一切衆生。如我無異。又大日經密印品云。三昧耶者。是即自誓也。一切如來本所立之誓願。為欲普為一切衆生。令開佛智見云云。又首楞經云。若此虛空。性圓周徧。本不動

搖。乃至如來本無生滅。長水疏云。是藏性中真功德。故。無方。大用徧。一切處。作利益等云云。又且約權實二宗。如法相宗說十六種空。是即一切諸佛因位。自誓發心皆是第八阿羅耶識。含藏種智云云。如般若宗說十八種空。法藏疏云。般若是一切根本。實智也。波羅蜜即權智也。一切諸佛於實智上。施權智。化用時。能令。生死。衆生。度脫。又如天台宗。六波羅蜜云。以五臟五味。配當。契經。如乳。調伏。如酪。對法。如生蘇。般若。如熟蘇。總持。如醍醐。如來設教。如醫王云云。又涅槃經。聖行品。說五味。智者大師依法花攝。一代時。以一經。說立五味。譬醍醐味。醍醐味者。即本門壽量說。然我成佛已來久遠。是即久遠已前發心。一念也。此一念者。即迹門。提婆品。情存妙法。故說。情存一念也。今開本懷。於末世。流通法華時。普賢勸發品。汝已成就。不可思議功德。深大慈悲。從久遠已來。發阿耨多羅三藐三菩提意。作此神通。願云云。亦北齊慧文禪師。備空有中之說。立一心三觀。智者依之。

立一心三觀。釋法華之觀心焉。其所要有菩提心。故楞嚴先德云。先學四教四門算。次學五時算。後開明一念三千心地。是頓證菩提。號成正覺而已。復云。若悟一念三千。遍一算處。所以何。一念實相法界量同。理體杳然。始終無二。故法界海本。屬一念。白雲青山是何者。只是一念影像也。春霞秋霧是皆一念也。地獄天堂。是自受法樂。宮等云云。已上批。又如密乘。榮西口決序云。持三種菩提心。誘大度量勇士。欲令佛乘。五相盡宗致。於戲即身成佛。方寸前。自受法樂圓明中也。乃至探深。悟秘。其是真言行。菩提用心也云云。粵元祖上人志學。攀叡嶽雲上。之後。四教五時之教。前味一乘。醍醐。一心三觀。床上一念三千。月輪明。而三諦即是妙觀。雖雖明。煩惱即菩提之。意邊。生死即涅槃。於一念還着。煩惱本執時。可有自他失。終捨聖道。歸淨土。學淨業。闍利書。兼習黑谷教。然而後詣熊野山。依神勅。遁市中。脫名利。垢衣。空也。語銷心。而以彼師。慕迹。起居風轉放。振化六

十州。于時正應二年己丑八月二十三日。攝州兵庫救世精舍。化緣盡。春秋五十一。示衆曰。此日欲唱滅時。江南北鄉。碩德。師就丘阿。離機。三業。念佛獨往生。雖領解。猶欲聞最後法門。來會。宗祖云。雖同三業外之念佛。唯詞計。不得心義理。一念發心。人。他阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。嬉。有二。祖言下落淚。是即二祖果滿獨悟所。廓然無生。全體也。是一念發心。傳一器之妙語。佛心不傳之傳燈。不識果分悟道。名號實體相承。不可思議以心傳心。故言語道斷。白紙不傳之傳燈也。何動樹。爲知風。如打草。驚蛇。以於爰鈔序云。一念發心者。宗門。寶鑰傳燈。祕藏也。大度量之爲機外。是不可傳。乃至一器。水傳一器事。十地灌頂。自受法樂。法水。傳一炬之法燈。後得大悲。無盡燈也。無釋經出。一炬無盡傳燈。名號智火。一燈見。則照根本無明。無盡光明。而一行三昧。不思議以心傳心。妙術也云云。又理趣答釋云。祕藏之奧旨。不貴得文。是糟粕。又大日經疏云。如來深甚密藏。不可以言說示人云云。

凡知道者如謂知其風。文宣徒三千。獨傳孔道者。有曾子。又我大師能仁弟子八萬。獨傳佛心者。有大迦葉。道常也。以言語不可傳。世尊拈華。老尊者獨微笑。終正法眼藏妙心。傳一器。而以佛心印的的悟徹大道。離文字。絕言句。是知道之理耶。今名號者。諸佛不思議妙理。萬德圓備。報身。酬因。果海也。實體。毘盧法界。性而萬法不變。大道也。何江南北地。獅子象味。狐鼠肉。漢。大龍。一滴。爲大雨。知深德耶。故探二師。深意。觀音勢。至。迹化。內證。慈悲平等。續化。傳法之權謀。自然顯本地。冷鑑事。超餘師。嗣法。問。上來。依解釋。一念發心者。且一代顯密。其義明矣。爾今一念發心者。聖道淨土二門中。何耶。答。同。雖發菩提心。宗祖一念發心者。淨土菩提心也。故互菩提顯密。其依處也。問。菩提者佛果。何。各別耶。答。佛果。一同。能求。心。差別有。故約能求。顯密淨非。無異義。爾淨土菩提心者。如何。答。宗祖領解他力菩提者。彌陀經。皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提之發心。是

他力淨土菩提心也。宗祖依彌陀經立宗故。一念發心，是此經菩提心，取為本意。故鈔云：阿彌陀經略記，不退菩提有三。一者現得菩提云云。夫菩提心者，菩提佛果名也。心者能救心。故序分云：言菩提者，即是佛果之名釋。又心者即是衆生能求心故。云發菩提心云云。問：今菩提者可通定散如何。答：上言菩提心等者，二門總通菩提心也。是從定善三福開菩提心故。可通定散。問：一念發心者，所領解菩提心也。何言二門總通耶。答：散善九品菩提心者，定善第三行福菩提心也。到散善開說時，經上中品上下品說菩提心也。雖爾定善菩提約能機，散善菩提心是佛自說故。佛意菩提心也。總雖通別局散善，不可通定機。問：其意如何。答：定善自力機故。散善他力自說故。料簡總別通局。判今發心散善約佛意故也。問：其證據如何。答：序分義曰：唯願我身々同虛空。心濟法界。盡衆生性等釋。中師三祖解此釋：唯願我身々同虛空，上句。淨土菩提心也。心濟法界等，下句。聖道菩提

心也。如是舉二門菩提。次下配三業。而至結文，我發此願運運增長猶如虛乃至心無厭足是即離三業結。他力菩提心故。可局散善。勿論歟。問：爾者今彌陀經菩提心。觀經散善菩提心一同歟。各別歟。答：此義口決抄解云：先師云：一花堂舉二經菩提心。無傍正散善他力故。佛意菩提名號為體也。爾者同隨自意故。不可差異。其上雖廣定散。望佛本願。依釋定散等名號也。又序分菩提次三業結文約他力故。不為二經傍正。今私云：解二經傍正。彌陀經菩提心名號實義實體菩提心也。於觀經雖論定散自他菩薩。俱以落在機前。依之無傍正。元祖難顯本意。以是支秀。上六品菩提心者。同淨業正因。依中祖御義。上六品淨土菩提心。又智論等菩提心。幽遠也云云。已上其上宗家云：似已上諸善無其功。依之異流問公。於之存取捨。後學可明之。今且解傍正散善雖自說。定散開福九品故。實上六品菩提可蒙機。爾者則俱是釋迦教之菩提心也。今宗祖一念發心。彌陀經不退

菩提心也。此心名號酬因報身菩提心。他力菩提，離定散二機菩提心故。能所合成菩提心者。名號他力實體。是彌陀經不退菩提云。然則上六品菩提，雜類故。唯非他力故。彌陀經不退菩薩同日不可語。今舉上六品菩提。解他力菩提。雖雜類同淨業故。學傍而以為顯正義。故今吾宗一念發心者。彌陀經不退菩提。元祖一念發心正義也。上六品傍義非正分明也。已上口決抄。二祖如三心喻。海師如病藥對治譬。喻三心於券契。喻名號於金砂。今如是雜類之菩提。如券契捨券契。不如取名號菩提。觀經病藥對治。釋迦教。彌陀經治重病妙藥故。劫末百歲重病不施口稱妙藥。如何消除。無明習氣海師藤澤御義。故他力菩提。昔酬因別願名號也。功德不可思議。諸佛同贊故名號即發心菩提。又不可思議也。何隨類設化同菩提。是泯絕機智一念發心。凡慮不落取捨故。鈔云：言菩提等云云。其佛果者。華嚴梵網之毘盧遮那報身法華本迹二門。毘盧遮那報身。大日經毘盧遮那法身等云云。

今阿彌陀經宗彌陀者。毘盧遮那法身本願力故。名號酬因報身菩提心也云云。今私云：依大乘同性經。彌陀報佛報土也。何今云法身耶。又定善義真如法界身。豈有相而可緣有身可取。然法身無色。絕於相對。更無類可方。故取虛空以喻法身之體也。爾者法身虛空也。何無色無相。有本願耶。答：三身義。顯密之賢哲。運智勞辨所也。故聖住經。遮那。楞嚴。菩提心論。智度。摩訶衍。又二教論等。三身四身六身三十四土。異義。自古常途不為一判。顯密異論也。今且解之。尋色相本源。法報應。三三身者。隨體相用。所分別其實體者。法身所具。三身故。三身相即時。俱法身一體之故。宗家釋。諸佛三身同證。悲智果圓。等齊無二等云云。故上引華嚴法華。彌陀是三身相即。為知法身也。論實教。三身時。華嚴梵網法華報身。久遠遮那化身即法身云云。又如信心銘。幻化空身即法身云云。又大日經不可思議疏云。三種常身者。法身等。三身也。悟。

生死本不生故。言常身矣。又如華嚴。彌陀。是法藏身故。宗祖云。名號。法界。酬因。功德。者。說法界身。彌陀。出。法界者如虛空。故法身。喻虛空。又法界藏身者。大日經云。無量身同。入於法體。則轉阿字。成。大日。是無量身。法界藏身故。一行疏云。無量身者。無盡刹界。現圓光。此遍一切處。虛空無邊。乃至廣長。普至無邊世界。是以攝。清淨句門時。轉呼字。成彌陀。是報身也。又至衆生界。隨性。令開語。遍一切佛心。此心攝婆字時。轉成釋迦。是應身。爾三身互具。明矣。法事贊云。三身化皆立淨土。以道群生。法體無殊矣。但。宗家取虛空。以喻法身體。真如法界等。虛空釋。大日經曰。虛空自含法相。而不可得也。無量功德。只無相無名。則何以顯示故。依假觀。於有形。有色。土。入無形無色時。言辭寂滅。空空種種。說無盡也。今宗家釋。言總像。假立三十二相。法身體。周遍法界。如虛空。故。依假立相。入法身。無色無形。故譬虛空。真如法界者。無垢真如也。行願品記云。法身。以無垢真如。為體。

安樂集云。真如實相第一義空。自性清淨體無穢染云。又無上依經云。法身體。遍諸衆生。妄塵煩惱。為所覆矣。此經說法身有垢真如。處胎經云。法性。如大海。不說有。是非。乃至取證。如反掌。故有無兩垢機。前的利根。一念是非也。喻釋摩女。如一念不生。前後際斷。如龍女。脫垢鱗矣。又明眼論云。十界依正。皆法身故。別言不可說何形。故法身說無形。青黃赤白。悉法身故。別言不可說何色。故說無色。以虛空為喻者。非言無形。乃至虛空。有形色。法身可有形色云。亦大日經疏云。心法有形。阿字有相。以為方便假觀時。色心不二時。心即色。色即是心。體。何無色云。心色一時。孤心有形色。何無形云乎。爾宗家無色。絕眼對者。大疏四云。法界者。衆生界也。即是心界。心界即本性淨。本性淨者。即是遍至一切處。同虛空等。今依此義。離假觀。釋法身。理體故。無色。絕於眼對。釋。大論十八云。問云。不應言無相。何以故。於諸法無相即是相。若無無相。不破一切

法相。何以故。無無相故。若有是無相。則不應言一切法無相。答曰。以無相。破諸法相。若有無相。則隨諸法相中。若不入諸法中。則不應難無相。皆破諸法相。亦自滅相。譬如取火。木然諸薪已。亦復自然。是故聖人行。無相三昧。破無相。故破相者。破無相也。碧巖五曰。僧問雲門。何如是法身。門云。六不收。又僧問夾山。如何是法身。山云。法身無相。圓悟云。六不此。佛案有者。道唯是。六根六塵六識。此六皆從法身生。六根收他不得。乃至不見。道教中。佛真法身。猶若虛空。是皆以無相。破無相之謂也。般舟贊云。同時而有。心識。若不與空界。同時有云者。一切衆生。即是無因而始出。心識若無本因。同木石。無六道之因業。若無云者。凡聖苦樂。因果。誰覺誰知。又楞嚴講錄云。覺明空昧。相待成搖。故有風輪。執持世界等。又易探玄曰。火騰水降。交發立堅。坤為巨海。乾為洲潭。以此義。故彼大海。中火光常起。彼洲潭。中江河常住。水勢劣。火則結為高山。是故岩巖。

則成焰。融。則成水。土勢劣。水則為草木。是故林藪。遇燒。則成土。因絞。成水。交妄發生。遮相。為種。以是因緣。世界相續。故長水師云。一心。不覺。依最初動念。細塵擾亂。風火水地相激。為世界。皆無非性。覺妙明妙矣。爾者。儒佛玄言。以因無。謂耶。陰陽五行。精明合。世豈以同焉。故朱文公。經說。明合。即是吾家大極。二五本混融。造化萬物。又程子云。心發於思慮。則可謂之情。草木有心。而無情。亦名義集曰。汗粟。賦。此方。稱草木心。祕藏記云。子粟。賦名。處中。非情等。心也。是多。名。慮智。有情等。心也云云。復草木。五大所成者。理學類編云。問。鳥獸。又有。智覺。有通塞。草木。在否。朱子云。有如一盆花。得此水。澆灌。便敷榮。若擢。玉髓。切。似不便。恐。敷。若拆。玉。連。草。功。ナンスル。ヒク。等。拆。便。拉。梓。云云。周茂叔。窓前。草。不除。云。與自家。意思。一般也。爾。法身。全。無。因。無色。非。施體。分明也。今私云。三身者。法身。般若。解脫也。法身。理如。虛空。空空。心生。般若。依。般若。成。正覺。云。解脫。解脫。者。覺也。即是。佛果。菩提。故。大日經。一行疏。

自虛空生菩提心。菩提心覺也云。以是般若法身自受用智解脫。他受用也。故如上引宗家釋。諸佛三身同證悲智云。是般若根本智。解脫覺故菩提也。菩提者度一切衆生故。根本後得以法性法身所用智。三身同證悲智云。智度論百云。般若與方便本體一。而所用有異。譬如念師以巧方便故以念。作種種異物。而各各異。今毘盧遮那亦復如是。能以遍一切處真金智體。造種種氣云。大疏云。本一體者。內證正體智根本也。所用異後得智也。又三論玄曰。般若方便。實無前後。肇公云。方便智別用。而不可言說也。故今經之於無爲。又無極之體說。論一法句者。清淨句清淨句者。智慧無爲法身說。又宗家法身常住而若虛空。淨土法身土故。無所畏也。無所畏故。云若虛空。宗家云。今彌陀現是報身也。又今既成佛。即是酬因身也。報身者。法身他受用故。名號者。酬因別名也。又法事贊或現真形。無利物。是理法身也。或同雜類化。凡愚。智法身也。故果得涅槃常住世壽命長遠難可

量釋。又彌陀身心遍法界。影現衆生。心想中亦永證無爲法性。身釋。其上互具三身時。諸經論語不爲一偏。現三身。依化各別也。且今日。如應化。在寂場著珍御之服時。云。盧遮那。遊鹿園著垢衣時。云。釋迦。珍弊。異。機見前。報應。名。隨。化。雖。顯。別。共。法。身。帶。名。佛。也。喻。莊。子。成。蝶。時。非。莊。蝶。成。莊。子。如。非。蝶。故。酬。因。報。身。彌。陀。如。說。十。劫。如。弊。鹿。園。又。彌。陀。法。身。佛。也。云。時。周。遍。一。切。處。法。界。無。盡。體。珍。如。寂。場。此。時。十。劫。全。一。念。己。心。現。無。爲。形。故。一。座。無。爲。亦。不。動。也。大疏云。若不閑方便。徒有所說而不能令他建立。無上善根。入一切如來之位。爾者諸佛。內證。皆。法。界。法。身。理。體。也。是。如。一。理。體。出。現。方。便。般。若。一。金。如。爲。異。物。故。彌。陀。法。性。法。身。生。方。便。法。身。時。廣。略。相。入。滿。自。利。成。解。脫。果。云。是。修。因。感。果。佛。三。身。相。即。報。身。也。又。二。身。所。具。法。身。佛。體。法。身。本。願。力。法。身。如。來。本。願。所。成。果。名。名。號。實。相。亦。三。字。果。名。法。爾。文。字。也。故。密。乘。明。法。身。說。法。隨。緣。萬。法。皆。是。法。曼。多。羅。

聖衆談。依之彌陀法曼多羅上首名。妙觀察智。主崇。妙觀察智者。名轉法智。彌陀。是自性法故。四種法身說法中。自性法身。如來說法也矣。爾。彌陀經。現在說法。法身說法。地上菩薩十六大菩薩。爲。法輪。成。如。法。身。如。來。說。法。不。斷。不。證。萬。法。一。如。法。法。塵。塵。一。一。如。如。故。今。日。妄。覺。相。對。而。二。非。權。機。對。待。說。法。依。釋。論。生。滅。門。惑。理。相。待。轉。五。有。真。如。門。機。絕。待。獨。立。真。如。故。轉。迷。開。悟。而。二。道。理。會。以。不。解。智。解。不。二。說。相。不。動。云。爾。者。三。身。四。身。久。遠。今。日。感。見。不。同。法。身。如。來。自。受。用。智。顯。發。爲。所。用。時。方。便。後。得。現。他。受。用。成。正。覺。施。化。時。於。十。劫。說。是。始。覺。佛。也。華。嚴。頓。大。機。前。自。受。用。法。界。藏。法。身。說。真。形。皆。是。機。見。異。如。影。像。今。彌。陀。實。體。者。法。身。無。量。故。壽。又。無。量。也。無。量。名。色。體。用。皆。無。量。佛。名。色。體。用。萬。法。皆。彌。陀。法。身。三。摩。耶。也。淨。土。經。利。益。此。佛。利。益。故。單。心。無。二。不。解。會。利。益。也。故。宗。家。一。到。彌。陀。安。養。國。元。來。是。我。法。王。家。釋。法。照。一。念。彌。陀。稱。得。彌。陀。號。至。彼。還。同。法。性。身。釋。以。之。法。身。如。

來者。三身同證。在衆生己心彌陀也。虛無之體。無極。謂其宗本者。本無實相故。非十劫佛。以始覺十劫。契當本覺理。始本不二佛也。是酬因報身云。酬因果。即名號爲體故。十劫者全一念也。一念全無念故。無念作用。南無阿彌陀佛也。是即發菩提心故。法界體性。名字。阿彌陀經。彌陀者。積劫果德。上具。所非報身佛。依之法藏菩薩本懷三身相即佛。同日。不可期談矣。故法身。本願力云。無所難焉。問。今一念發心者。彌陀經阿耨菩提也。爾者以阿耨菩提。名一念發心意旨如何。答。彌陀經。菩提者。酬因報身佛果也。佛果者能所合成。名號。故鈔云。祖師所立。一念發心者。名號酬因報身菩提心也云云。名一念發心者。所領解本願成就文云。乃至一念至心廻向云云。今一念者。即至心廻向一念也。發心者能領解心也。能所合成。名一念發心。阿彌陀經皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。是能所合成佛果也。此佛果者。酬因報身名號也。故三經一微。以名號爲實體。體道理。名一念發心矣。口決鈔。

曰。發心者能領解心。是從果向因心也。餘流從因至果。吾宗從果向因也。故時宗菩提心者。名號酬因報身菩提心。是初祖立佛果之極談也。依之六時往生居讚。是教相傳說贊。而從果向因傳也。又熊野直傳之趣。從果向因。更無疑慮。其果者彌陀正覺也。其因者衆生往生也云云。解之正覺往生者。一念發心。至心云者。從果字方所成。名號酬因報身。心是即南無阿彌陀佛也。此以佛一字窮報身佛果時。以二十願佛果習。其所以此願名計念果遂。果者佛果也。必定得佛果。故。果遂云。其取證成就文云。曾更見世尊等云云。世尊者佛果。謂彌陀也。會者十劫也。更者見佛也。即十劫正覺時。佛更見佛。歸命之真實誠心。是名南無。即始覺正覺也。阿彌陀者本覺往生也。故宗祖云。南無者始覺機。阿彌陀者本覺法。故云云。依之。名號者。始本不二全體名也。宗家釋云。衆生憶念佛佛憶念衆生。彼此三業不相捨離矣。是彌陀正覺因衆生本覺。立乃至一念自誓。願心不虛。終成佛果。是

名法身。即發菩提心。一念也。菩提者。佛果心者。能求心也。能求心者。衆生往生。因衆生往生。誓本願。發心。一念如金剛堅固。取菩提果故。名云一念發心。因往生。生起成正覺故。名從果向因。其發心者。始覺正覺。正覺者本覺名號也。名號者本願。乃至十念成就。乃至一念。流通乃至一念。即所領解。三心所具名號。故。今。一念者。所領解。本願云。此願。因衆生往生。發。故。廣大。無涯際見。即能領解。本願也。宗祖上人。是名一念發心事。本體。乃至。成就。一念。流通。一念合。為阿彌陀經。執持名號。一體時。其名號者。酬因報身佛果也。此佛果者。凡聖一體菩提心。故。阿彌陀經。菩提者。能所合成菩提心。故。皆得不退轉。阿彌陀經。三藐三菩提。說。又彼經。菩提能所合成云意。彌陀正覺淨花。從往生開。衆生往生。果。依正覺熟。故。正覺往生無二。南無阿彌陀佛也。以是彌陀經。菩提者。能所合成菩提心。故。以不退菩薩。今為一念發心者也云云。問。離三業。一念發心。有勝劣耶。如何。答。離三業

者。捨自力分。發心者。生淨土。菩提心。故。前三業。劣。今發心。勝云云。問。此義不爾。成三業所立下。離三業者。一念發心。所在。乃至離自力當體。即菩提心。判然。一同。不可有勝劣如何。答。誰云。離自力。三業。成他力菩提。故。非淺深。雖爾。安心次第。教時。非勝劣無淺深。故。三種安心體相。用。分別。離三業。用發心體也。捨自三業。成他力。三業。是他力。云。成三業。是顯他力發心。故。成三業。相也。其所以離自力。三業。當體。成他力。三業。成他力。全體。是一念發心。他力菩提心。成就。他力菩提。一念者。念佛三昧境界。故。離三業。成他力。化相。發心。離自當體。離三業。成他力。名。成三業。成他力。菩提。相。一念發心。他力往生體。體用。分。時。化用。名。劣。體相。勝也。文名體不離體用。相。即。方。約。成三業。體用不離名體。相。即。顯相。故。此時勝劣淺深之不可有前後。以之離三業。發心中。間立成三業。此他力實體。顯佛果相。意也。爾者名體二而之邊。約。存勝劣。是入時衆人。神勅念佛。安心

習之次第也。名體不二時。離三業當體。成他力。云。一念發心。實前後勝劣淺深。曾無也矣。今三種安心。中。以一念發心。為體者。發心佛果者。上求下化念佛。故。六字之中。本無生死當體。即得往生。住不退也矣。又宗家。及十方法界。同生者是釋。又曰。中居贊列。上下。入。皆阿毘跋致。大菩薩云云。人字。可付眼。是皆得不退轉。阿耨多羅三藐三菩提。心。明也。器朴十七段中。第十六意。依。阿彌陀經。中。一念發者。皆得不退轉。乃至菩提也。已上。論。有。子細云云。畢竟。一念發心者。名號酬因。報身菩提心也。菩提佛果。心。能求心。此心者。無緣。大悲心也。依。大悲。發。此願。成。大願。得佛果。其佛果者。根本後得。不二妙智也。故宗家。自覺覺他。覺行窮滿。名之為佛。釋。是。即能歸所歸。無二顯名號時。始覺智。證本覺理。本覺往生。依。始覺正覺。決定。所他力。云。佛果。故宗祖云。往生者。理智契當。名。往生云云。是。始覺。正覺。依。本覺往生云云。即。從果向因也。故。二祖云。別時。正覺。從。凡夫稱名。成。衆生往生。定。彌陀正覺。畢。依之。衆生稱念。

今本願成就。昔全無二故。一念即十劫。十劫即一念也。是理智契當。自覺所歸實智。覺他。能歸權智。覺行。悲智雙行。自利不二能所合成所之佛果也。其果者正覺往生無二名號也。是名覺行。然者自覺覺他。始覺一念。覺行。始本不二名號。是發心云。即正覺故。三覺窮滿名之爲佛之酬因報身佛果也。故二祖云。雨珍妙花者。十方衆生。往生決定。願體剋果。瑞相也。爾者一念者。自覺覺他。悲智也。發心者。覺行窮滿之佛果也。此果。從果向因。故。正覺往生。合一名號也。今以發心。三覺圓滿。爲佛果事。菩提是佛果。心是能求心。此心。自覺覺他。悲智心也。依之發本願。發心云云。成就所。正覺云。正覺者。悲智相雙顯所。覺行云。覺行者。因位。萬善萬行。功德。酬果上報身現名體。其名體者。本願乃至十念也。是即彌陀佛果。故。他力云。菩提。他力。菩提者。執持名號故。酬因報身。悲智雙行。顯南無阿彌陀佛所。云覺行。即正覺往生無二佛果。故。彌陀經。皆得不退轉阿耨多羅三藐三菩提。是他力。一念發心也。故宗祖

曰。南無者。十方衆生。阿彌陀者。法也。佛者。能覺人也。併機法。覺爲三重。爲三重一體時。名號外。無能歸衆。無所歸法。亦無能覺人。斷自他絕機法。所名號云。如是則悲智雙亡。顯覺行窮滿名號時。六字者。生佛不二行相也。衆生是憶念。彌陀始覺一念。佛廻向衆生本覺發心。故如前云。南無者。始覺正覺。阿彌陀者。本覺往生云。是始本不二全體行相。捨迷捨悟。一切皆捨離。名號實體。貴賤男女智愚賢聖無隔。稱南無阿彌陀佛。當體。同發菩提心。名號酬因。報身菩提心。是今一念發心云也。是從果向因。相傳者。生作佛之道。者無物。南無阿彌陀佛。聲。生。聲。即無生。發心。怪。賤。男女。隔。無佛戒也。右解所玄秀。一念發心集。一花堂記。同口決鈔要。習傳。コレラハ宗門。究大事也。必異流學解。見得。祖意契。唯時衆人堅固道心志。往生爲手引也云。

第九 以一念發心合神勅之偈章
相傳云。以一念發心合神勅傳時。一遍者神勅也。

解之。一者佛果。即阿彌陀三字也。遍者九界衆生也。九界全佛界。故名一遍。是而可知。以是十界依正一遍體云。體者名號酬因報身心體也。又云一者佛界。是彌陀始覺正覺也。遍者九界衆生本覺往生也。爾者九界。即佛界。彌陀。正覺依衆生往生決定故。一者始覺一念。是本願。乃至十念。成就。乃至一念等一也。遍者本覺發心也。故依一念能求心。成正覺時。佛衆生。成。同發菩提心佛果。是名不退菩提。即酬因報身名號也。此名號者。始本不二能所合成故。佛正覺衆生往生。衆生往生佛。正覺。正覺往生無二佛果。九界全佛界。名號。故。名。大字名號一遍法。初從地獄界之至九界。悉佛界。所具依正二報故。十界互具。正覺往生不二佛體者。名號酬因報身實體。故。十界依正一遍體云。故。本願。乃至十念者。佛界所具。九界習也。其所以一念者。始覺正覺。十念者。本覺往生也。依衆生。本覺。成。始覺。正覺見。成就。乃至一念者。九界所具。佛界。故。衆生往生彌陀。依成道決定。所者。乃至十念者。六字名號

一遍法也。乃至一念者。十界依正一遍體也。爾者昔九界爲衆生。以名號發本願。今至願成就。一念取正覺。昔九界本覺外。別始覺無正覺故。一念始覺佛界。全衆生九界本覺往生。本願乃至十念。佛界所具名號。成就。乃至一念。九界所具名號。十念外。無一念。一念外。無十念。以是一念全十念。互具時。百念乃至無量念佛也。念者念聲是一故。十即十生百即百生釋。是十界依正二報。悉名號所具報身佛體者。十界依正一遍體云。此以偈頌分。別三種安心。初六字名號。總要。一遍體。至解釋之二句。一念發心也。一者所領解本願。乃至一念。是始覺正覺。故佛界也。遍者能領解心。是本覺往生故九界也。九界所具名號。從果向因也。從果向因。故。依本覺往生。成。始覺佛果。依始覺悟本覺。始覺成佛果。六字名號一遍法者。一念發義。十界依正一遍體。從果向因義也。次。萬行離念一遍證。一句。要。一念發心用。初萬行離念者。離三業。義也。是自力雜善離念。他力三業成所。

一遍證云。即成三業也。離萬行自力念。成彼此三業。德故。佛界所具。九界三業。悉他力成。三業所。一遍證云也。故宗家云。正顯念佛三昧。功能超絕實非以雜善得。爲比類矣。後人中上妙好花者。一頌結文也。是即靈一念發心體。其所以一念發心者。名號酬因。報身菩提心也。此菩提心者。彌陀經皆得不退轉菩提。即執持名號一心不亂當體也。名號者。本願乃至十念成就。流通一念。是即念聲是一稱名。故能所合成。名號云。一念發心云。爾者佛界一念全。九界發心故。一念正覺全發心往生者。正覺往生無二指佛果。不退菩提等。是即一念者。佛界所具名號。發心者九界所具佛果。故六字果號者。能所不二十界互具。生佛一如。佛果名體不離所。南無阿彌陀佛云。故以結文爲一念發心體。是酬因報身果號。凡夫出離佛也。名號者芬陀利花也。經云。是人中芬陀利花。故。人中上上妙好花者。能所合成名號云。以之宗家釋。若能相續念佛者。乃至名入中上上花。亦名人中妙好花。

矣。故爲結文也。又義云。人中上上者。乃至一念稱名。妙好花者。名體不二發心佛果也。人中上上者。九界具足佛界。妙好花者。佛界所具。九界生佛本具當體蓮花也。是即妙法蓮花本有一心可心得。爾者妙法念佛。體用同一體佛果也。故念佛人。人中妙法蓮花。說故。法花讀誦人。自稱名。有。稱名念佛人。不讀法花讀誦。有。出慈悲觀心念佛門。如是道理有故。一念發心念佛者。其實體生佛本具蓮花。稱名。度每生一蓮。西方釋者。彌陀在己心。現一座無爲形之意也。南無阿彌陀佛身。極樂蓮花開。是一念發心念佛實體。故人中上上妙好花釋。是稱名人全體也。又阿彌陀佛。迷悟道絕。唯名稱生佛也。是九界所具佛界者。悟悟云。衆生心中佛界不出。迷迷佛界所具。九界。一佛心中衆生界不出。報身周遍名體。十界依正二報。故。森羅萬像山河大地。草木叢林有情非情名體。皆報身無量佛。無量名體。持戒破戒念佛。迷人覺悟念佛。善人惡人念佛。信不信

淨不淨念佛。無差別誓願念佛者。月一持稻葉露。九界衆生。無隔佛種也。故實相般若濟度衆生爲。無餘沈寂煙房酒肆爲。等往生同成佛。是十界互具名號。六字名號一遍法云。爾。六字名號一句。乃至十念。稱名一念。名也。人中上上。結句發心體。正覺往生佛果也。十界依正等。中句義用也。故神勅偈者。一念發心。名體義用意料簡云云。又次以託宣語。合一念發心。一念者彌陀正覺。一念也。於此念成。自他佛果。發心云。即從果向因也。果者正覺。因者往生。故發心心字。從果字方所成。名號酬因報身心也。故發心集云。南無者始覺正覺。阿彌陀者本覺往生。佛者始本不二全體文字也云。爾者始覺。十劫本覺。決定往生。於是自他成佛果。自他二覺。悲智雙果。酬因顯名號所。云覺行窮滿。南無阿彌陀佛。是自他不二正覺也。依之衆生往生彌陀正覺所成。故不言信不淨不。念佛當體自然住不退轉。是他力菩提心云。神勅云。御房。依勸。始非可往生。阿彌陀佛十劫正覺。

一切衆生。往生決定。南無阿彌陀佛所也云云。宗門安心至極。彌陀直授金口。此外何求。唯時衆能分所分僧尼等。至此御神託。常信。行住坐臥。意不忘。往生疑不可有矣。一念者。十劫正覺。一念。即始覺正覺也。發心者。衆生本覺往生也。依本覺往生。成正覺時。吾等佛果決定之一念也。此一念者。始覺南無也。發心者。本覺阿彌陀也。佛者始本不二名號。故。十劫正覺時。一切衆生。往生決定。南無佛神勅也。誠末世濁亂云。和光御慈悲深。故。弘願密意。施事。吾非元祖。誰得此弘教。難有神勅也。故口決抄云。不得依御房等勸者。十劫正覺時。彌陀衆生往生。一念落居。然者不論信不信。唯唱南無阿彌陀佛。吾等往生。彌陀正覺成。黑谷云。往生佛。御所作也。念佛。吾等所作也。是今發心付合。故。發心集云。熊野直傳。趣無疑慮云云。尙師傳。可開。右之一章。玄秀。切紙也。宗門無傳人。不可見。アリ。是尙究大事。去近代。時衆。道俗異流。安心本。故。煩書。中中異流學解。見習。

吾宗安心難入。唯道心堅固志。菩提心學解。熊野八幡御神慮。ナマナカノ智慧機功立。法談僧。吾家安心談義。盲者吾面美。他面ヨキトキキテホムルカコトシ。又貧者己力エセデ。鄰富貴カソウルガゴトシ。ヨクヨク心得云云。

第十 就三經相傳時宗鎮西辨異義並疏傳受章播州問答云。宗祖云。南無本願阿彌陀。非本願云云。是宗門三經相傳本據也。問。南無者歸命言。阿彌陀佛。彼佛本願也。何非本願云耶。答。此義宗門之祕事也。先大旨依三經會之。以宗家釋可辨焉。依無量壽大經。是問起。初光顏巍巍偈頌。四十八願終。至四誓偈頌。是法藏之言也。此文中一句阿彌陀佛云語無。爾者何以名號云耶。會之鎮西當流異義有。是習傳。名號大事習云也。問。以名號相傳三經。鎮西當流相違如何。答。鎮西當流異義。近代奈良袋中河。鎮西派以意。究三經相傳。書集納大澤之文庫。彼書之中。第十二光明無量。十二壽命無量。十四聲聞無數。此以三願阿彌陀經。彼佛何故號阿彌陀壽命光

明乃至人民三無量會。上三願阿彌陀三字定。此義當流相傳異也。其子細上三願及彌陀經文。名義難付合。凡六八弘誓廣云。攝淨土願。攝法身願。攝衆生願也。今三願攝法身願。自身佛德也。同攝衆生願。阿彌陀佛四字有。袋師不知此義。如是爲謬。念佛宗爲本。正意凡夫可發。攝法身諸佛一同義也云云。爾當流相傳意者。十八十九二十此三願爲大字唱句。其所以十。至心信樂欲生我國八字。南無也。是橫三當流所領解。十九至信發願修諸功德臨終壽時假令不與大衆圍遶現其人前廿五字。是阿彌陀四字也。即來迎也。亦廿願係念我國至心廻向等文。佛字也。問。何故以此願知佛字耶。答。願成就文。會更見世尊即能信之事謙敬得大慶矣。問。此文何佛字耶。答。世尊者彌陀佛也。佛者三覺圓滿也。佛取正覺。落居衆生往生。佛正覺即衆生往生也。但聖道一佛成等文。大異也。彼智解佛故。何同類耶。今會更見世尊見字。付口傳有。見者佛衆生見佛。是即以始覺智。見證本覺

理習。是法藏因位至心發願。始覺智一切衆生本覺佛。以名號歸命處也。其本覺者。本不生心地。入一法句。理性者。其理性者三世諸佛法界衆生無二無別。爾彌陀曠劫行道悟吾等心理。成清淨依果云云。故經說唯佛獨明了。宗家弗測所窺釋矣。阿彌陀三字十九願取。來迎者正弘願念佛來迎。傍定散萬行來迎。來迎餘行通邊。修諸功德說故。元祖上人南無本願也。阿彌陀佛非本願釋也。修諸功德雜行故。三心正行故。以歸命爲本願。是吾等本覺歸命心理故云云。亦來迎者。臨終壽時云。此臨終者稱名即臨終也。念念往生念念見佛。以此時今宗名。故二祖御詠云。ヨシアシノ言葉草置露。命消御名一聲。是心得。又來迎有二種。吾宗意。平生來迎稱名聲即來迎也。問。聲名十四不相應隨一也。來迎顯體也。唱名何來迎。答。其義權宗所談也。今念佛一法萬善妙體。即名號。諸師是許。大乘意。名體不離。極談也。故今非所論矣。稱名來迎者。大集月藏分。大念大

見佛等說。感師大念大聲釋如。諦知稱名即來迎矣。臨終來迎者。正及終焉慈悲加祐。令心不亂。無數千五佛來迎矣。問。稱名來迎佛體來迎可云一同如何。答。約機見不同。既修諸功德誓故。萬行來迎有。但修諸功德來迎由致也。約佛意現其人前此願之體也。言生因第十八願也。故念佛衆生攝取不捨。爾者來迎被生因人也。雖爾不可捨修諸功德機。故諸來迎因言非本意。故以生因。此願爲實體。唱名來迎。全臨終來迎一同也。既大念大見佛說故。平生念佛來迎有。不見人業成薄故。若此人及終焉。慈悲加祐可見佛體。又業成厚可見佛人古今多焉。今吾宗聲佛云者。離機功念佛故。臨終平生聲佛見佛不立二而恒願一切臨終時爲宗。臨終平生不立。二往生立。以之聲佛當體來迎見聲佛全見佛立。此身罪惡最下凡夫也。念佛佛本願。稱名來迎。此事。官者日月不見云。日月影蒙。目無聲云事。水鏡云物語。是吾宗聲佛來迎。故祖師稱息佛。

釋。其上名號者。酬因報身果名。周遍法界佛體。故無去來。來不來而迎。不迎而朝朝懷佛。朝朝見佛。現其人前者。併念佛。平生稱名。全臨終稱名。平生來迎。全臨終之來迎也。何終焉來迎。各別時宗。時宗僧尼。克克是。可心得事勿論也。又云。上云。第十八生因願。取南無二字。至心等八字。宗家釋義。可心得。言南無者。即是歸命。亦是發願迴向之義矣。發願迴向三心也。爾者三心者。南無也。是即至心信樂故。以十八窮南無。大經三心者。至信等之文也。云者。此意也是名所領解三心。又云。橫三心。又三心者。一心所具安心也。淨土論。我一心。論註。安心中。要舉。爾說三心。約三不機。堅次第。存。拾遺鈔廿八。一者信不淳。二者信心不一。三者不相續。若能相續。則是一心也。是云淳心。九品義云。度我。又救濟釋。一心不僞。南無云也。爾。今約三不說。堅次第。隨機故。觀經三心。云能領解。本願三心。十方衆生。故不拘機。歸命一心也。故云所領解三心。此三心。付深習。有。今至心等三心。

南無云。即佛意。一心也。彌陀因位時。十方衆生以名號迴向。一心也。是即衆生身中。一佛。南無。一心。歸命時。悟阿彌陀也。是佛身中。衆生。全衆生身中。佛故。衆生非衆生。衆生即一佛也。衆生身中。一佛。實。無量壽佛也。多衆生所具。一佛。無量。名。無量。體用業色有。是即法藏始覺。以修行。多衆生。佛。南無。歸命時。衆生。本覺開悟。佛身所具。衆生。法藏依始覺。成往生果。衆生所具。依佛。法身成。本覺正覺時。一佛身中。衆生。衆生身中。一佛。合成。能所一體。始本不二。顯南無阿彌陀佛。是名號酬因報身。云。於是生佛體。攝六字。吾等往生。顯名號時。彼此不離三業。始覺三心外。本覺三心無故。名號所具。三心云故。二祖誓戒云。三心者。金口誓也。是衆生身中。佛。歸命。一心也。誓者。一佛身中。衆生。成。佛果。誓。故。金口。者。阿彌陀佛也。誓者。欲生我國也。矣。他力。三心云。所領解。又觀經就人。三重。口傳有。宗門深祕也。三重者。鏡。面。像。三重也。是配六字時。南無者。鏡。阿彌陀者。面。佛者。像。是花

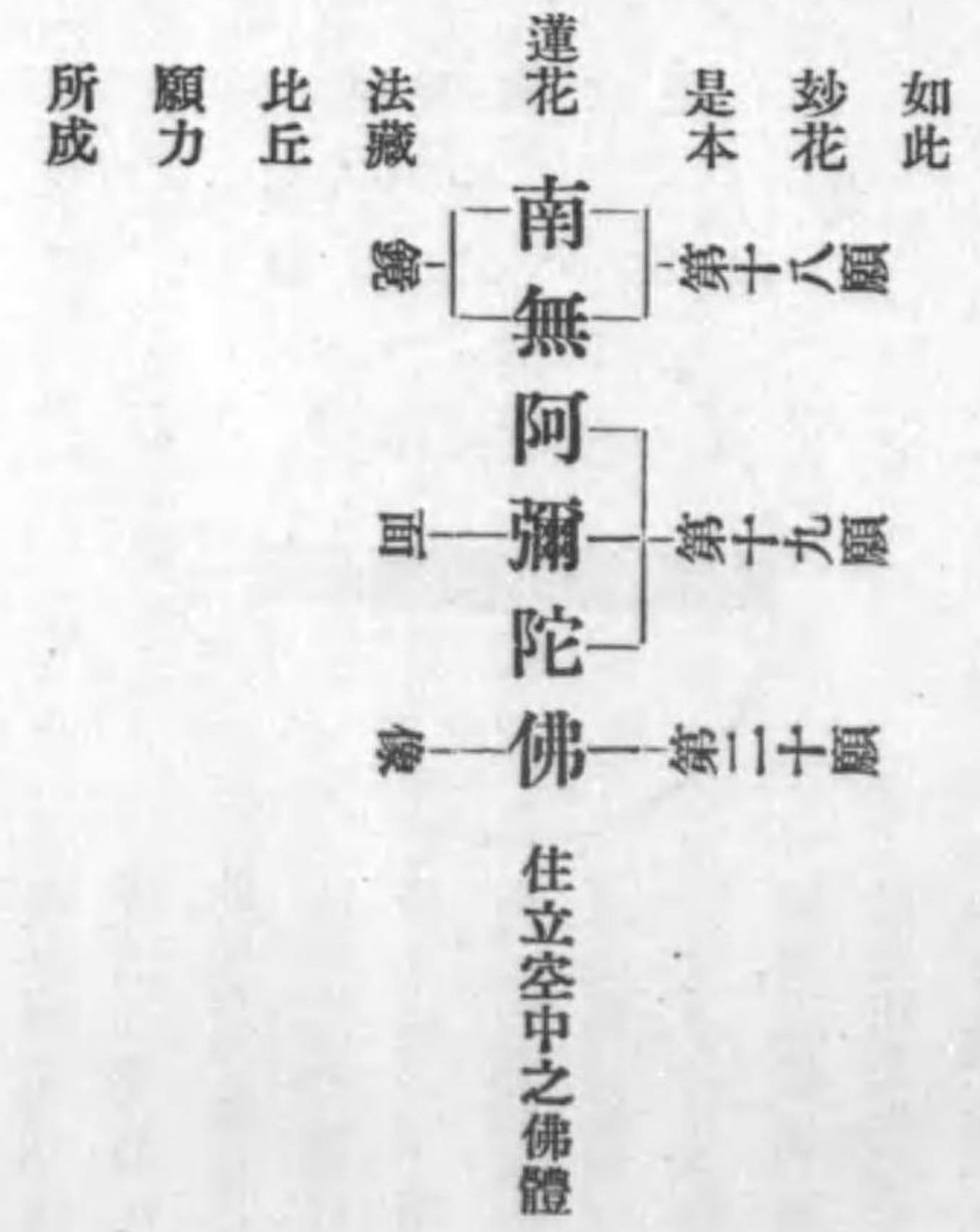
座觀。如於鏡中自見。面像文也。矣。又花座蓮花。宗門。取南無。其證者。經中。如此妙花。是本法藏比丘願力所成。說故矣。器朴論。今蓮花。名號實相釋。鎮西。願力所成。妙香合成。願云。義推分也。當流。非依用。法藏願力。名號本願。義理在絕言也。以妙香。豈願乎。宗祖上人。立名號義。法華願力。南無蓮花釋。即蓮花者。安心也。經中。除苦惱法者。除。凡夫苦。事南無也。南無。是歸命。又翻渡我。救濟云。是即南無。安心。蓮花。義明。矣。阿彌陀者。面也。者。來迎義。經中。無量壽佛。住立空中。觀世音。侍立左右。云。是阿彌陀。三字也。佛者。像也。前花座蓮花。上來迎。是得益無生忍。義也。無生。多類有。鎮西。大異也。定善義云。應聲。即現證得往生矣。來生。可往生。決定安心。念佛。成人。聲。即無生云。宗祖。不爾。一聲之間。即證無生。釋。畢竟。證得無生者。念佛。行者。稱名。當體。得往生。當體。落居。往生云。說。即得往生。故。元祖。有此。理。故。一聲之間。釋。觀經。即便往生。大經。即得往生。以一同也。當得。正命終時。佛。來迎。故。生。九品

士。是當得云。今上來義。舉。三經一徹。窮。名號。結文。先於大經。十八願。至心等。八字。南無也。十九願。至心發願。二十五字。阿彌陀也。二十願。係念我國。至心迴向等。文。佛。字也。是佛。字。習。子。細。有。此。願。係。念。果。者。佛。果也。必定得。佛。果。故。取。佛。字。是。先。言。如。就。文。會。更。見。世尊。故。矣。次。於。觀。經。鏡。面。像。三。重。口。傳。時。如。於。鏡。中。鏡。一字。取。南。無。自。見。面。像。面。字。取。阿。彌。陀。像。一。字。取。佛。但。花。座。蓮。座。取。南。無。則。鏡。蓮。座。同。體。始。覺。智。也。是則法華願力所成。一心也。面者。衆生本覺。理也。始本二而隔情。因。始本不二時。理無混同。而凡聖不二一體。成。覺。果。滿。云。此時。願。力。所。成。一。心。開。為。妙。香。蓮。花。當。體。像。云。故。始。覺。智。本。覺。理。顯。所。云。阿。彌。陀。依。始。覺。正。覺。本。覺。往。生。決。定。時。始。本。不。二。正。覺。往。生。一。體。顯。南。無。阿。彌。陀。佛。是。論。如。來。淨。花。衆。正。覺。花。化。生。說。故。二。祖。詠。云。照。光。中。我。有。鏡。影。見。知。是。如。於。鏡。中文。意。又。後。以。彌。陀。經。配。名。號。執。持。名。號。一。心。不。亂。南。無。也。阿。彌。陀。佛。現。在。其。前。阿。彌。陀。三。字。也。無。二。之。所。也。即

得往生阿彌陀佛國。皆得不退轉阿耨菩提佛一字也。故三經總體說彌陀果成。顯往生得益是可知。若以三經文取體相用。大經本願者實體。觀經花座化用。彌陀經文實相果名也。合二經納彌陀經一紙時。一心者本願。至心等。三心是南無二字也。即因三心云花座蓮花果上。一心取時蓮花者名號也。名號者佛果故。阿耨多羅三藐三菩提。是即彌陀佛果衆生往生也。故三經一徹究名號時。以彌陀經立一行三昧。此謂也。獨留此經云。此經住百年釋。此經者念佛云。是可知。又宗家疏習有是云。疏傳授。鎮西四帖疏立。吾宗五帖立也。其所以玄義佛意弘願門。序分義。一代化前門。是釋迦教也。定善散善。二帖隨機門。同釋迦教也。此散善義中。下三品念佛。唯念佛三昧門立。法事贊彌陀經贊。故合爲一帖之疏相傳。是取名號時。玄義弘願佛意者。本願約三心。南無二字也。序分定散一代化前故。阿彌陀三字也。是約花座文也。下三品念佛。合法事約不退菩提時。菩提佛果。

故佛一字也。玄義三經大綱。一經大意念佛實體也。故二祖詠云。山ノ端ニ仄メク月ヲ待ホトゾ。木ノ下關ハサモアラバアレ。是玄義意讀也。當流意玄義自真如廣大。皆立名號實體故也。其意前五帖名目同。仄月者。弘願稱名也。木下關者。定散二機也。定散兩門之益。通佛意有稱名。故念佛サヘ申。攝取月影。住他力弘願道理也。此故宗祖云。玄義分初。先勸大衆等釋。南無阿彌陀佛也。爾時御疏九帖。文文句句唯名號云云。以是知淨土經釋。皆以名號爲本意。名號者弘願他力果號故。宗家疏皆名號釋也。是即三心願力成。故南無本願也。阿彌陀佛非本願釋。即此意也。爾者異流相傳。彌陀經彼佛光明等文。願文。十二三十四文。又彌陀經三無量。共攝法身故。當流相傳異也。至是謬可知焉。又云。一念發心者。十八願。乃至十念也。是通三經相傳。乃至一念者。至心等。三心願力。一念稱名成。見者。一念者始覺一念。南無也。發心者佛果故。十九願二十願。共阿彌陀佛。

取佛果明矣。又觀經自見面像像字。又願成就會更見世尊世尊字。阿彌陀經阿耨菩提是皆他力佛果者。一念者南無也。發心者阿彌陀佛。故正覺往生不二佛果。一念發心者。即他力稱名也。又以疏相傳。玄義弘願門。故一念也。序分定散。化前故阿彌陀也。佛者散善義中。下三品念佛。法事讚也。故合阿彌陀佛則發心佛果也。故上如言宗祖御釋。玄義分初。自先勸大衆。至文文句句等義。是可得心云云。右三經相傳切紙。秀公之祕事。羽州發。余下野大際山住セルヲル也。秀公遷化兩年前。名目義大方出來。半也。是等宗門大事也。志人補義。人爲メニスベシ。



圖心三之解領所



時宗一遍
義者觀
經花座之
蓮之蓮
花取南
無即本
願三心
也住立
空三尊來
迎蓮花
習始本
二而機法
不離之一
心門也
故因願
三心傳

圖之像面鏡

鏡之
總體
取南
無之
二字
入文
可知
矣



前後白色生佛
二而之所自他
二覺始本二義
也。是觀經能領
解三心也。即化
前門而機之三
心也。中央黑色
曼多羅之黑壇
習。是彌陀經之
三心也。始本不
二能所合成南無
阿彌陀佛也。是
正覺往生不二三
心故。果上一心
門也。即執持名
號一心。覺行窮
滿名之爲佛也。

圖之受傳之疏



觀經自見面像
彌陀經不退菩提
大經會更見世尊

右圖所之三經相傳疏傳受宗門祕事。異流相承。異。吾宗相傳一。皆人師非執見。熊野八幡御相傳之故。以異流書。當流不可證。最元祖二祖發得已前。西山西鎮習流義。故釋義面雖准二派。兩祖本意。二神以御相傳解釋也。三祖七祖二十一祖述書竝一花堂解義。悉一器相傳之故。少無異途。中興宗門書註解人雖多。悉鎮西依鈔書解之故。義大異也。秀公常談之。宗安心欲會得。宗家五帖疏。信師小經略記。空師選擇集可讀。其上。宗門三經書讀。悉兩神御相傳符合義。三部書者。宗門三經書也。一。播州問答。是小經疏也。二。器朴論。觀經疏也。三。二祖十卷法語名。大經集。是大經疏也。是。異流見解難解。唯習可聞。時衆爲志學人多年。秀公所教訓。集言端畢。詞林文海。蠱濁而謬太多。後人速止。笑除邪解。補正義者可也矣。

正德三癸巳年九月十五日

越之前州長崎之道場往生院沙門如海

神勅教導要法集序

夫一代之佛教。屢喜集其文爲十二部。散花貫華之說。載在其中。而深廣也。粵宗祖一逼上人。號名智真大和尚。薙髮之昔。因輪鼓悟無常。修道後。欲明念佛直往之旨。參籠熊野證誠殿。一百箇日信願。新受神勅。示教開時宗門。弘通天下。自爾今秋八月廿三日。向四百五十回之遠忌。其就神頌。有廿一代上人鈔。其外諸師述作。雖各具詳。今亦爲學者。稻久山法阿上人。重編集之。號神勅教導要法集。爾思。夫佛法如海。信爲能入。故大信心者。說即同如來。又儒宗之言。尙以信爲最勝。故四乞食可去。信不可去。況佛法甚深不可思議者乎。有深心入佛法最易。是故上古之聖賢。以信爲尊貴。末代之信徒。以信心披見這疏則。必辨十界依正深理趣。豈不有掌中。依之彫諸梓。以行于世。高明更加潤色。

爾時 元文三年戊午天八月念三日
快存上人御會下

藤澤山 修領軒欽述

神勅教導要法集卷第一

熊野大權現神勅頌曰

六字名號一遍法 十界依正一遍體

萬行離念一遍證 人中上上妙好華

述正此神勅分初一句爲九段

第一憑神勅明本地垂迹德

第二辨勅頌二字

第三六字名號者南無阿彌陀佛也

第四南無者卽是歸命言也言阿彌陀者翻無量壽妙說

第五號一遍顯德名

第六法字註釋

第七就賦算文多疑問答

第八倚神勅表其累例

第九因神勅誌神國奧儀

第一憑神勅明本地垂迹德

熊野大權現儀趣至累例下述

言先神者其本體聲明神通妙田考用慮情言辭之難測量曰神神代卷曰神者鏡之略言也明鏡者移萬像無中一物鏡清淨潔白備正直德曰神矣故實問答集云神道者在天地曰神在萬物云靈在人倫云心也又云神道者本朝之正風朝廷之政道也兩部習合集曰窺本誓爲以利濟勸善元善事安不來從其成所來惡事安不來其自成所來何勸善不退惡乎聖德太子曰人王一代敏達天皇元年壬辰正月一日誕生直云神德雖然吾朝神國而三身如來無垢地菩薩催大悲本誓捨自受法樂和光雜五濁塵種種方便以調伏衆生終令誘引無上道也爾者神道本迹二門隱顯二水波分隔和光一體爲濟度方便也云同傳曆曰本門聖德太子本地觀世音菩薩也身語意業自行化他圓滿無所缺減迹

門過去世時阿踰闍國證生名勝鬘夫人容色端嚴聰慧明敏德行清潔忽證一乘妙理講勝鬘經矣震旦隋南嶽稱慧思禪師住衡山懷禪定塵讀誦稱念篤修瑩三昧慧玉踐十信行位根誠清眞理明弘宣大法或菩提達磨由勸誘降誕本朝證以片岡山詠歌不登其位下攝錄制萬機政平國家敬佛法興起堂塔佛法王法神道諸道垂示標彰也文句曰非本無以垂跡非跡無以顯本本跡雖異不思議是一也既皇太子祕本地聖容垂跡著儀相親友也小身現大身現鑑機說法佛神誓願皆以濁惡愚生爲利益本迹二門大悲施設寧顯然允伺熊野大靈權現本地座西方教主無量壽佛哀愍重障示和光同塵化益云屢我祖欲救沉沒苦衆深濁履霜至雪渴眞志拋慮祈念一心因達玄理靈勅親授金詞正雖歷遐代仰深和光訓樂本誓益篤修滿自他妙果也宗祖上人如傳錄右

脇大士勢至菩薩也二世悉地成就於安泰寶刹所標慈悲引接念佛行者迹門日伊豫國守生從童子敬三寶備慈仁俊智蓋歸向善提道頻欲出離塵埃果令剝除首髮天台汲圓頓流一心三觀琢戒珠特大悲慈念深厭離諸苦所逼濁世聊期利濟與衆生同無意常然安樂都矣又曰本地垂跡者佛爲本地神爲垂跡也於神道唯一習合有二儀垂跡云習合也志評論云唯一神道者是以理也性也習合神道者是事也相也理者一事者多也事理相性不異而則云理不隱云事不顯譬如唯一理水習合事波水不隱波不顯唯是水之動相名波波即濕水然者唯一如理水如習合事波習合之事全成唯一理故唯一不隱唯一神道理全作習合事故不顯是則知事理性相不二也矣舊事紀曰元氣渾沌天地未割化生一神矣古事記曰氣象未效作造化之首日本紀曰宗源者要集曰宗明一氣未分元神故歸萬法純一

之元初。是云宗源。明和光同塵神化。故開一切利物。本元。故云宗源矣。是迄本地垂跡儀述竟。

第二辨勅頌之二字。

先勅云者。天子言勅命也。勅詔美古登能利和訓。天子云法令制書勅。如字彙也。又曰。勅命。大日經疏云。人主勅無爲治。有司受命行之矣。正熊野權現教示。一逼上人勅詔故云神勅。神代卷。天照太神勅宜。逆天則無道。逆地則無德。外走本居。沒落根國矣。延喜式曰。繼受勅命。誕膺洪基。救百世導萬民富壽。又曰。奉請勅命。勿履薄冰矣。勅字畢。又曰。云頌者。詩六義其一也。字書曰。盛德仁世讚美。述作其文體豐。優長容世。又曰。頌。誦也。誦其人德也。以典雅豐。爲貴也。扱頌在其人德。誦既大權現讚美。始祖法德。誦顯名。因是勅頌。然則勅全頌。頌全頌。而無差異者也。頌之字訖。

第三六字名號者。南無阿彌陀佛也。

可仰名號攝取法光真體無盡含藏萬善。妙用卽玄。

超過衆聖。不論向背。洞朗無礙。不嫌清濁。圓常深照。一念忽消。多日積惡。一名能巨修治。多名含無量德。滅無量罪。勅宣誓益。弘通亦奇。擁護大法。修功迅速。塵勞垢習得永消亡矣。將依善導大師則。就名號修行。雖其業多。分立五種。正行。一。讀誦正行。二。觀察正行。三。禮拜正行。四。稱名正行。五。讚歎供養正行。雖立五種正行。以第五稱名正行爲正中。釋文曰。一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近。念念不捨者。是名正定之業。須彼佛願故也。正定云者。法藏菩薩於二百一十億諸佛誓願海中。撰定念佛一法也。故名正定業。由四行名助業。稱名一行名爲正行。護念經曰。各於其國出廣長舌相。徧覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生。當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所讚念經矣。疏鈔曰。稱讚。稱揚讚美。彼佛廣大功德。令人歸信。感激嘆息。此法希有。歷劫難逢。令人悲喜。喜其得聞。悲其聞晚矣。一逼上人曰。他力善名號所具善。他力

不可思議之名號者。佛自說。故云隨自意。其自受用者。水吞水。火燒火。松自松。竹自竹。其體已圓成。而元來生死本。無雖然。從迷自力我執。一念爲常。沒凡夫無有出離緣。正今歸依。他力名號。還入生死本無本分矣。六字名號者。南無阿彌陀佛。是迄述畢。

第四南無者。卽是歸命言也。

阿彌陀。此翻無量壽妙說。天台大師釋文曰。無量壽。天竺稱阿彌陀。云善導大師釋文曰。言無量壽者。乃是此地漢音。言南無阿彌陀佛者。是西國正音。又南無者是歸。無者是命。阿者是無。彌者是量。陀者是壽。佛者是覺。故言歸命無量壽覺也矣。同鈔曰。無量壽。是能行。能成。能攝等。人。舉能合所。故名無量壽矣。記曰。以法常住。故諸行常覺。此法人名無量壽。阿彌陀經疏鈔曰。謂無量壽佛。無量光。三寶道品。此法廣大功德。謂水鳥樹林咸宣妙法。衣食服用受持自然。具足微妙相好。是神變不可思議功德。謂難信之法。能信受修行。得無量福。謂

衆生發願。生彼國則得與諸上善人俱會。一處是超越。常途故云不可思議也矣。高祖上人曰。無量壽。言不生不滅。三世常住。是則本有本來。一理。人人具足。佛然則一切衆生性命。是所生法。無量壽佛。是能證佛也。云唯識論云。清淨法界。無生無滅。性無變易。故說爲常矣。涅槃經曰。唯佛與佛。其壽無量也矣。觀經曰。見無量壽佛者。卽見十方無量諸佛矣。釋曰。諸佛願行。成此果名。但能念名。具包衆德。正阿彌陀如來。壽命爲有限量。衆生建無量壽願。是餘佛不成所誓願。法身常然覺體。超勝獨妙大法。可信敬云。無量壽佛勝相義述竟。等五一遍顯德名。

名義集曰。一者普及詞。非二名。一也。遍者盡除。語。其體廣博。有德言一遍也。云法華疏云。一者一實相廣大無邊義也。離數量。唯獨明了三世。照通貫於十方。故曰名。一占察經曰。遍者一法界周遍。故自性清淨。不變不異不生不滅。謂如虛空。離虛妄。

相。平等不遍。諸佛衆生。無二無別。名遍。如一遍義集。等矣。一遍義畢。

第六註釋法之字

法者即軌則之義也。能軌持軌則成。正覺云。法矣。華嚴經曰。以一法得出離。成阿耨多羅三藐三菩提。故云法矣。起信論曰。一法界。即一真如理體也。性虛融。平等不二。名一法界矣。善導大師曰。法者是無上良藥也。能斷煩惱毒病。爲清淨法身曰法矣。既曰。今云法。六字名號一遍法。大權現神勅給法也。云云。惟佛神諸祖。歸命護念。持名一法也。功高能深。餘法餘善。無可比類。我祖無間斷修行相續。專修。因爲其通。指讚佳名。獲冥助。嚴者歟。慈惠勝境。敢非所計。凡卑矣。散善善曰。專念彌陀名號者。即觀音勢至常影護。亦如親友知識矣。經曰。若人至心念彌陀。十方諸佛善神常護念。由得安穩長壽矣。天台大師云。且置不論。即詣兩方。值佛開悟矣。慧遠念佛三昧詞序曰。功高易修。以念佛

可爲先矣。宗祖上人云。六字之中。本無生死。一聲之間。即生無證矣。法字義述竟。

第七勅算文曰。六十萬人決定往生

就此賦算文。人含疑滯。頗問答多端。神宣念佛記云。問云。正賦算文有六十萬人決定往生。限其人數歟。若然。化益既似些少。如何。答曰。不爾。於此文有宗深意。豈有言限人數。謂不可思議名號能修善持。祖師嘆法德。熊野大權現拔苦與樂名號。一法垂示。其深旨。普令知衆生。無疑慮。爲遺信行。證誠如前述。四句勅頌。惠賜。其第一頌首六字。第二首十字。第三首萬字。第四首八字。全分六十萬人決定往生也。是知言非限人數也矣。宗與旨等。受與當位。全決定往生。即身是佛。傳焉也。至心徒。身口深浴。稽首算受持。以淨水吞納胸中。所飲餘物。悉隨腐消。算留心腑。登佛種子。開忽己心蓮。與聖衆俱。乘金蓮華臺。生報土。得大快樂矣。可祕可祕矣。釋曰。諸聖衆持金蓮來迎。佛眼

神勅教導要法集卷第一

相見。得大安樂矣。安樂集曰。若觀常修念佛三昧。與餘三昧有階降否。答曰。念佛三昧。勝相不可思議也。云云。如摩訶衍中說云。諸餘三昧。非三昧。何以故。但能除貪。不能除過去未來一切諸障。若能常修此念佛三昧。不言現在過去未來一切諸障悉皆除也。惟無三昧經曰。有兄弟二人。兄信因果。弟無信。然能解法相。因自見其鏡。已死相現。不過七日。甚恐怖。時有智者。往問佛。報言。汝欲延命。二七日不虛。一心念阿彌陀佛。速得長壽。師如教。至心稱名憶念。至六日。即來二鬼。聞其念佛高聲了了。竟無能進。還告閻羅王。索符。其符算注云。由念佛。執法。生斷除諸罪。即時第三炎天矣。

神勅教導要法集卷第二

第八倚神勅表累例

神社考曰。豐前國宇佐八幡者。應神天皇也。欽明天皇卅一年。豐前州宇佐郡。既岑菱洞池畔民家兒。甫三歲。託曰。我是第十六主譽田天皇。廣幡八幡也。我名護國靈。驗威身大自在。王菩薩。諸州諸所垂跡。於神明顯座此。地耳矣。因之勅建祠。同託宣曰。因中萬行。功納六字。果號。一稱益。施十方矣。神皇正統紀曰。石清水八幡。清和天皇御宇。貞觀元年。依有託宣。大安寺沙門行教。自宇佐勸請男山。號八幡大菩薩。八幡申御名。依御託宣云云。樂八正道。垂權迹。皆得解脫。苦衆生。號八幡大菩薩。其八正道。內典說。正見。正聞。正思惟。正命。正精進。正定慧。名是八正道矣。【考】八正道者。正見。正思。正語。正業。正命。正精進。正念。正定也。與今有異。不知依何。神書曰。白山明神。或時現天女。泰澄云。吾是伊弉諾尊也。今號妙理菩薩。汝欲善提。離名利貴。西刹。言已不見。澄禮拜恭

敬不怠靈威如云云神社考曰若州遠敷明神實忠云僧修懺法二六時不嘗怠及十有餘歲感其精進明神現童子託云自今可供闕伽水乍白黑兩鴉穿石飛出其跡漏泉為井若早損時遙拜若州持念明神水涌出非奇妙乎矣神書曰伯耆國大智明神者本地地藏菩薩也有俊方云侍或時狩其地射多鹿又常信地藏菩薩為守本尊安置屋內歸見像所射鹿箭皆中尊像在俊方大驚恐悲泣無限謝冥爵自截髮即家為寺永索佛子矣孝謙帝御宇道鏡帝位即清鷹為勅使字佐八幡宮令問神乃現告此不宜也汝速奏必道鏡勿恐我擁護歸即怒令配流失命神守道雄歸故

南都大佛殿及破壞時院主俊乘雖建立願有自力不叶佛神不有加護難成春日大明神詣一七日祈蒙靈瑞大願忽成寔大明神擁護不有觀然乎矣正統記曰聖武皇帝御宇雖伽藍建立願有

神國恐遺法給有勅行基菩薩大神宮參籠令祈念其御告曰實相真如日輪照生死長夜闇本有常住月輪拂無明煩惱雲云云御託宣難決分明又天平十四年冬十一月勅使右大臣橋諸兄公祈願寺儀同月十五日夜聖武天皇御前王女放光申奉既當朝神國可奉仰神明德日輪者本地盧舍那佛也衆生證此道理正可歸依佛法示御夢覺後彌御心堅固御願寺建立矣南都東大寺是也

神國決疑編曰寶基本紀曰垂仁天皇廿六年丁巳十一月新嘗會夜神主部物忌八十氏等詔吾今夜承太神威命所託宣也倭姬命承太神託宣示也神主部物忌等慎無懈正明開焉人乃天下之神佛也須掌靜謐志心乃神明之主他利莫傷心神禮神事以祈禱為先冥加以正直為本須任其本誓皆令得大道者天下和順日月精明風雨以時國豐民安也上四句雙卷經文也精清與云云故神人守混沌之始屏佛法

息總而神代仁者人心聖而常也直而正也地神未天下四方人夫等其神心黑焉分有無之異名心走使無有安時心藏傷而神散去神散則身喪人受天地之靈氣不貴靈氣之所化種神明之光胤不信神明禁令故沈生死長夜闇吟根國底國因茲奉代皇天皇天上帝也西天真西天真人釋迦牟尼佛列子曰西方大聖以苦心誨喻教令修善隨器授法以來大神歸本居止託宣給云云佛法東被之由左大般若經曰甚深般若波羅蜜多我滅度已後時後分後五百歲於東北方當廣流布矣自天竺日域當東北方也誠經說託宣相合符節不甚妙神道與佛法習合化益衆生廣大無邊非道理云云又曰所謂守混沌始屏佛法息是全非排斥文屏息是肅敬至極也論語曰屏氣似不息者矣註曰屏藏也息鼻息出入子曰尹生甚作屏氣良久不敢復言矣大日經曰猫狸伺捕禽鳥屏息靜住矣人王卅四代推古天皇御宇聖德太子奏聞吾日本生萬法種子震

且現萬法枝葉天竺開萬法華實今佛法我國東漸以枝葉花實現其根本正可令流布矣桓武天皇勅西天法置我國為第一臣下震旦儒置我國為第二臣下神明左右為計潤色者也以上感應錄曰佛儒神三道配心氣理三時儒為主理神為主氣佛為主心可云一身內離心外不可有理氣本心具足理氣也若心外有言邪妄理氣而與心同不可成立假令船行時欲入渡三人船乘中央乘人佛喻艫乘人儒喻舳乘人神喻若有風波浪等及破船何逃濤波難耶一身如船不相佐可溺死三教被行世可為譬正異法邪論改隔諍妄心移惡人善心自成政道佐人為世終臻自他安穩心地也矣倭姬命世記曰諸法如影像清淨無假穢矣正依顯果迷神動與皆應之意也大論曰人守護六情如好馬善調如是實智人諸天所敬視無穢人寔貪瞋癡等不造惡業清淨實智慧人也其端的諸佛護念焉神明所加

被矣。莊子曰。至人入水不濡。入火不熱矣。累例之儀述畢。

第九倚神託誌神國奧義

神代卷曰。古天地未剖。陰陽不分時。渾沌如雞子。溟涔含牙。及其清陽者薄靡而為天。重濁者淹滯而為地。精妙之合搏易重濁之凝揚難。故天先成而地後定。然後神聖生其中焉。故曰開闢之初。洲壤浮漂。譬猶放魚之浮水上。于時天地之中。生一物狀如葦牙。便化為神。號國常立尊。次國挾槌尊。次豐解淳尊。凡三神。乾道獨化。所以成此純男。次有神。混土煮尊。次土煮尊。次有神。大戶之道尊。大苦邊尊。次有神。面足尊。惶根尊。次有神。伊奘諾尊。伊奘冊尊也矣。凡乾坤之道相參而化。所以成此男女。自國常立尊。迄伊奘諾尊。伊奘冊尊。是謂神世七代者矣。神代卷云。天神謂伊奘諾尊。伊奘冊尊曰。有葦葦原千五百秋瑞穗之地。宜汝往循之。廼賜天瓊矛。於是二神立於天上浮橋。投戈求地。因獲滄溟。其矛

鋒滴瀝之潮凝成一島。名之曰淤馭慮島。二神降居彼島。化作八尋之殿矣。同二卷云。次伊奘諾尊。伊奘冊尊。共議云。吾已生大八洲國及山川草木。何不生天下之主者歟。於是共生日神。號天日靈尊。亦天照大神又曰天照大日靈尊。此子光華明彩。照徹於六合之內。故二神喜曰。吾息雖多。未有若此靈異之兒。不宜久留此國。自當早送于天。而授以天上之事。是時天地去未遠。故以天柱舉於天上也。次生月神。一書曰。月弓尊。月夜見尊。月讀尊云矣。送天授天事也矣。天照大神聖德御座依。天位授讓也。然天照大神地神五代初也。照日輪四天下。配德名曰日神。月神其光彩亞日。次生蛭兒。雖已三歲。脚猶不立。故戴之於天。磐檣樟船。順風放棄。次素戔嗚尊。是無道而不可。以君宇宙。當遠適之根國。遂逐之矣。神代卷曰。伊奘冊尊生火產靈。時被灼而神退去矣。故乘於紀伊國熊野之有馬村。名是熊野大權現。土俗祭之。花時亦以花

祭。又用鼓吹幡旗歌舞而祭云也。神社考曰。伊奘冊尊。出雲與伯耆之境。祭比婆山。又熊野神自天竺飛來云。兩說不一。可為神代卷正說矣。延喜式曰。紀伊國牟婁郡熊野者。伊奘冊尊。早玉神。速玉男。是為熊野三處權現矣。神代卷曰。是後稚日女尊。坐于齋服殿。而織神之御服也。素戔嗚尊。見之則逆。刺斑駒。投入之殿內。稚日尊。乃驚而墮機。以所梭傷體而神退矣。故天照大神謂素戔嗚尊曰。汝猶有黑心。不欲與汝相見。乃入于天石窟。而閉著磐戶焉。於是天下恒闇。無復晝夜之殊。故會八十萬神於天高市。而問之時。有高皇產靈之息思兼神云者。有思慮之智。乃思而白曰。宜圖造彼神之象。而奉招禱。于時日神乃細開磐戶而窺之。是時天手力雄神。侍磐戶側。則引開之者。日神之光滿於六合。故諸神大喜。則科素戔嗚尊。千座置戶之以解除矣。已下略焉。

時聞川上有啼哭之聲。故尋聲覓往。者有一老公與老婆。中間置一少女。撫而哭之。素戔嗚尊問曰。汝等誰也。何為哭之如此耶。對曰。吾是國神。號脚摩乳。我妻號手摩乳。此童女是我兒也。號奇稻田姬。所以哭者。往時吾兒有八箇少女。每年為八岐大蛇所吞。今此少童。且臨被吞。無由脫免。故以哀傷素戔嗚尊勅曰。若然者。汝當以女奉吾耶。對曰。隨勅奉矣。故素戔嗚尊。立乍奇稻田姬。為湯津爪櫛。而挿御髻。乃使脚摩乳手摩乳釀八醴酒。併作假度八間。各置一口槽。而盛酒。以待之也。至期果有大蛇。頭尾各有八岐。眼如赤酸醬。松柏生於背上。而蔓延於八丘八谷之間。及至得酒頭各一槽。飲醉而睡。時素戔嗚尊。及拔所帶十握劍。寸斬其蛇。至尾劍刃少缺。故割裂其尾視之。中有一劍。此所謂草薙劍也。是神劍。吾私此安乎。乃上獻天神也。然後行覓將婚之處。遂到出雲之清地焉。乃言曰。吾心清清之。於彼處建宮。時素戔嗚尊歌之曰。夜句茂多

苑。伊都毛夜霸餓岐菟磨語味爾。夜霸餓枳菟俱盧。迺夜霸餓岐廻。已下略。是和歌之首甫言也。

神代卷云。時天照大神。手持寶鏡。授天忍穗耳尊。而祝曰。吾兒視此寶鏡。當猶視吾。可與同牀。共殿以爲齋鏡。復勅天兒屋命太王命。惟爾二神善爲防護。亦萬幡姬爲妃。其兒生。號天津彥大瓊杵尊。時遊幸海濱見一美人。問曰。汝是誰子耶。對曰。妾是大山祇神之子。名木花開耶姬。名對奉。爾者吾以汝欲爲妻。曰。答曰。妾父在。請問。因其趣述給。大山祇神。乃二女奉進。姉醜妹有色。引幸之。則一夜有身。如何一夜使人娠乎。抑非吾兒歟。木花開耶姬。甚以慚恨。乃作無戶室。誓之曰。吾所娠是若也神之子者不幸矣。是實天孫之子者。必當全生。則入其室中。以火焚室。于時焰初起。時其生兒。號火酸芹命。次火盛。時生兒號火明命。次生兒號彥火出見尊。凡火不能害。乃母亦

無所少損。是天津彥火出見尊。名上也矣。日本記曰。兄火闌降命。自有海幸弟彥火出見尊。自有山幸。始兄弟二人相謂曰。試欲易幸。遂相易之。不得各其利。兄悔之。還弟弓箭而乞己釣。時弟失兄釣。別作新釣與兄。不受而責其故。弟患則以其橫刀。鍛作新釣。盛一箕與之。兄忿曰。非我故釣。雖多不取。益復急責彥火出見尊。憂苦甚深。行吟海呼。時逢鹽土老翁。老翁問曰。何故在此愁乎。對以事之本末。老翁曰。勿復憂。吾當爲汝計之。作無目籠內彥火出見尊。中沈之海。即自然有可伶小汀。於是棄籠遊行。忽至海神之宮。其宮雉堞整頓。臺宇玲瓏。門前有一井。井上有一湯津杜樹。枝葉扶疏。時彥火出見尊。就其樹下。徒倚。良久。有一美人。排闥而出。遂以玉腕。來當汲水。因舉目視之。乃驚還。白其父母曰。有一希客者。海神於是鋪八重席薦。以延內之。坐定。因其問。來意。時彥火出見尊。對以情之委。海乃神集大小之

魚。逼問之。僉曰不識。唯赤女比有口疾不來。固召之探其口。果得失釣。已而彥火出見尊。因娶海神女豐玉姬。仍留住海宮。已經三年。彼處雖復安樂。猶有憶鄉之情。太息豐玉姬聞之謂其父曰。天孫悽然數歎。蓋懷土愛乎。海神乃延彥火出見尊。語曰。天孫若欲還鄉者。吾當奉送。便授所得釣。因誨之曰。以此釣與汝兒。時陰曰貧釣。然後與。復授潮滿瓊及潮涸瓊。曰。漬潮滿瓊者。則潮忽滿。以此沒溺兒。若兄悔祈者。還漬潮涸瓊。則潮自涸。以是救之如此逼惱。則汝兒自伏及將歸去。豐玉姬謂天孫曰。妾已娠矣。當產不久。妾必以風濤急峻之日。出到海濱。請爲我作產室相待矣。彥火出見尊。已還宮。一遵海神之教。時兄火闌降命。既被危因。乃自伏曰。從今以後。吾將爲汝之民。請施思活。於是遂赦豐玉姬。果如前期。將其女弟玉依姬。直冒風波。來到海邊。遠臨產時。請曰。幸勿以看之。天孫猶不能忍。竊往視之。豐玉姬產

時化爲龍。甚慚曰。如有不辱我者。則使海陸相通。永無隔絕。今既辱之。何以結親昵情乎。乃以茅裹兒棄之海邊。閉海途而經去矣。因以名兒曰彥波瀲武鸕草葺不合尊。即以鸕鷀之羽。葺爲產屋。葺未葺合。豐玉姬自馭大龜。女弟將玉依姬。光海來到。時孕月已滿。產期方急。由此不待葺合。徑入居焉。已而奉名付也。于時彥火出見尊。歌之曰。豐玉姬贈。欽企都鄧利。阿柯耶磨。阿利利。阿利登。比鄧播。伊珮耐。企珮我。譽贈比志多。輔妬句。阿利利。凡此贈答。一首號曰。舉歌也矣。天照大神宮。天忍穗耳尊。彥火瓊杵尊。彥火出見尊。鸕鷀草葺不合尊。號是地神五代也。既日本者神國也。不知其濫觴。則似不知國恩矣。

如前述。祖師深祈念。因茲大權現。自勅宣總時。宗門者。名神勅弘通大法也。門葉之倫。何疎焉。

神勅教導要法集卷第三

十界依正一遍體

述第二勅頌。分爲五段。

第一釋十方界之名義。舉八大地獄之名相。

第二十界互具之正說。

第三顯依正之二報。

第四一遍。名號相即之德號。口傳焉。

第五辨體之字義。

第一述十界名義者。

佛祖統紀曰。第一佛界。佛梵語。具云佛陀。華言覺。覺具三義。一者自覺。謂性真實。離虛妄。二者覺他。行無緣慈度衆生。名是佛界。三者覺行圓滿。具足萬德。名是三界導師。

第二者菩薩界。菩薩梵語。具云菩提薩埵。華言覺有性。自行成就。而能度一切衆生。名是菩薩界。

神勅教導要法集卷第二

第三者緣覺界。緣覺。佛稟教法。觀十二因緣。悟真空理。是名緣覺界。

第四者聲聞界。聲聞。聞佛聲教。依苦集滅道四諦法證真空理。是名聲聞界。

第五者天界。天。自然樂勝。身勝清淨。光明。世間無比。三界具有二十八天。因修上品十善。兼修禪定。感報。是名天界。

第六者人界。人。於世。逢順之境。能安忍。生四洲中。能行仁義禮智信之五常。能持不殺不盜不邪淫不妄語不飲酒之五戒。修中品十善。感報。是名人界。

第七者阿修羅界。梵語。阿修羅。華言非天。淨名經疏曰。此神。果報最勝。次諸天。或居海岸海底。或常好戰。是名修羅界。

第八者餓鬼界。此鬼類。徧諸趣。有福德者。作山林塚廟神。惡業重者。不能得飲食。受苦無量也。是名鬼界。

第九者畜生界。畜生者。亦云旁生。此類徧在諸處。被

毛。戴角。鱗甲。羽毛。四足。多足。有足。無足。水陸空行。互相吞噉。受苦無窮也。宿由愚癡貪欲。作中品五逆十惡。而生。是名畜生界。

第十地獄界。地獄界者。在地之下。其中衆生。受苦無窮。往生要集曰。地獄亦分爲八。一。等活。二。黑繩。三。活衆合。四。叫喚。五。大叫喚。六。焦熱。七。大焦熱。八。無間地獄。

初等活地獄者。在於此閻浮提之下一千由旬。縱廣一萬由旬。此中罪人。互常懷害心。若適相見。如獵者逢鹿。各以鐵爪。而互亂。裂。血肉即盡。唯有殘骨。或者獄卒。執鐵杖鐵棒。從頭至足。遍皆打築。身體破碎。猶如沙搗。或以極利刀。分分割肉。如厨者屠魚肉。涼風來吹。尋活如故。歎然復起。如前受苦。或云。空中有聲云。此諸有性。可還等活。或云。獄卒以鐵叉打地。唱云。活活。如是等苦。不可具述。依智論瑜伽論。以人間五十年爲四天王天一日一夜。其壽五百歲。以四天王天壽爲地獄一日一

夜。其壽五百歲。殺生業者。墮此中。云云。依俱舍論。此地獄四門之外。有十六別處。名義略之。

二、黑繩地獄者。在等活下。縱廣同前。獄卒執罪人。熱鐵地臥。以熱鐵繩。縱橫杵身。以鐵斧。隨繩切。割。或以鋸解。或以刀屠。作百千段。處處散在。又懸熱鐵繩。交橫無數。罪人令入其中。惡風暴吹。交給其身。燒肉焦骨。楚毒無極。又左右有大鐵山。山上各建鐵幢。幢頭張鐵繩。繩下多有熱鐵。罪人令負鐵山。從繩上行。遙落鐵鏊。煮無極。等活地獄及十六別處。一切諸苦。十倍重受。獄卒呵責罪人云。心是第一怨。此怨最爲惡。此怨能縛人。送到閻羅處。汝獨受苦。妻子親族不能救。以人間一百歲爲切利天。一日一夜。其壽一千歲。以切利天壽爲一日一夜。此地獄壽一千歲。殺生偷盜業者墮此中。依俱舍論。大論。正法念經。十六別處。名義略之。

三、衆合地獄者。在黑繩下。縱廣同前。多有鐵山。兩山相對。牛頭馬頭等獄卒。執器械。驅令入山間。

是時兩山來迫合。押碎身體成微塵。血流滿地。或有鐵山。從空落來。打於罪人碎。如沙搗。或以鐵杵入鐵臼。擣或鐵獅子虎狼等。或鷲等諸鳥。競來食噉焉。以人間二百歲。夜摩天一日一夜。爲其壽二千歲。以彼天壽爲此地獄一日一夜。其壽二千歲也。殺盜邪淫者。墮此中。依俱舍論。有十六別處。名義略之。

四、叫喚地獄者。有衆合下。縱廣同前。獄卒頭黃如金。眼中火出。著赭色衣。手足長大。疾走如風。口出惡聲。而射罪人。惶怖叩頭求哀。雖然尙增。或或以鐵棒打頭。又熱鐵地上。令走。或置熱放。反覆炙之。或擲熱鐵煎煮之。或以鉗開口。灌洋銅湯。燒爛五臟。痛苦無量。以人間四百歲爲都卒天。一日一夜。其壽四萬歲。其歲以爲此地獄一日一夜。延四千歲。殺盜淫飲酒者。墮此中。有十六別處。名義略之。

五、大叫喚地獄者。在叫喚下。縱廣同前。苦相亦同。

但前四地獄及十六別處。一切諸苦。十倍重受。以人間八百歲爲化樂天。一日一夜。其壽八千歲。以彼天壽爲此地獄一日一夜。其壽八千歲。殺盜邪淫飲酒妄語者。墮此中。復有十六別處。名義略之。依。

六、焦熱地獄者。在大叫喚下。縱廣同前。獄卒投罪人。臥熱鐵地上。或仰或覆。從頭至足。以大熱鐵棒。或打築。或置大熱鐵。放。猛炎炙之。或表裏燒薄。或以大鐵串。從下貫之。徹頭出。反覆之。已猛火炎風熾。盛燒骨髓。以人間千六百歲。爲他化自在天。一日一夜。其壽萬六千歲。以他化自在天壽爲一日一夜。此地獄壽亦然。殺盜淫飲酒妄語邪見者。墮此中。有十六別處。名義略之。依。

七、大焦熱地獄者。在焦熱下。縱廣同前。苦相亦同。但前六地獄根本。別處一切諸苦。十倍重受。不可具說。其壽半中劫。殺盜淫飲酒妄邪見者。墮此中。或閻羅人呵責之言。勿怖畏。即非火燒。汝惡業是燒盡。或有大火聚。其高五百由旬。寬廣又然。炎燃

熾盛。彼惡業罪人急擲倒。如大山。推在險岸。十六有別處。名義略之。依。大。

八、阿鼻地獄者。在大焦熱下。欲界最底之處。罪人趣苦處時。中有位啼哭。說偈言。一切唯大炎。遍空。無中間。四方及四維無空處。惡人皆遍滿。期無所。正問尋。今我無伴侶。在大閻中。入大火聚。日月慈光。背發聲唱。喚時。閻王以熱怒。心曰。或增劫或減劫。大火燒汝身。癡人已作惡。今何成悔。是非天修羅健達婆龍鬼。業羅取繫縛。無人能救汝。如於大海中。唯取一掬水。受苦如大海。既其城縱廣八萬由旬。七重鐵城。七層鐵網。刀林周匝。四銅狗。身長四十由旬。眼如雷。牙如劍。齒如刀。舌如鐵。刺。總體自毛。孔出猛火。其烟鼻惡。世間無喻。又有十八獄卒。頭如羅刹。口如夜叉。有六十四眼。鈎牙上出。高四由旬。牙頭火流。頭上十八角。其角出猛火。又八萬四千鐵。有大蛇。見罪人。或吐火。或吐毒。或嚼或齧。哮吼如百千雷。又有五百億

蟲。有八萬四千。吻頭。火流。此蟲下時。獄火彌盛。罪人皆整不平。八萬億千苦中。苦者集在此中。依觀佛三昧經。瑜伽第四曰。從東方多百踰繕那三鐵地上。有猛熾火。騰焰而來。刺彼有情。穿皮入內。斷筋破骨。復徹其髓。如是燒成猛焰。南西北方亦復如是。或從其口中拔出。其舌張。百千折鐵釘。或舌上置熱鐵丸。燒其口及咽喉。又以洋銅灌其口。燒徹腐藏。此地獄壽一中劫。造五逆罪。或撥無因果。誹謗大乘。犯四重。虛食信施者墮。此中四門外。有十六眷屬別處。依俱舍論。復有頹部陀等八寒地獄。具如經論所說。是迄明十法界之名義。地獄道之表示畢。

第二互具十界正說

十界互具正說者。圓教所談。十界常住。觀解。台家意。十法界互具。故十界不改云。實相本門。如權教。不談十界常住。既云成佛往生。然九界滅佛界。可增歟。不然。全不增不減。可知矣。妙宗鈔說。六即佛。

云。一。理即。謂衆生本具佛性理。與諸如來無別也。二。名字即。三。觀行即。四。相似即。五。分證即。六。究竟即。矣。法華註疏云。法者所謂有三位。一。衆生法。二。佛法。三。心法也。衆生法。即十界十如權實法也。如左。十如權實十界等諸法。悉能證了究竟。無相違背。曰佛法。心法。即於自己心。十界十如十妙。百界千如具足。本有法。名心法。曰上華嚴經曰。心佛與衆生。是三無差別說。矣。方一念歸命。心體。凡聖不二。邪正一如。全互具法門也。十界十如平等法。與佛衆生無有異途。故圓教意。全不翻造業。業即名無盡法界。互具十界是迄述畢。

第三顯依正二報

依報正報者。自元依正不二。草木國土曰悉皆成佛。是則實教所談。其體不捨不離。己已圓成所具。施設之十界法也。源信曰。草木依報。衆生正報也。依報。作依報。施十界德。正報。作正報。施依報德。矣。圓覺略鈔曰。示依報正報者。一。法性土如來清淨。

法身所依土。以真如為體。此身土體。無差別。不變不遷。離相寂滅也。是名法性土。二者實報土。謂如來圓滿報身所依土。以無漏五蘊為體。此由往昔習。十力四無所畏功德。成就無礙莊嚴。鏡智融混。感報。是名實報土。三色相土。如來微塵相海身所依土。以自行後德智為體。由萬德成就。周圍無際。是名色相土。四。者他受用土。他受用。他機。感見受用也。如來他受用身所依土。此由修德成就。隨住十地。菩薩所宜變現。以大悲力。現大小勝劣種種淨土。是名他受用土。五。者變化土。改易不常為變。無而忽有。為化。如來變化身所依土。以利他之行。能隨衆生。心變化淨穢國土。是為變化土。矣。演義鈔曰。依正。依即所依。國土。七寶莊嚴等也。正法云。能依佛身。現相品曰。依內現依。正內現正。如來坐。菩提樹下。示現一切世界。一切菩薩等衆會圍繞。普周法界矣。

第四一。遍云。嘉名者神勅也。名號相即。一。遍體。口傳。焉。

神勅嘉名。前段。具宣說之。爰略者也。相即名號之口傳者。正知。持名之一法者。總萬善萬行無量之德。迺圓融實相大法。古人云。必望閑室靜床。以修行。不名稱名。歷四威儀。起居寤寐。全體。無非念佛念法也。寒夜重衣。炎天拈扇。則皆是本願不可思議之勝益也。源信云。圓教。三身者。無相三身也。是即相即互具之三身也。非有非無。非色非聲。非香。非味。非觸。非法。全真如實體也。矣。其實相者。即名號也。觀經曰。廣說諸法實相除滅罪法。聞已歡喜矣。

名號實相。真體者。萬法。理性冥合。無決滅也。策閱相即名號位。全十界法也。十界法。即依正。依正。法。即一。遍體也。聊宗祖上人。為自他信願淨業。之大法。展精誠。因乞求靈神。加被讚歎。法德。慈辨。十界依正。一。遍體者也。誠歸命。和光之深德。哀愍苦境。摩利。示現。不捨證益。是則名號相即。一。遍體。所傳來也。可祕。可敬也。荊州有玉泉寺。諸山續連。佳。

景勝地。潔白玉泉流出。飲此水者。不老得長壽。齡。為神仙德也。莊子曰。欲仙道學。必靜心。必清身。無勞無搖。乃以可長生。既廣成子千二百歲。形體未曾老衰。入無窮之門。遊無極之門。與日月參光。與天地為常。蜀國有李阿者。穴居不食。不眠。壽持號八百歲。老翁。既稱名行者也。阿彌陀如來。無量壽之覺體。法身常住。知顯內證。方濟度。念佛至誠。衆生得無量壽。決定必定也。唯識論曰。清淨法界。無生無滅。無變易。故說為常矣。相即一遍體之義述竟。

第五明體之字義

體者尊也。如君父。廣韻。身也。又生也。增韻。肢也。中庸曰。體物而不可遺。注。猶生。養萬物。無不周遍也。周禮。象也。或作體。或作休。休。俗字也。詩格文體曰。虛象量化連影實體。立七法。以實形實身為實體。本元。述體相用之三大。則為互具十界。相大。為依正二報。用大。以相即名號二遍體矣。天台大師。

云。體者是主質。除諸法實相餘皆魔事。大乘經以實相為印。為經。正體。無量功德。共莊嚴之。種種修行。歸趣之。言說問答。詮辨之。譬。衆星環北辰。如萬流之宗。東海。故以實相為體也。法界觀云。體者常住真心之體也。自性清淨。一體無二。妄想忽生。境界頓現。於是衆生。國土。從一心妄分為一。皆是自心所變。情與非情。共一體是也。華嚴經曰。禮敬三寶。必須五體投地。所以折伏。憍慢也。一。右膝。疏曰。願我右膝著地時。令諸衆生得正覺道。二。左膝。疏曰。願我左膝著地時。令諸衆生不起邪見。得安立。正覺道中也。三。右手。疏曰。願我右手著地時。猶如世尊。坐金剛。座地震。現瑞證。菩提也。四。左手。疏云。願我左手著地時。令諸衆生。遠離外道。令入正道也。五。首頂。疏云。願我首頂著地時。令諸衆生。離憍慢心。得無見頂相也。名是投地五體也。善導大師曰。以念佛三昧為宗。一心廻願。往生淨土為體矣。

既上稱念名號。相即故。名即體。迅本體露現。是則名體不二也。云云。體之字義述竟。

神勅教導要法集卷第四

萬行離念一遍證

正述第三一句。分為五段。

- 第一者分萬行為因果二行。
- 第二者分離念為善惡二法。
- 第三者離念當位。即是薩提也。
- 第四者神勅一遍褒名。
- 第五者明證之字義。

第一因位萬行者

大經曰。無央數劫。積功累德。說法藏菩薩。修萬善萬行。六度十波羅蜜等。棄國王城位。端坐樹下。勤苦石上。忍辱法服。厚糲皆空。智光果滿。萬行成。是名因位萬善行也。因位。義是述畢。第二果位萬行者。誠惟。救度重苦衆生。以所修萬行。加持名號。功德體內。攝收本願。不可思議。衆善一行。令授

與衆生時。一聲一念消滅。無量罪業。頓速得證。往生妙果。寔不可思議殊勝法也。衆生業行數多。故萬行云也矣。成實論曰。萬行圓滿。福慧具足。饒益有情。楞嚴經曰。常修萬行。度脫衆生矣。花嚴經曰。佛修萬行。清淨因得。相好莊嚴。果報矣。道綽禪師所立。建念佛往生萬行往生二義矣。懷感禪師。諸行往生。念佛往生立二義。源空上人曰。萬善妙體。即名號六字。恒沙功德。備口稱一行矣。高祖上人曰。弘願一稱萬行。宗致。果號三字。將德根源也矣。果位萬行之義。是迄述畢。

二者分離念爲善惡二法。

離念者離念也。先於此念有善惡二義。悟則成善。提善處念。迷則煩惱成惡。趣念。華嚴經曰。念即有真妄。若凡夫對六塵所起念。念々生滅。是名妄念也。若離根塵。眞淨明妙。虛徹靈通。念即名如來正智之念也矣。楞伽經曰。離語言說想。是爲一切法離言說空矣。四教儀曰。離欲地斷欲界無明思

惑。離生死。故名離念矣。諸經要集曰。於念想制伏妄念。令現前正念。有十境觀念。一念佛。謂於如來相好功德。常專念不忘名念佛。二念法。謂諸佛法。爲修行之軌則。除愛欲妄念。專心不忘名念法。三念僧。謂菩薩羅漢聖衆。咸具種種功德。爲世福田。專想不忘名念僧。四念戒。謂佛所制之戒。能息諸惡成就道品。猶如瓔珞。可嚴身。常念不忘名念戒。五念施。謂布施能破慳貪。生長福果。利益無窮。念念不忘名念施。六念天。謂諸天善業成就。衆福具足。如是繫念不忘名念天。七念休息。謂於寂靜處息一切緣務。則可修習聖道。常心心念不忘。是名念休息。八念安般。即出入息攝心靜慮。能除諸妄想。常念念不忘名念安般。九念身。謂此身頭目手足皮膚骨髓。何者。是何身。從何處來。爲誰所遺。即晝夜精進修習淨行。想念不忘名念身。十念死。謂人之生。猶如夢幻。諸根不久終當散壞。即常專修。念頭不忘。是名念

死矣。

普賢行願品曰。舉四種念佛。一稱名念。一心專注。一萬聲十萬聲阿彌陀佛名號。純一無雜。預迎接。二觀像念。能佛觀形像相好。心不散亂。想念決定。得利益。三觀想念。端坐正念。觀佛眉間白玉毫相。足下千輻輪相。如是純熟想念。得往生。四實相念。正念。佛三昧現前。是名實相觀念矣。應真壁間銘曰。念起是疾也。不續是藥也矣。妄念起。名惡。不續發位名善惡不二離念矣。是迄離念義述訖。

三者萬行離念即是菩提心者

無量壽經曰。發菩提心。一向專念。無量壽佛矣。婆沙論曰。修行人者。奴婢財物等者。非更到來救護。可正是捨離矣。大方廣寶篋經云。離念諸經聚名菩提矣。凡菩提心云。行者發心簡要。往生淨土。大道也。既修名號大法時。通達萬善之行諸波羅蜜功德。得大菩提也。是即本願不可思議妙法。且神勅萬行離念名大菩提心。誠以宗祕法可信可敬矣。散

善義曰。唯發一念。厭苦樂生諸佛境界。速滿菩薩大悲願行。入生死度衆生。故名菩提心矣。起信論云。一直心者。謂心常正直。離諸諂曲。能行正法。即是菩提之心也。二深心者。謂於正法心生深信。而樂修一切善行。即是菩提之心也。三大悲心者。悲即謂悲愍一切受苦衆生。常救護令其安樂。即是菩提之心也矣。神宣念佛記曰。萬行離念。即名號實相法。而具事理性相。無關滅。萬善萬行。故名號即。萬行離念法也。然則離念。則無念。無念則實相。實相則名號也矣。器朴論曰。菩提心。一依智慧門。不求自樂。遠離我心貪著。自身故。知進守退。曰智知空。無我曰慧。依智故。不求自樂。依慧故。遠離我心貪著。自身。二依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安。衆生心。故。拔苦曰慈。與樂曰悲。三依方便門。憐愍一切衆生心。遠離供養恭敬。自身心。故。正直曰方。外己曰便。依正直故。生憐愍。一切衆生心。依外己故。遠離供養

恭敬自身心。是名三種菩提心。又有三種。一。法身菩提。二。報身菩提。三。化身菩提也。言法身菩提。真如實相第一義空。自性清淨體。無染無穢。理出。自天真。不假修成。名佛果。本體。為法身菩提。言報身菩提者。備萬行修德。能感報佛果。以果酬因。圓通無礙。名為報身菩提。言化身菩提者。謂從報起。用能趣萬機。益物了達。名為化身菩提矣。安樂集曰。欲發菩提心。依經須修十種行。謂信進念戒定慧捨護法發願迴向也。修道人。相續不絕。逕一萬劫始證不退位。故名難行道也。聖道家菩提心。如是難行。衆生難欣難成。然彌陀乘。不捨願海。一唱一念消滅衆罪。得無上樂果。寔非不可思議勝益。聖財集曰。和光同塵。御本意。去無始生死業。返常住法性都誓。以智慧慈悲。正直為神體。物語曰。三井寺回祿時。或僧夢威儀正俗。其坊來見。何人問。我新羅大明神眷屬。即此寺守護。答。僧云。守護不可燒失。無詮守護。打笑。其後氣高白髮

眉長紫包着。出仰。和僧云。事無下。子細不知物哉。我佛法守護。堂塔非守護。如是滅亡時。中修學染心。道心發。寺僧有守護。仰。申傳。實堂塔坊舍。佛道修行助緣也。伽藍寺院。喻及破壞燒失。可再建。一念發起菩提心。盡未未際不可摧碎。開。如來藏識。必佛果種子。真實體修行地。人。舍樹下石上。豈不加護念慈悲云云。是迄離念菩提之義述畢。

第四者神勅一遍褒名

神勅一遍義。前段委釋。爰不述。褒者。字彙贊也。平也。說文美也。餘也。名爾雅。號也。說文大也。功也。云云。證誠大靈權現。能擔之衆生。演慈悲。示教。萬行離念一遍證。矣。

第五者明證字義

證者證誠也。字彙云。驗也。明也。阿彌陀經曰。說誠實言。汝等衆生當信。是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經。同疏鈔曰。誠實。明。必可信。以是廣長

舌端出誠實語。謂此稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經。汝當諦信。莫懷疑。信者以證誠則真實。不虛。所謂師子吼無畏說。千聖復起不能易。萬世守之。則為措者也矣。名義集云。出過三界證達涅槃究竟實理。故云證。楞伽經曰。證了第一義證。誠自性果德。故云證。法華懺儀曰。一下根證相。謂行人於三七日中獲得戒根清淨。就中所證相。覺知諸根明淨法利。是名下根證相。二中根證相。謂行人於禪定中所得證相。覺身心澄靜。覺觀分明。厭離世間。憫念一切。是為中根行者。所證四千塵勞者。塵。即染汗之義。謂種種邪見煩惱。能染汗真性也。勞。則勞沒也。謂衆生被邪見煩惱勞役不息。輪轉生死無有盡時。論其塵勞根本。不出十使。於十使中。隨以一使為頭。則九使為助。遂成一。百。約三世各有一百。共成三百。而現在世一百時。促不論相助。於過去未來二世二百。又各各以一使為頭。九使為助。共成二千。合前。現在世一百。共

成二千一百。又約多貪多瞋多癡等分。四種衆生。各有二千一百。共成八千四百。約四大六衰。各有八百。總成八萬四千塵勞也。十使。使則驅役之義。一貪。二瞋。三癡。四慢。五疑。六身見。七邊見。八邪見。九見取。十戒取也。多貪相。三上根證相。謂行人於修法中。就中所證相了達諸法。無有障礙。身心豁然開知見。即是名上根所證相矣。演義鈔云。謂一證一切證。上根之人。以圓妙智照了性境。圓融無始無終非淺非深不有不空。無法不備。無處不通。是故一處證入。則一切處皆證入矣。楚辭曰。辨事曰願。一見而有明。則名是斯證也。馬融賦云。人微曰自。藻潔。曉明其事。名是曠然覺證矣。梵網經曰。諸比丘見微少罪。生大怖畏。勿必侵。犯戒。斷永佛種子。有人渡大海。可如護浮囊。若有缺漏。要沈沒。為正菩薩。製證所也矣。八萬四千塵勞。華嚴經出孔目。八萬者。謂於五欲可之境。而多貪愛也。多瞋。謂於逆情境。而多忿怒也。多癡。謂

無所覺了。而於貪貪之境。溺而不已也。等分謂貪瞋癡。三一起也。四大。地水火風。四大也。六衰者。謂色聲香味觸法。六塵。能衰損善法。故也。

聊這一章。萬行離念之遵令。勅法。為弱儒黨輩記誌之者也。

神勅教導要法集卷第五

第四者。人中上上妙好華

述。是勅頌。為分三段。

第一。明人中二字之字義。

第二。顯上上之字理。

第三。妙好華者。所讚之喻說也。并誌蓮華之德。

第一人者。禮記曰。天地之心。五行之端也矣。周書曰。人者萬物靈。所生天地。惟所貴。人也矣。仁王經曰。人中得道。故稱人。於世間出世間。最尊最勝也。故名一人矣。辨意經曰。受生人中。正依此五事行也。一。布施。謂常修仁慈。施財寶。眠濟貧窮。是名布施。二。持戒。謂念持諸戒。無忘。是名持戒。三。忍辱。謂常非理。能安忍不動。是名忍辱。四。精進。謂常勤行衆善。無有懈怠。是名精進。五。忠孝。謂端正心法。事君事親。可竭其力。是名忠孝也。

神勅教導要法集卷第四

矣。華嚴經曰。人生時則有二天。同生常隨逐。一。號同生天。二。同名天也矣。綱鑑曰。人有正邪。如正人松柏。邪人如藤蘿。孟子萬章篇曰。齊景公田。招虞人以旌。掌山澤官名也矣。法苑珠林曰。人忍也。於世違順。情能安忍也。名是人。頌疏云。言人多思慮。故名為人矣。涅槃經曰。人以有多思故。蓋思量善惡。異餘趣矣。人字述說。中者。字彙曰。和也。當也。廣韻。平也。宜也。滿也。朱氏云。中。不偏不倚。無過。是名中。增韻曰。中。半也。得亦半。亡亦半也。無量壽經曰。中空讚言。決定必成。無上正覺矣。俱舍論云。一中劫間。初一中劫間。器世間成立後。十九中劫間。衆生世間成立矣。授記品云。中。無有地獄畜生餓鬼。一切衆生命終後。令不墮惡道。是名中。慧遠云。於中有二種門。初明世間行。後明出世間行。名是地前所行。為此地上所行矣。易繫辭云。中。事肆稱。其名。取類大也矣。論語曰。存中者久。則驗於外。益悠。而無窮矣。卦傳曰。

無不盡其中心之誠。韻府曰。中心有意。修情簡史記曰。中。帝王所居。名中國矣。論語。名華夏。謂中國矣。婆沙論曰。於中。離中。合中有三位。謂鼻。舌。身。合中知。謂眼。耳。意。是離中知。根境不至。中空緣有。而根能取境。無空緣。則取不能離中。能無空緣。取其境。是名合中知矣。華嚴經曰。一切以有無法。非有無了達。如是觀察。見能佛。是名中道。中論曰。因緣所生法。我說即是空。即是中道。義也矣。其中當行。爾雅曰。所謂允厥執中矣。正。無差謬偏倚。以省察至密純和。名中矣。中字義述竟。

第二。顯上上之字理。

上者。說文曰。高也。居也。易曰。本高天者。親上。增韻曰。若也。天子也。自下而上也。禮記曰。上堂。上階也。又進也。說文曰。與尚同。崇尚也。上上。辨意經曰。謂諸衆生。行五事。得生天上。一。慈心。不殺衆生。愛惜物命。令安樂。是名慈心。二。賢良。謂人不盜他財物。濟諸窮乏。是名賢良。三。貞常。

謂不犯外色。護諸戒奉持。是名貞潔。四誠信。謂人護口四過無諂佞。是名誠信。五不醉酒。謂人尊崇善法。修梵戒。不心狂亂。是名不禁酒。如是勇猛精進。成行功得上品善果也矣。是迄上字述竟。第三妙好華者所讚之喻說也。並誌蓮華之德。觀無量壽經曰。若念佛者。當知此人。是人中分陀利華。觀世音菩薩大勢至菩薩。為其勝友矣。疏曰。正顯念佛三昧功能超絕。實非雜善。得為比類。即有其五段。一明專念彌陀佛名。二明指讚能念人。三明若能相續念佛者。此人甚為希有。更無物可以方之。故引分陀利為喻。言分陀利名。人中好華。亦名希有華。亦名人中上上華。亦名入中妙好華。此華相傳名。蔡華是。若念佛者。即是人中好人。人中妙好人。人中上上人。人中希有人。人中。最勝人也。即觀音勢至常影護之矣。妙々々也。字彙曰。神化不測。謂之妙。增韻云。奇也。好也。廣韻曰。善也。又妙者。天台大師釋曰。妙。

不可思議讚歎義也。巨本述二門述十妙。實相真如法。十界十如法。其精微清淨寂然。不可思議。是名玄妙。法華新註曰。妙者法上褒美之稱也。則有迹門十妙。本門十妙。既以法譬為名。好者ヨミンス。字彙美也。愛也。玉篇善也。韻會佳也。喜也。華ハナフサ。又同華。亦同華。字彙斜也。榮也。黃韻夏也。稱中夏曰華。增韻章盛也。禮記曰。千五百里曰華。又右洛左齊。前華後河章也。云云妙好華字義竟。並誌蓮華之德。

菩薩所問經曰。一離諸染汗。菩薩修行。能以智慧觀察諸境。於一切法不生貪愛。雖處五濁生死流中。而不為生死過失所染。譬如蓮華出水中。而不為淤泥所染也。二不與惡俱。菩薩修行。唯欲滅一切惡生一切善。於身口意守護清淨。不與纖毫之惡共俱。譬如蓮華雖微滴水。而不停留也。三戒香充滿。菩薩修行。於諸戒律堅持無犯。以戒能滅身口惡。猶香能除穢穢氣。經曰。戒香芬馥。廣

布滿譬如蓮華開敷。妙香廣布。遐邇皆聞也。四本體清淨。菩薩因持戒。故身心清淨。雖處五濁中。而能無染無著。譬如蓮花生時。雖處淤泥水中。而自然潔淨。而無所染也。五面相照怡和樂貌。怡喜悅也。菩薩心常禪悅。則面無憂戚。諸相圓萬。見者悉皆歡喜。譬如蓮華開時。令諸見者。心意快然。而生喜悅也。六柔輒不澀。柔輒則隨順不澀。則無滯。謂菩薩修善慈之行。復於諸法無所滯礙。充於內則形於外。故體常清淨。柔輒細妙。而不麤澀。譬如蓮華體性柔輒而潤澤也。七見者皆吉。菩薩善行成就。形相美妙。凡所見者。咸獲吉祥。譬如蓮華芬馥美妙。人或眼見及夢見者。皆吉祥也。八開敷具足。菩薩修行功成。智慧福德莊嚴具足。譬如蓮華開敷。而其華果滿足也。九成熟清淨菩薩修因。既圓妙果成熟。而慧光發現。能使一切有情見聞之者。咸得六根清淨。譬如蓮華成熟。若眼睹其色。鼻聞其香。則諸根亦得清淨也。十生已有想。菩薩初

生之時。諸天人等咸樂護持。以其必能修習善行。證菩提果。譬如蓮華初生時。雖未見花。凡諸人來咸生已。有蓮華想也矣。法事讚曰。有四種蓮花。開即香十方。人天得生者。各坐一箇。聽真常法。是故名極樂矣。爾雅曰。荷芙渠也。其莖茄。其葉荷。其華菌。其實蓮。其根藕。其中萌矣。活法曰。荷華有重臺者。有雙頭者。世人指以為瑞。又有曉起朝日。夜低入水者。曰睡蓮。亦周子有愛蓮說。水陸草木之華。可愛者甚蕃。予獨愛蓮。出於淤泥。而不染。濯於清漣。而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠益清。亭亭淨植矣。杜陽編曰。滄州金蓮華。婦人採之。為首飾。不帶金蓮華。不得到仙家也矣。天寶遺事曰。大液池開千葉蓮華。帝與妃子賞之矣。護念經曰。有池中蓮華。大如車輪矣。大經曰。象寶蓮華。周滿世界。其華光明無量種色矣。稱讚經曰。是諸池中常有種種雜色蓮華。量如車輪矣。平等覺經曰。有千葉蓮華。大如車輪。華中化佛。各

放無數百千光明矣。觀經曰。有衆妙華。作閻浮檀金色。如旋火輪也矣。法華首題曰。妙者即不可思議讚歎義也。法者十界十如權實諸法也。其諸法離妄相。斷疑生信。名是實相。謂是諸法實相。所言當位名妙法也。大論曰。除諸法實相餘皆魔事也矣。既於法華。如稱讚諸法妙。亦蓮花以其德多端。爲喻說名妙法。今亦六字名號之深旨。衆善無量廣大。故徧爲令了知一切衆生。大權現勸。人中上上妙好華顯。慈愍者也。其德號爲洪博。最可上歸敬感信也。因茲諸佛菩薩諸祖一同弘願。不可思議。以金口妙說歎美稱讚焉。聊其深旨仰誌者也。釋迦如來唱念佛事。涅槃經曰。頭北面西右脇臥。最後三稱。南無阿彌陀佛。如入禪定歸于寂滅。觀音菩薩于手經曰。念我本師。專稱名號。得無量福。無量罪滅。命終往生阿彌陀佛國。勢至菩薩首楞嚴經曰。我本因地。以念佛心入無生忍。今於世界攝念佛人。歸於淨土。普賢菩薩華嚴經曰。願我臨

欲命終時。盡除一切諸障礙。面見彼佛阿彌陀佛。即得往生安樂。文殊菩薩發願偈曰。既生彼國已。成滿諸大願。阿彌阿如來授記。現前。馬鳴菩薩起信論曰。若人專念西方極樂世界阿彌陀佛。所修善根。迴向願求生彼世界。即得往生。已上。龍樹菩薩楞伽經曰。南天竺國中大德。名爲龍樹菩薩。破能有無見。得初歡喜地。往生安樂國。天親菩薩往生論曰。願見阿彌陀佛。普共諸衆生。往生安樂國。流支三藏宗論曰。超越他方名號者。爲天真。而滅重罪。拔苦與樂來迎者。爲法爾而起大喜。已上道綽禪師安樂曰。如寄花五淨。風日不萎。附水靈河。世早無竭矣。長安城漚文曰。末法出世名善導。即是彌陀化身也。濁世末代。導衆人一切衆生。爲往生矣。往生傳曰。隋煬帝大業九癸酉春三月。泗州人。名海鐘。爲煎藥。早天。至長安漚下。欲汲水見水上。以金字明現有四句偈文矣。懷感禪師五會讚曰。往生極樂得無生忍。速迴向苦海。廣度

衆生矣。少康法師高僧傳曰。於烏龍山集四部之衆。令行道念佛。常唱阿彌陀佛。即佛從其口出。十聲。十佛現。奇妙若連珠。勸誘亦小兒等念佛。一念付一錢。十念與十錢。男女自親愛。或時示衆曰。囑累。止勸急修念佛。言畢跣跡。身於光明而逝矣。法然上人選擇集曰。念佛是最勝善根也。其義應知。六方恆沙諸佛。不證誠餘行唯證誠念佛矣。慧遠法師曰。大道本來無所染。白雲那得有。心期。遠公獨刻蓮華漏。猶向山中禮六時矣。天台大師曰。餘行火車相現時。非改悔法。故知念佛獨化極惡矣。妙樂大師曰。諸教所讚多在彌陀。故以西方而爲一准。傳教大師云。所起罪業。彌陀以威力皆消除。命終決定生極樂矣。慧心先德云。往生極樂。教行。獨世末代。目足。道俗貴賤。誰不歸之矣。達磨大師曰。唯向西方念彌陀佛矣。百丈禪師曰。設雖大悟。可念佛。去佛地遙。況不。大悟彌念佛矣。永明智覺禪師云。生投五分。在路

近。且閣廣學念彌陀。弘法大師曰。忽然光中彌陀現。三尊。依見佛開法。力證第三發光地矣。覺饒大師云。六大無礙極理。收六字名號。三部祕經攝阿彌陀三字矣。永觀律師往生十因曰。巨石置船。過大海萬里。蚊虻附風。翔蒼天於九空。況乎行者至誠相應。本願已上。空也上人云。任口三昧。市中是道場。隨聲見佛。息聲即念誦也矣。一逼上人曰。生死本源形。男女和合一念。流轉三界相。愛染妄境迷情也。愛華詠月。動輪迴業。念佛思經。俱地獄炎。一心本源。自然無念也。無念作用。南無阿彌陀佛。真教上人曰。念佛十惡五逆。返滅重罪。託生無漏。報土清淨不可思議妙法。倚難及三世諸佛智慧。云云。託訶上人曰。往生者。念佛即是也。全非能領解智。只偏所領解德也。能歸智是觀佛三昧也。所歸法是即念佛三昧也。然能歸所歸一體。而稱南無阿彌陀佛。即是願行具足之名號真體也。觀佛念佛。同所成往生妙果也矣。

正此六字名號之中。絶迷悟善惡。況法不離而一聲即果極菩提決定也。實此易行大善之安心。不混同餘門。格外之宗風。已可云易中易善中之善。是單神勅之爲教示故也。慎可奉敬信者也。上祥恭跋矣。

散善義曰。每夜夢中常有一僧而來。指授玄義科文。既了更不復見矣。又云。更至心要期七日。日別誦阿彌陀經十遍。念阿彌陀佛二萬遍。誠心歸命。一如法。即蒙彼靈相。已善導大師尙成大功。當如是。如余淺短凡僧。非佛神成護力。何輒成要義。方至心願。一夏中誦護念經日別二十遍。稱名五萬遍。若不成就此儀。乍捨命。當夜非夢。眼前現一光。其光中願望所神願科段。皆明教導云云。

高祖上人。當四百五十年。遠忌。因茲爲謝法恩。述些小意志也。

元文三仲秋廿三日

甲府中時宗

稻久山法屈法阿關牛上人謹誌

神勅教導要法集卷第五終

一遍上人六條緣起序

夫佛祖化緣之跡。若不有載籍。則後世何徵何述矣。故佛有本紀。祖有紀傳。於是乎。百世之下。千載之後。足以觀其美言懿行。而自警警他也。曩昔聖戒法師者。乃入吾高祖上人之室。親承禪誨。詳錄善行。欲爲後昆龜鑑也。而其書祕諸篋中。光明不照世也。四百有餘年矣。蓋有所待時節因緣乎。今前他阿尊如上人。巡行津梁。掛錫平安。淨業餘暇。視之嘆曰。是大有益于後昆也。乃命六條道場現任輪山師及嗣子。校訂上梓焉。乃研精讎校。募緣鏤梓。不幾梓成矣。禾觀此盛舉。不堪隨喜。乃謂曰。今文獻足而可徵。則是法門之一大盛事矣哉。乃不揣庸愚。敢述數言。贅于卷端。以告後昆云。

安永五龍次丙申

洛南黃臺山下

淨阿澂禪 謹識

一遍聖繪第一

一遍聖は。俗姓は越智。河野太郎通清が孫。同七郎通廣。出家して如佛と豫州にして誕生。十歳にて悲母にをくれて。始て無常の理をさと。父如佛の命をうけ。出家を遂て。法名は隨縁と申けるが。建長三年春の頃ほひにて。僧善入と相具し。筑前國太宰府の聖達上人の禪室をとぶらひ給ふ。上人の給はく。學問の爲ならば。先文字讀をして來るべきよし仰らるゝによりて。ひとり出て。肥前國華臺上人の御もとにまうで給ひき。上人あひ給ての給はく。この人なにのゆへに來れるやと問給へば。そのをもむきくはしく答申されければ。扱は昔の同朋のちなみに。たがひにちぎりし事ども。いまだわすれず。舊好いとなつかし。しばらくはこの所に居住あるべしとて。名を問給へば。隨縁と申由答申給ふに。隨縁雜善恐難生といふ文有。しかるべからずとて。智真と改め

給ひき。さて。かの門下につかへて。一兩年程修學し給ふ。天性聰明にして。其學に長じければ。上人器骨をかが見るに。ただならぬものにはべり。はやく淨教の秘蹟をさづけらるべしとて。十六歳の春。又聖達上人の御もとにをくりつかはされたまひけり。

繪

建長四年春の頃より。聖達上人に隨逐給仕し給へり。首尾十二年。淨土の教門を學し。眞宗の奥義をうけ給ひし程に。弘長三年癸亥五月廿四日。父如佛歸寂の時。本國に歸り給ひぬ。其後。或は眞門をひらきて勤行をいたし。或は俗塵にまじはりて恩愛をかへり見。童子にたはぶれて。輪鼓をまはすあそびなどもし給ひき。ある時この輪鼓。地にちてまはりやみぬ。是を思惟するに。まはせばまはる。まはさざればまはず。我等が輪廻も。又かくのごとし。三業の造作によりて。六道の輪廻たゆる事なし。自業若とどまらば。何をもてか流轉せん。ここに始めて心に

あたて生死のことはりをおもひしり。佛法のむねをえたりきとかたり給ひき。夫眞俗二諦は相依の法。邪正一如は實乗のことはりなれども。在家にして精進ならむよりは。山林にしてねふらむにはしかじと。佛もをしへ給へり。また聖としかとは里にひさしくありては難にあふといへる風情も。おもひあはせらるる事侍り。しかじ恩愛をすてて。無爲にいらむには。ただしいま一度師匠に對面の志ありとて。太宰府へおもむき給ふ間に。聖戒も出家をとげて相したがひ奉りき。かの輪鼓のとき。夢に見給へる。

世をわたりそめて高ねの空の雲

たゆるはもとのころなりけり

繪

文永八年の春。聖善光寺に參詣し給ふに。此如來は。天竺の靈像として。日域の本尊となし給へり。酬因の來迎を示して。影向を東土の境に垂。有縁の歸依をあらはして。靈場を信州のうちにしめ給ふ。一光

三尊の形像。如來宿縁の密意を表し。決定往生の勝地。他方の靈場に越たり。誠に三國傳來。奇特言語道たえ。十劫已前の本誓。思量永くつき。我いま宿縁淺からざるによりて。たまたまあひ奉る事をえたりとて。參籠日かづをかさねて。下向のきざみ。善導已證の法門をあらはし。二河の本尊を圖し給ふ。

繪

同年秋の比。豫州窪寺といふ所に。青苔綠蘿の幽地をうちはらひ。松門柴戸の閑室をかまへ。東壁にこの二河の本尊をかけ。交衆をとどめて。ひとり經行し。萬事をなげすてて。專稱名す。四儀の勤行さはりなく。三とせの春秋ををくりむかへ給ふ。かの時己心領解の法門とて。七言の頌をつくりて。本尊のかたはらのかさにかけたまへり。其詞云。

十劫正覺衆生界。一念往生彌陀國

十一不二證無生。國界平等坐大會

この頌のをもむき。義理をつくしてよりより示誨を

かうぶりき。扱この別行結願の後は。永く境界を厭離し。すみやかに萬事を放下して。身命を法界につくし。衆生を利益せんとおもひ給ふ。

繪

一遍聖繪第二

文永十年癸酉七月に。豫州浮穴郡に。菅生の岩屋といふ所に參籠し給ふ。此所は觀音影現の靈地。仙人練行の古跡なり。むかし佛法はまだひろまらざりしころ。安藝國の住人。狩獵の爲に此山に來りて。嶺に登りてかせきをまつに。持たる弓を古木にあてゝはりてけり。其後此木よもすがら光をはなつ。晝になりてこれを見るに。上は古木なり。青苔處々にむして。其かたちたしかならず。中に金色なる物あり。すがた人に似たり。かの獵師佛菩薩の名體いまだしらざりけるが。自然發得して。觀音なりといふ事をしりぬ。歸依の心たちまちをこりて。持所の梓弓を棟梁とし。著所の菅蓑をうはぶきとして。草舎をつくりて。安置し奉りぬ。其後兩三年をへだてゝ。又此地に來りて。在し所を求るに。草舎落やぶりて。あとかたも見えず。嶺に登り谷にくだりてたづねあ

るさけるに。草ふかくしてあやしき處あり。たち寄て見れば。ありし蓑の菅生しげりし中に。本尊赫灼としておはします。いとうれしくおぼえて。かさねて精舎をかまへ。莊嚴をいたして。菅生寺と號して。歸依の志をふかくす。我此所の守護神と成べしとちかひて。野口の明神といはれて。いま現在せり。かくて星霜やうつりて後。用明天皇の御宇。震旦朝使來りて。隋の文帝の後懷胎の間。靈瑞ありとて。三種の寶物或定惠箱。鏡。錫杖。を此觀音に奉れり。かの朝使すなはち此所にとゞまりて。又鎮守とならむとて。白山大明神とあらはれ。堂の南にいられ給ふ。其後。此堂に廂をさし添たり。程なく炎上の事有けるに。本堂はやけずして。後の廂はかりやけにける。其後また堂舎ことごとく灰燼と成に。本尊竝に三種寶物はともにとび出給ひて。前なる櫻の木にのぼり給へり。又次に炎上あり。本尊は又とび出給ひて。同木にまし。す。餘の三種の寶物は。灰燼の中にのこり

とゞまりて。尋常の物とも見えず。鍾錫杖のひびき。むかしにかはることなかりける。此櫻木は。本尊出現し給ひしときの朽木の。ふたゝび生出て。枝さし花さける木なりければ。佛法最初の伽藍。靈驗希有の本尊なり。又土佐の國の女人あり。觀音の効驗有とさきて。かの巖窟にこもり。五障の女身を厭離せむ爲に。經典を讀誦しけるが。法華三昧成就して。男子の依身をえたり。或時は普賢文殊來現し。又は彌勒影護し給ひしによりて。かの影現尊にしたがひてをのゝ其所の名をあらはせり。又岩屋あり。父母の爲に極樂を現じ給へる所あり。三十三所の靈輻あり。斗蓋の行者。靈驗を祈る砌なり。凡巖怪石の連峯にそばだてる月。法身常住のすがたをみがき。陰條陽葉の幽洞にしげれる風。妙理恒説の韻をしらぶ。焼香供花の粧ひ。讀誦經典の聲。有縁の道人は。今猶見聞し侍るなり。仙人利生の爲に。遺骨をとゞめ給ふ一字の精舎をたてゝ。萬人の良縁をむすばし

む。其所に又一の堂舎あり。高野大師御作の不動尊を安置し奉る。すなはち大師練行の古跡。瑜伽薰修の爐壇。竝に御作の影像。すがたをかへずして此地に猶のこれり。上人發心之地故。勝絶之趣記。傳記。靈驗失。古老相傳之。聖此地に參籠して。遁世の素意をいのり給ふ。靈夢しきりに示りて。感應是あらたなり。此時聖戒ひとり隨逐し奉りて。閻伽をくみて。閑谷の月をになひたまへば。爪木をたづねて。暮山の雲をひろひなどして。行化をたすけ奉る。擬經教を龜鏡として。眞宗の口決をさづけ。明王を證誠として。同時の正覺をちぎり給委細問。略之。後。ながく舎宅田園をなげすて。恩愛眷屬をはなれて。堂舎をば法界の三寶に施與し。本尊聖教は受奉りき。わづかに詮要の經教をえらびとゝのへさせて。修行隨身の支具となされはべりき。

同十一年甲戌二月八日。同行三人相具して。豫州を出

給ふ。超一。超二。念佛坊。此三人。發因緣。雖有奇特。恐繁略之。 聖戒。五六ケ日をくり奉りしに。同國櫻井といふ所より。同生を華開の曉に期し。再會を終焉の夕にかぎり奉りて。いとまを申し侍りき。むかし。陳雷が膠漆のちぎりをむすびし最後。たがふ事なかりき。今師弟の現當の約をなす本懐。豈むなしからむや。臨終の時はかならずめぐりあふべしとて。名號書てたまひ。十念さづけなどし給ふ。後會を西土の月に期すといへども。離憂を南浮の雲にしひがたければ。悲涙ををさへて東西にわかれはべりぬ。

繪

頓て其年。天王寺に參籠し給けり。此伽藍は。釋迦如來轉法輪の古跡。當極樂土東門中心の勝地なり。五十餘代の帝王。尊崇あらたならず。六百餘廻の道場。星霜ふりたりといへども。雁塔堯朽ずして。落盤ひかりかじやき。龜井流久くして。清水たゆることなし。御手印の縁起にいはいはく。

若撃一香一華恭敬供養。若以一塊一塵拋入此場。遙聞寺名。遠見拜恭。如斯等者。結一淨土緣云云。かるがゆへに。此砌にして。信心まことをいたし。發願かたくむすびて。十種の制文をおさめて。如來の禁戒をうけ。一遍の念佛をすゝめて。衆生を濟度し始たひけり。

繪

天王寺より。高野山に參給へり。此山は巖五智を表し。山八葉にわかれて。兩部を一山につゞめ。不二を一山にしめす。かるがゆへに。弘法大師歸朝の後。獵者のをしへによりて。三鈷の靈瑞を翠松の梢に尋ね。五輪の即體を綠苔の洞にとゞめ給へり。凡願力によつて。依身をとゞむる事。天竺には。迦葉尊者。はるかに鷄足附受の曉を期し。日域には。弘法大師。まさしに龍華下生の春。まらたまふ。又六字の名號の印板をとゞめて。五濁常没の本尊としたまへり。是によりて。かの三地薩埵の垂迹の地をとゞらひ。九

品淨土同生の縁をむすばん爲に。はるかに分入たまひけるにこそ。

繪

一遍聖繪第三

文永十一年の夏。高野山を過て。熊野へ參詣し給ふ。山海千重の雲路をしのぎて。岩田河の流に衣の袖をすゞぎ。王子數所の禮拜をいたして。發心門のみぎはに。心のとゞしをひらき給ふ。藤代岩代の叢祠には。垂迹の露。玉をみがく。本宮新宮の社壇には。和光の月鏡をかけたたり。古柏老松のかげたえたる殷水の浪。聲をゆづり。錦徽玉皇のかざりを添たる巫山の雲。色をうつす。就中發遣の釋迦は。降魔の明王と共に東に出。來迎の彌陀は引接の薩埵を伴ひて。西にあらはれたまへり。爰に一人の僧あり。聖すゝめての給はく。一念の信をおこして。南無阿彌陀佛と唱て。此札を受給ふべしと。僧のいはく。今一念の信心をこりはべらず。うけば妄語なるべしとてうけず。聖の給はく。佛教を信する心おはしまさずや。などかうけ給はざるべき。僧のいはく。經教をうた

がはずといへども。信心のおこらざる事はちからおよばざる事なりと。時にそこばくの道者あつまれり。此僧若しうけずば。皆うくまじきにてはべりければ。本意にあらずながら。信心おこらずとも。うけ給へると。僧に札をわたし給ひけり。是を見て。道者皆悉くうけはべりぬ。僧は逝くかたをしらず。此事思惟するに。故なきにあらず。勸進のをもむき。冥慮をあふぐべしと。おもひたまひて。本宮證誠殿の御前にして。願意を祈請し。目を閉て。いまだまどろまざるに。御殿の御戸ををしひらきて。白髪なる山臥の長頭巾かけて出給ふ。長床には。山臥三百人ばかり。首を地につけて禮敬し奉る。此時權現にておはしましけるよとおもひ給て。信仰しいりておはしけるに。かの山臥。聖の前にあゆみ奉給ての給はく。融通念佛すすむるひじり。いかに念佛をばあしくすすめらるゝぞ。御坊のすゝめによりて。一切衆生はじめて往生すべきにあらず。阿彌陀佛の十劫正覺に。

一切衆生の往生は南無阿彌陀佛と決定する所なり。信不信をえらばず。淨不淨をさらはず。其札をくばるべしとしめし給ふ。後に目をひらきて見給ひければ。十二三ばかりなる童子。百人ばかり來りて。手をささげて其念佛うけむといひて。札をとりて。南無阿彌陀佛と申て。いづこともなく去にけり。凡融通念佛は。大原の良忍上人。夢定の中に。阿彌陀佛の教勅をうけたまひて。天治元年甲辰六月九日。はじめをこなひ給時に。鞍馬寺毘沙門天王をはじめ奉りて。梵天帝釋等。名帳に名をあらはして。入給けり。此童子も。王子達のうけ給へるにやとおもひあはせらるるかたも侍べし。大權の神託をさづかりし後。いよいよ他力本願の深意を領解せりと。かたりたまひき。

繪

同年六月十三日。新宮より便につけて消息を給ふ事ありしに。いまはおもふやうありて。同行等をもは

ならすてつ。又念佛の形木くだしつかはす。結縁有べきよしなど。こまかに書給へり。其形木文云。

南無阿彌陀 決定往生六十萬人

此中に。總して六八の弘誓を標して。一乗の機法を明す。引導の機縁かならず六十萬人にさだむる事は。佛力觀成の要門は。諸佛の大悲。ひとへに勤苦の衆生に施し。無上超世の本誓は。如來の正覺。しかしながら常没の凡夫となへて。三祇の起行。功を衆生にゆづり。六字の名號。證を一念に成ず。かるがゆへに十劫の成道は。凡聖の境界をつくし。萬徳の圓明なる事は。報佛の果名よりあらはれて。頓教の一乗十界を會して凡をこえ。聖をこえ。一返の稱名。法界に遍して前なく後なく。有識含靈。皆悉く安樂の能人無極の聖と成ずる。化力難思の密意を傳へて。一切衆生決定往生の記別をさづくるものなり。抑王宮密化の夕の風には。佛智を直に無善の凡夫にしめし。靈山大會の曉の空には。開導を偏に有學の阿難

にゆづりて。平等一子の慈悲。利益を萬年にとどめ。本誓六字の名號。無生を一聲に證す。二尊の本懷あやまりなく。諸佛の證誠むなしからず。一稱十念。聲を尋て來迎し。五逆闍提。願に乗じて皆ゆく。巨石の船を得。蚊虻の風につくがごとし。聖頌云。

六字名號一遍法 十界依正一遍體
萬行離念一遍證 人中上上妙好華

又云

六字之中 本無生死
一聲之間 即證無生

熊野を出給て。京をめぐり。西海道をへて。建治元年の秋のころ。本國にかへり給ふ。釋尊なを報身の恩を報ぜん爲に王城に住し。生身の恩を報ぜん爲に多く舍衛に住し給ふといへり。しかあれば我先有縁の衆生を度せん爲に。いそぎ此國に來る由かたりたまひき。其時三輩九品の念佛の道場に。管絃などして。人人あそびたはぶればべりしに。聖の歌に

云。

つのにやなにはものりのことはは

あしかりけりとおもひしるへし

繪

國中あまねく勸進して。いづちともなく出給ひぬ。次年又事のゆへありて。豫州をとをり。九國へわたりたまひて。聖達上人の禪室にははしたりければ。なのめならず悦び給ひて。わざと風爐結構して。ただ兩人入たまひて。風爐の中にして佛法修行の物がたりし給けるに。上人いかに十念をばすすめずして。一返をばすすめ給ふぞと問たまひければ。十一不二の領解のをもむき。くはしく述給ふに。感歎し給て。さらば我は百返うけむとて。百返うけたまひけり。伊豫へいりたまひたりし時。此やうくはしくかたり給て。いかにも智者は子細のある事なりとぞ申され侍りし。

繪

一遍聖繪第四

建治二年。筑前國にて。或武士の屋形にははしたりければ。酒宴の最中にて侍りけるに。家主装束ことにひきつくるひ。手あらひ口すすぎて。ありむかひて。念佛受て又いふ事もなかりければ。聖は立去給ふに。此俗のいふやう。此僧は日本一の狂惑の者かな。なんぞ其尊む氣色ぞといひければ。客人の有けるが。さてはなにとして。念佛をばうけたまふぞと申せば。念佛には狂惑なきゆへなりとぞいひける。聖申されしは。おほくの人にあひたりしかども。これぞまことに念佛信じたる者とほえし。餘人は皆人を信じて法を信ずる事なきに。此俗は依法不依人のことほりをしりて。涅槃の禁戒にあひかなへり。ありがたかりし事なりとて。返す返すほめたまひき。實も尋常の人には。かはりたりけるものによ。

繪

九國修行の間は。ことに人の供養などもまれなりけり。春の霞あぢはひ盡ねれば。生を念じて。永日を消し。夕の雲衣たえぬれば。慚愧をかさねて。寒夜を明す。かくて念佛を勸進し給けるに。僧の行あひたりけるが。七條の袈裟破たるを奉りけるを。腰にまとひて。只縁にしたがひ。足にまかせて。すすめありきたまひけり。山路に日暮ぬれば。苔をはらひて露にふし。溪門に天明ぬれば。梢をわけて雲をふむ。扱大隅正八幡宮にまうでたまひけるに。御神の示したまひける歌。

とことばに南無阿彌陀佛と唱ふれば

なもあみたふにむまれこそすれ

既に九州をまはりて四國へわたり給はんとし給けるに。大友兵庫守頼泰。歸依し奉りて。衣など奉りけり。其所にしばらく逗留して。法門などあひ談じたまふあひだ。他阿彌陀佛。始て同行相親の契を結び奉りぬ。總じて同行七八人相具して。弘安元年夏の

頃。豫州へわたり。同秋。安藝の嚴島へまいりたまひぬ。同年の冬。又備前國藤井といふ所の政所におはして。念佛すすめ給けるに。家主は吉備津宮の神主が子息なりけるが。ほかへたがひたり。其妻女。聖をたとびて。法門など聽聞し。俄に發心して。出家を遂にけり。聖は福岡の市といふ所にて。念佛すすめ給ほどに。かの夫歸來りて。これを見侍りて。目もあやにおぼえて。事の由を尋るに。女こたへていはく。たふとき捨聖のおはしつるが。念佛往生の様。出離生死のをもむき。説きつるを聽聞するに。誠にたふとくおぼえて。夢幻の世の中に。化なる露のすがたをかざりても。いつまでかあるべきなれば。出家をしたるよしをかたる。夫は無惡不造の者なりければ。おほきにいかりて。件の法師原。いづくにても尋出して。せめころさんとて出たるが。福岡の市にて。聖に尋あひ奉りて。大太刀わきにはさみて。聖の前にかづき侍りけるに。聖いまだ見給はざる

者に向ひて。汝は吉備津宮の神主の子息かとたづねられけるに。たちまちに瞋恚止み。害心うせて。身の毛もよだち。たふとくおぼえける程に。即もとどりを切つて。聖を知識として。出家を遂にけり。かの揚州の屠士が。和尚を害せんとせし九品を。掌のうちを拜して。忽に捨身往生の瑞をあらはし。今備州の勇士が。上人を殺さんとする一念を言下にひるがへして。即出家修行の道に入。古今の奇特異なりといへども。機法の相感。是同き者歟。其ほか又彌阿彌陀佛。相阿彌陀佛を始として。出家を遂るもの。總じて二百八十餘人はべりけり。

繪

同二年の春の頃。都に登りて因幡堂に宿し給けるに。寺僧の中より。かやうの修行者は。此所に止住の事いましめありとて。内陣にはいれ奉らざりければ。椽に宿したまひけり。其夜かの堂の執行民部法橋覺順。夢に本尊の告させ給ふとおぼえて。我大事の客

人を得たり。もてなすべき由を示されけるとて。夜半ばかりに請じいれ奉るによつて。廊に宿したまひぬ。この本尊は村上天皇の御宇。天曆五年三月。橘の行平。夢想によつて。因幡國賀留の津にして。金色の浪の中より。等身の薬師の像をとり上奉る。行平在京の時。長保五年四月。虚空を飛て。王城に來給へり。其夜。空に聲ありて告て云。高辻烏丸に佛生國薬師來化し給。結縁すべしと云。此像は即釋迦如來御自作の梅檀の像。天竺祇園精舎の療病院の本尊也。薬師と彌陀とは。因位契深くましますゆへに。八菩薩をもて道路を示し。東土に衆生をして。西方の寶刹におくらむと願じたまへり。仍てはるかに月氏の雲を出て。日域の境に移り給ふ。聖化導の願樂を憐愍して。靈夢を示したまひけるにや。

繪

同年八月に。因幡を出て。善光寺へおもむき給。道間の日數。自然に四十八日なり。其年信濃國佐久

郡伴野の市庭の在家にして。歳末の別時のとき。紫雲始て立侍りけり。抑をどり念佛は。空也上人。或は市屋。或は四條の辻にて。始行し給たり。かの詞云。

心無_き所緣隨_ひ日暮止。身無_き住所隨_ひ夜曉去。忍辱_を衣厚_を不_痛杖木瓦石。慈悲_を室深_を不_聞罵詈誼。誘_を任_を口稱_を三昧_を。市中是道場。順聲見佛息精即念珠。夜夜待佛來迎。朝朝喜最後。近_を任_を三業於天運。讓_を四儀於菩提矣。是依爲聖持文。載之。

夫よりこのかた。學ぶ者。をのづから有といへども。利益猶あまねからず。しかるを今時至り。機熟しけるにや。

同國小田切の里。或武士の屋形にて。聖をどり始給けるに。道俗おほく集りて。結縁あまねかりければ。次第に相續して。一期の行儀となれり。無量壽經に云。

曾更見世尊 即能信此事

謙敬開奉行 踊躍大歡喜文

善導和尚御釋にいはく。

行者傾心常對目 騰神踊躍入西方文

文の意は。身を穢國に捨て。心を淨域にすまし。偏に本願を仰ぎ。專名號を唱れば。心王の如來。自然に正覺の臺に坐し。己身の聖衆踊躍して。法界に遊ぶ。併自の行業をからず。ただ他力難思の利益。常没得度の法則なり。しかれば行者の信心を踊躍のかたちにしめし。報佛の聽許を金磬の響にあらはして。長眠の衆生を驚かし。群迷の結縁をすすむ。是を以て。童子の竹馬をはする是を學びて所所にをどり。寡婦の蕉衣を擣。是になずらへて。聲聲に唱ふ。夫慈尊別意の密化は。善惡同道場に坐し。教主開示の要門は。定散ひとしく無生を得。稱念是安し。往生何の煩かあらん。江州守山のほとり。琰魔堂といふ所におはしける時。延曆寺東塔櫻本の兵部堅者重豪と申人。聖の體を見むとて參りたりけるが。をどり

て念佛申さるる事けしからずとまうしければ。聖はねははねよをとらはをとれ春駒の

のりのうちをはしるひとをしる

重豪

ころこまのりしつめたるものならば

さのみはかくやをとりはぬへき

聖又返事

ともはねよかくてもをとれころ駒

みたのみのりとさくそうれしき

其後。此人は發心して。念佛の行者と成。攝律國小野寺といふ所にすましけるとぞきこを侍りし。又或僧心こそ詮なれ。外相いかでも有なんと申ければ。ころより心をえむとこころえて

ころにまよふこころなりけり

又或時

みな人のことありかほにもひなす

ころはおくもなかりけるもの

いはしたことはのちをすくくと

ひとのころのゆくこともなし

のりのみちかちよりゆくはくるしきに

ちかひのふねにのれやもろ人

繪

一遍聖繪第五

弘安二年の冬。信州佐久郡の大井太郎と申ける武士。此聖にあひ奉りて。發心して一向に極樂をねがひけり。かの姉にてはべりけるものは。佛法歸依の心ながくたえはてて。念佛誦經のおもひなかりけるが。ある夜夢に見るやう。家のめぐりに小佛のあまた行道し給ふ中に。たけの高きをば。一遍上人と申と見て。おどろきて。陰陽師をよびて。今見る事は悦かうれへかと問。陰陽師目出度悦なりとすらなひけり。此時發心して。聖を請じ奉りて。三日三夜供養をのべて。念佛を申き。結願して。聖は歸り給ぬ。數百人をどりまはりける程に。板敷ふみおとしなどしたりけるをつくるふべき由。人申ければ。是をば一遍聖のかたみとすべし。つくるふべからずとて。そのまゝにて置侍りけり。かの漢の成帝。直臣の諫言をしのびて。朱檻のおれたるをつくるはざりけんも思

ひあはせられて。ことにわりなくこそおぼえはべれ。かの女。其のち專修の行者となりて。つゝに往生をとげにけり。

繪

下野國小野寺といふ所にて。俄に雨おびただしく降ければ。尼法師。袈裟衣など脱を見給て。

ふれはぬれぬるれはかほく袖のうへを

あめとていとふひとそはかなき

或時衆の尼。瞋恚をおこしたりけるに。

雲となるけふりなたてそあまのはら

つきはをのれとかすむものは

繪

弘安三年。善光寺より奥州へおもむき給に。旅店日をかさねて勝地ひとつにあらず。月は野草の露より出て。遠樹のこずえをいとぬ境もあり。日は海松の霧をわけて天水の浪にかたぶく聖もあり。漁人商客の路を伴ふ知音にあらざれども。かたらひをまじ

え。邑老村奥のなさけなき勸化をまたずして縁をむすぶ。かくて白川の關にかかりて。關の明神の寶殿の柱に書付たまひける。

ゆく人を彌陀のちかひにもらさしと

名をこそとむれ白川のせき

奥州江刺の郡にいたりて。祖父通信が墳墓を尋たまふに。人常の生なく。家常の居なければ。只白揚の秋風に東俗の煙跡をのこし。青塚の暮の雨に北芒の露涙をあらそふ。仍て荆蕪をはらひて追孝報恩の勤をいたし。墳墓をめぐりて轉念佛の功をつみたまふ。誠に一子出家すれば。七世の恩所得脱する理なれば。亡魂さだめて懐土望郷の昔の夢をあらためて。華池寶閣の常樂に移りぬらむと。ことにたのもしくこそおぼえ侍れ。聖歌云

はかなしなしはしかはねのくちぬほと

のはらのつちはよそに見えたり

世の中をすつるわか身も夢なれば

たれをかすてぬひとと見るへき
身をすつるすつる心をすてつれば
おもひなき世にすみそめの袖

繪

松島平泉の方勸まはりて。常陸國に出給けるに。惡黨のはべりけるが。時衆の尼をとらむとしけるに。夢に僧のまたぶるといふ物を持たるが來て。念佛の行者に障礙をする事不思議なりとて。其杖にてつき給と見て夢さめぬ。すなはち中風して身もはたらかされざりけるに。かの男の親。此事をなげきて。聖のもとにまうて。事の由を懺悔したすけさせたまへと申に。聖我しらぬ事なり。いらうにおよばずとおほせられけれども。かさねてなげき申問。さらばゆきて見べしとておはしければ。すなはち中風なをりにけり。同國成者聖を請じ奉りて。三七日供養のべて後。庭を掃除しけるに。渠の中より驚眼五拾貫を得たる事はべりけり。かの文學母の爲に一子を

埋まんとて。金釜を得たりけるも。眞俗其志ことなりといへども。現業の感ずる所。おもひあはせられ侍りけり。武藏國石濱にて。時衆四五人病ふしたりけるを見給ひて。

のこりゐてむかしを今とかたるへき

こころのはてをしるひとそなき

繪

弘安五年の春。鎌倉に入たまふとて。ながさごといふ所に三日とどまり給ふ。聖の給はく。鎌倉入の作法にて。化益の有無を定むべし。利益たゆべきならば。是を最後とおもふべき由。時衆に示して。三月一日小袋坂よりいらたまふに。今日は大守山内へ出給ふ事あり。此道よりはあしかるべき由人申ければ。聖思ふやうありとてなを入たまふ。武士むかひて制止をくはふといへども。しひて通りたまふに。小舎人をもて時衆を打擲して。聖はいづくにあるぞと尋ねければ。聖爰にありとて出むかひ給ふに。武士い

はく。御前にてかくのごとき狼藉をいたすべきやうやある。なんぢ徒衆を引具する事。偏に名聞の爲なり。制止にかかへられず。亂入する事心得がたしと云。聖答給はく。法師にすべて要なし。ただ人に念佛をすすむるばかりなり。なんぢらいつまでかながらへてかくのごとく佛法を毀謗すべき。罪業にひかれて冥途におもむかん時は。此念佛にこそたすけられ奉るべきにとの給ふ。返答なくして二杖うち奉る。聖は不捨怨憎由大悲なれば。さらに痛る色なし。有識含靈皆普化なれば偏に結縁を悦びての給ひけるは。念佛勸進をわが命とす。しかるをかくのごとくいましめられれば。いづれの所へかゆくべき。爰にて臨終すべしとの給ふに。武士鎌倉のほかは御制に非ずと答。よりにて其夜は山の阻。道のほとりにて念佛し給ひけるに。鎌倉中の道俗雲集して。ひろく供養を述奉りけり。むかし達磨の梁を出。孔子の魯を追れしも。人の愚にあらず。國の拙にあらず。只時の

至るといたらざるとなり。しかあれば。今此聖も。人ついに歸して。貴賤爰に集り。法彌弘りて。感應みちまじはりけり。

給

一遍聖繪第六

弘安五年三月二日。片瀬の館の御堂といふ所にて。斷食して別時し給ふ。願行上人の門弟。上總の生阿彌陀佛來臨して。十念受奉りて。六日の朝法生院へ召請し奉り。一日一夜はべりけるに。又御使あるによりて。七日の日中に。かた瀬のはまの地藏堂にうつり居て。數日をくり給けるに。貴賤雨のごとくに參詣し。道俗雲のごとくに群集す。同道場にて三月の末に。紫雲たちて花ふり始めり。其後は時にしたがひて。連連此奇瑞ありき。人うたがひをなして問奉りければ。花の事は花にとへ。紫雲の事は紫雲にとへ。一遍しらずとぞおほせられける。聖歌云。

さけはささちれはをのれとちる花の

ことはりにこそはなりにけれ

花か色月かひかりとながむれは

こころはものをおもはさりけり

抑あまねく先規をとひらへば。道緯禪師念佛せしかば。空中に化佛あらはれ。天花ふりくだる。其色鮮白にして。あまねく空に満といへり。見新修 往生傳道詮禪師往生せしかば。紫雲庵におほひ。音樂空よりきこえ。細花天よりふりき。見戒 珠傳。并州開花寺の沙彌兄弟二人往生のときは。地うごき花ふりて。二人とも一時にさりなき。山瑞 應傳延曆寺座主僧正増命和尚臨終の時は。金光たちまちに照し紫雲をびけ。異香室に満。山日本 往生傳かくのごときの瑞相。傳記に多しといへども。これを記するにいとまあらず。しかれば時いたり機熟するときは。感應をあらはすこと。なんのうたがひかあるべき。其時の天よりふりたる潔白の花。空にきえて地におちたりしを。徳大寺の候人肥前前司貞泰といふ者。今に持たり。かの花によく似はべり。また書たまへる名號炎上の時。紙はやけて文字は灰の中のにこりたるを。美作國なる者の手より貞泰相傳して。おなじく安置し奉れり。河内國に

も名號のやけざる事あるよしかたり申人はべりき。又すみにてかき給へる名號。金色に變ずる事。豫州に是あり。此同年七月十六日に。片瀬をたちて。都のかたへ修行し給。伊豆の國三島につきたまひける日。日中より日没まで。紫雲たちたりけり。折ふし時衆七八人。一度に往生をとぐ。社官等は忌奉る事なくして。結縁申はべりけれども。いささかのたたりもなかりけり。まことに大通智勝の昔より。和光利物の今にいたるまで。本迹懐をたづぬるに。衆生の出離をすすめむが爲なれば。佛法を修行せむ人は。神明の威光をあふぎたてまつるべきものをや。

繪

武藏の國に鱈坂の入道と申す者。遁世して時衆にいるべき由申けれども。ゆるされなかりければ。往生の用心よくよくたづねうけ給はりて。蒲原にてまち奉らんとて出けるが。富士河の端に立寄。馬に指たる繩をときて腰につけて。汝等終に引接の讚を出す

べしといひければ。下人こはいかなる事ぞと申に。
 南無阿彌陀佛と申てしねば。佛の來迎し給ふと聖の
 仰られつれば。極樂へとくしてまいるべし。名残を
 惜む事なかれとて。十念唱へて水にいりぬ。即紫雲
 棚引。音樂西にきこえけり。しばらくありて。繩を
 引上たりければ。合掌少もみだれずして。目出たか
 りけりとなん。聖歌にいはいく。
 心をはにしにかけひのなかれゆく
 みつのおへなるあはれ世の中

繪

道場へ託磨の僧正于時法印をくり給狀に云。

佛子公朝胡脆合掌而言。

南無西方極樂教主阿彌陀佛。南無觀音勢至諸菩薩衆清淨大海衆。照無二之誠心。哀專一之勤修。歲去歲來。往生願無倦。若座若立稱念之功漸積。而聞上人濟度之悲願。瀕下愚隨喜之淚行。且爲結緣。且爲值遇奉寄書信於沙村之淨場。欲期引

導於金刹之妙土。縱有前後之相違。莫忘懇勸之芳契。恐々敬白

弘安五年五月廿二日

法印公朝

謹上還來穢國一遍上人足下

くもりなき空にふけゆく月も見よ

こゝろはにしにかたふける身を

返報云

南無阿彌陀佛

信心大衆等言。

一稱名號中 三尊垂化用

十方衆生前 九品顯來迎

くもりなき空は本よりへたてねは

こゝろそにしにふくる月かけ

南無阿彌陀佛

六十萬人知識一遍

又或人法門たづね申ける返事。

須彌のみね高しひきしの雲消て

月のひかりやそらのつちくれ

ねふつにもをのか心をひくすは

みをせめたまの露としらすや

あともなき空にあらそふこゝろこそ

なか／＼月のさはりとはなれ

又能念上人のかたり給しは。上總の生阿彌陀佛所勞の時。聖を召請せられけるに。かまくらへはいれらればこそゆかめ。現ぜずよりほかはとのたまひけるが。片瀬におはしましたながら。生阿彌陀佛のもとにおはしてものがたりなどしたまひけると。まさしくうけたまはりき。しかるに此生阿彌陀佛は熊野の道中にて臨終めてたくて。往生とげられぬ。われも知識の契約申てはべりしかばたのもしくはべる其名残なれば。契約申さんとて來りたるよしのたまひしが。いくほどもなく。此聖三條堀河にして臨じう正念にて。素懷をとげ給しかば。定めて半坐の上に往昔の因縁をかたらひ給らんとぞおぼへはべる。又尾張に二の宮入道と申者。臨終の時はたすけさせ給へと申ければ。信せばゆかんずると約束したまひけり。

下向ののちやまひづきて臨終にをよびければ。此事を深く信じてまら奉りけるに。最後のさざみたひとりまへに來給たりけるを。入道知識の僧に一遍上人のいらせたまひたるは見奉るか。うしろむきておはしますぞと申ければ。知識の僧只今臨終にてましませば。引接の爲に西にむきておはしますかと申ければ。歡喜のおもひに住して。念佛申て往生をとげにけり。是は知識の僧も妻女も正しく見奉りたりけり。即身往生も三國の傳記にのせたる事なれば。念佛の行者。此依身ながら神通を現せん事も。をのづからあるべきにや。

繪

弘安六年癸未尾張の國甚目寺につき給ひ。此寺は推古天皇の御宇。當國の泉郎龍麿。蒼海の底より觀音の紫金の像を感得し奉りて。伽藍を建立す。傳云。出於於濟傳日本。或善光寺如來。臨土申。天智天皇の御宇。靈徳によりて勅願に准せられしよりこのかた。十二因縁の夕の霧にや

どりて。涼燠おほくかさなり。三十三身の秋の月をかまやかして利益あまねくひろまれり。よつて此地にして七日の行法を始たまひけるに。供養力つきて時僧うれへの色見えければ。聖しめし給はく。斷食によりて法命つくる事なし。かならず宿願をはたすべしと。その夜萱津の宿にはべる。徳人二人同時に夢想をかうふる。此本尊のかたはらにまします毘沙門天王。かの宿におはしまして。我大事の客人をえたり。かならず供養すべきよしを示し給ふ。其朝二人相伴ひて。夢想の様を申て供養をのべ奉る時。御帳を風の吹あげはべりけるにおがみ奉れば。此毘沙門天王。御座をさりてあゆみ出て立たまへり。人皆不思議のおもひに住して。すなはちかの寺の傳記にのせをはりぬ。此毘沙門はもとよりかゝる不思議の靈徳を施したまふ事多しとぞ申つたへたる。

繪

一遍聖繪第七

美濃尾張をとほり給ふ。所々の惡黨札をたてゝいはく。聖人供養の志には。かの道場へ往詣の人々にわづらひをなすべからず。もし同心せざらむ者にきては。いましめをくはふべし。云よりて三年が間。海道をすゝめ給ふに。晝夜に白浪のおそれなく。首尾録林の難なし。凡化道にをもむきたまひて後。十六年の間。洛陽邊土貴賤群をなしゝかども。いさゝかも喧嘩のことはべらざりき。又不思議なりし事は。近江の國草津と申所におはせし時。中夜終りて人皆しづまりて後に。雷電し雨あらく風はげしかりしに。聖をさい給へり。其かたはらにはべりしかば。たゞいま結縁の爲に。伊勢太神宮のいらせ給に。山王もいらせたまふなり。不信の者ども。小神達に聞せられて。おほく病惱の者ありぬとおぼゆるぞと仰られき。一時ばかりありて。雷電とゞまりぬ。其朝病者

やあると尋はべりしかば。時衆一度に十三人病はべりき。又萱津の宿におはしけるときも。伊勢太神宮のいらせ給はむするが。蜂にて現ぜさせ給ふべきなりとの給けるに。日中始りければ。道場におほきなる峰充滿したりけれども。人をさす事もなく。日中はてければ。皆とびさりにけり。昔日光權現の三論宗擁護の爲に。南都へ勸請せられ給はんとて。おほくの不思議を現じたまひし中に。鴨の勢なる蜂。東大寺に巢をくひて人をさし殺しければ。宣言を下されて。一郎瀧口と申ける弓の上手に。是を討させらる。二三日に射つくしてけり。後に天下早魃疫癘して。人民おほく死する時。七歳の小兒に託して。我は權現なり。此所にあらはれん爲に。たび／＼しるしを見せしぞ。俱力伽羅の行者となり。又蜂となりしもわれなり。此所に住して三論宗を守らむといふ願をはたさん爲なりと御託宣ありければ。人うたがひて。實の權現にておはしまさば。なんぞ良辨に

あひて。験をうしなひ。又一郎には射られさせたまふぞと申に。良辨にまけしは四聖の威を増ん爲なり。一郎に射られしは。國王の徳をあらはさん爲なりとぞおほせられける。今度の早魃疫癘は我なす事ぞ。我を勸請せば。すなはちこの難を除べしとしめされけり。早魃をとゞめさせ給ば。勸請し奉るべきよし申ければ。たち所に雨ふりて國土をうるほし。病いて人民安穢なりき。垂迹の應用は時により縁にしたがひて一准ならぬ御事なれば。かならず其例を尋るにおよばされども。神明の蜂と現ぜさせ給事。おほひあはせらるゝかたのはべるものなり。江州はおほく山門の領たるによりて。ひさしく歸依の事しかるべからざる由。相ふれらるゝときこえしかども。横川の眞縁上人來臨ありて。たがひに芳契ありき。數日の化道はづらひなくしてすぎたまひぬ。又關寺へいり給し時。關城寺よりしかるべからざる由制止ありとて。其夜は關のほとりなる。草堂に立よりた

まひし程に。化道のをもむき。ゆへなきにあらざると。衆徒のゆるされありしかば。關寺に七日の行法を始たまひき。あまさへ智徳達對面法談ありて。聖の餘波をしまるゝによりて。いま二七日延引せられはへりき。

繪

同七年閏四月十六日。關寺より四條京極の釋迦堂にいら給ふ。貴賤上下群をなして。人はかへり見る事あたはず。車はめぐらす事をえざりき。一七日の後。因幡堂にうつりたまふ。其時土御門入道前内大臣念佛けちえんの爲におはしまして。後にをくり給へる。

一こそをほのかにきけとほととぎす
なをさめやらぬうたゝねの夢

返事

聖

ほととぎす名のるもさくもうたゝねの
ゆめうつゝよりほかのひとこそ

同出離生死のをもむきたづねつかはされける御返事

云。

他力稱名は不思議の一行なり。彌陀超世の本願は凡夫出離の直道なり。諸佛深智のをよぶ所にあらざ。いはんや三乘淺智心をうかとはんや。諸教の得道を耳にとめず。本願の名號を口にとなへて。稱名のほかにわが心もちひざるを。無疑無慮。乘彼願力。定得往生。といふ南無阿彌陀佛となへて。わが心のなくなるを。臨終正念といふ。此時佛の來迎にあづかりて。極樂に往生するを。念佛往生といふ。云云。又三條悲田院に一日一夜。蓮光院に一時おはします。是等は彼寺の長老の召請のゆへにぞはべりける。さて蓮光院よりかへり給たりける後朝に。かの寺の方丈より申をくられける。

うつゝとてまつへき事もなかりけり

きのふのゆめよ見しは見しかは
聖返事
うつゝとてまちえてみれば夢となる

きのふにけふなちもひあはせと

繪

其後。雲居寺。六波羅蜜寺。次第に巡禮し給て空也上人の遺跡。市屋に道場をしめて。數日をおくり給しに。唐橋法印承勢至菩薩の化身にておはしますよし。靈夢の記をもちてまいれり。聖は念佛こそ證にてあれ。勢至ならずば信すまじきかといましめたまふ。又從三位基長卿日ごろは信じ奉るおもひなきて。結縁も申さぬ所に。たちまちに瑞夢の告ありとて。一卷の記を持參せられ奉りき。聖さても信心をこらば。よき事よとてなげをかれぬ。其詞云。

昔大唐聖紹之時。如來之化身。聞瀧水之聲。而廣念佛。於上都。今本朝聖明之代。淨住之應現。依靈社之告。而勸稱名。於東洛。蟋蟀候秋。蜉蝣以陰。此言雖小。可以喻大。誠是隨機說法者。頓悟出離之階梯。稱名念佛者。濟度相應之舟航也。舍衛九億之衆多。仰練行之席。頑魯六十之翁。未往詣集

會之場。而十三日之夜。十四日之曉。夢魂所示以詩可讀。拭隨喜之淚。添歸依之誠。翠威未而孟嘗泣。風力少。而落葉脆。之謂歟。于時殘更。而枕上凝思。驚眠者穿疎屋之月影。早晨。而案頭染筆。滌心者。拂業塵之風聲。非飭浮花。何招綺語之罪。只撫要實。豈汗至德之光哉。

從三位藤基長

今日專稱名號勸。可知教主使乎身
受生欲界獨忘歎。假貌人間誰謂人
處處紫雲晴後耀。時時花雨夏中春
覺前萬事唯心土。夢裏一聲安養隣
曠劫以來沈沒衆。結縁隨喜出離因
先開靈託淚零袖。内證彌陀外用神
聖の給はく。聖人の風をもちひること。俗をかうる事なし。しかれば關東にして化導の有無を定めき。かねて思しにすこしもたがはず。いま又數輩の徒衆を引具して。洛中に逗留の事もとも斟酌有べし。云云

よりて經廻の道場。行法の日數。皆故なきにあらず。京中の結縁。首尾自然に四十八日にてはべりしが。市屋にひさしく住給し事は。かたぐ子細ある中に。遁世の始。定也上人はわが先達なりとて。かの言どもを心にそめて。口ずさみたまひき。其中に。

求名爲願衆。身心疲。積功爲修善。希望多。不如孤獨無境界。不如稱名拋萬事。閑居隱士貧。爲樂。禪觀幽室者。閑爲友。藤衣紙衾是淨服。易求無盜賊。恐文。

此文によつて。始四年は身命を山野にすて。居住を風雲にまかせて。ひとり法界をすゝめたまひき。凡濟度を機縁にまかせて。徒衆を引具し給ふといへども。心諸縁を離れて。身に一塵をもたくはへず。一生終に絹綿のたぐひはだにふれず。金銀の具手にとる事なく。酒肉五辛をたちて。十重の戒珠を全し給へり。歌云。
をのつからあひあふときもはかれても

ひとりはおなしひとりなりけり
おほかたの空にはそらの色もなし
月こそつきのひかりなりけれ
かくしつゝ野原の草のかせのまに
いくたひ露をむすひきぬらん

繪

同年五月廿二日に。市屋をたちて桂に移り給ぬ。其時京より人のもの申したりける返事。

おもひとけはすきにしかたもゆく末も

ひとむすひなる夢のよの中

さて聖此所にて煩ふことのおはしましけるに。書て出したまひける詞云。

夫生死本源のかたちは。男女和合の一念。流浪三界の相は。愛染妄境の迷情なり。男女形やぶれ。妄境をのづから滅しなば。生死本無にして。迷情ここにつきぬべし。花を愛し月を愛する。ややもすれば輪廻の業。佛をおもひ經をおもふ。ともすれば地獄の焰。

但一心の本源は自然に無念なり。無念の作用眞の法界を縁ず。一心三千に遍ずれども。本より以來動ぜず。しかりといへども自然の道理をうしなひて。意樂の魂志をぬきいで。虚無の生死にまどひて幻化の菩提をもとむ。かくのごとき凡卑のやから。厭離穢土欣求淨土の志深くして。息たえ命をはらむをよるこび。聖衆の來迎を期して彌陀の名號をとなへ。臨終命斷のきさみ。無生法忍にはかなふべきなり。
南無阿彌陀佛

繪

一遍聖繪第八

弘安七年秋のころ。桂をたちて北國のかたへをもむき給ふ。桑驛に烟とをくして。蘿軸に日かたぶきぬれば。篠村といふ所にて林下に草の莖をむすび。叢邊に苔の莖をまふけたまふに。あやしき男七人來りて。穴生より御むかへにまいりたりとまうし。すていかへりぬ。是によつて其翌朝に穴生へまいり給たりけるが。かの所には曾て請じ奉りたる人もなくして。つひに行衛をしらず。此所の人に縁を結しめん爲に。觀音のしめさせたまひけるかどぞ申あへりける。折ふし腹をわづらひたまひける程に。行歩わづらはしとて。二七日逗留し給。其間まいりあつまりたるものどもを見るに。異形異類にして。尋常の人にあらず。田獵漁捕を事とし。爲利殺害を業とせるともがらなり。此さまにては佛法歸依の心有べしとも見えざりけるが。をのく掌を合せて皆念佛う

け奉りてけり。他所より召請し奉りけれども。いたはりにかがあるべきと見え給へるに。結願の朝より。其なごりもなく。本に復して出給ひにけり。是につけても人あやしみあへりけり。

繪

同八年五月上旬に。丹後の久美の濱にて念佛申たまひけるに。龍波の中より出現したりけり。聖の外は時衆嘆阿彌陀佛。結縁衆高畑の入道といふ者を見ると。云々夫より他所へ移り給ける道にて。沖のかたを見給て。只今の龍の供養をなさんとするぞ。供養には水を用る事なり。たゞぬれよとの給ければ。やがて雨ふり雷鳴て。人皆ぬれにけり。又同年但馬のくに久美といふ所にて。海より一町あまりのきて。道場をつくりたりけるに。沖のかたより電のするを見給て。龍王の結縁に来るぞとのたまひて。日中をはじめ給に。風雨雷電し。波あらくしほさして。屋場にみちいる行道しける人のものなどまでひたりに

けり。道具とりのけなどしければ。聖制して皆ぬれ／＼行道す。行法をはりければ。しほ本のごとくなりぬ。年來しほのいる事もなき所なれば。人あやしむ事かぎりなし。千觀内供法を修し給し座には。金龍かたちをあらはして甘雨をくだし。法然上人戒を説給し砌には。青龍身を化して瑞雲にのぼりき。いはんや念佛の入門は。利益末法に普くして。五趣ひとしく歸する事を。三塗動苦の中にして。このひかりあふ者はかならず解脱をかうふる。龍神の影向かた／＼其ゆへはべりけるにや。

はきものゝあとをしるべとつたねつゝ

いつかまいらん彌陀の淨土に

聖つたねつゝはめづらしき言。ものぐさは又ありが

たき志なり。返事せんとして。

はきものゝものくさけには見ゆれとも

いそ／＼とこそみちひきはせめ

又或人の笠をきたるを制せられてとがめければ。

ひらくへきこゝろの花のみの爲に

つほみかささることをこそいへ

又或人かきのはかまを袈裟の爲にとて奉りければ。

袈裟のちにをくれはやかて柿はかま

しふのてしともたのみけるかな

伯耆國逢坂と申所にて。雪の中にひとり埋れたまひて。

つまはつめとまらぬ年もふる雪に

さえのこるへきわか身ならねは

繪

美作國一宮にまうで給けるに。穢たるものも侍らむとて。樓門のほかにをどり屋をつくりてをき奉りけり。それをたちて金森と申所におはしたりけるに。

かの社の一の禰宜。夢に見るやう。一遍房を今一度請ぜよ聽聞せむとしめし給。又御殿の後の山のおびたしく鳴動しけるを。なに事ぞとへば。大明神は法性の宮におはしましけるが。御聽聞にいらせ給なりといふ。又御殿の下には大蛇共數をしらずありと見てさめぬ。此ゆへにかさねて召請しありて。此たびは非人をば門外にをきて。聖時衆等をば拜殿にいれ奉る。時にみごくの笠おびただしくほへて二三町ばかりきこゆ。宮づかさ不思議のおもひをして。みこをめしてうらなはするに。此聖を供養せんとおもふ。此釜にて粥をして奉れと御託宣ありけり。すなはちかゆをして供養し奉りければ。かまやがてほへやみにけり。

繪

北國をまはりて。弘安九年天王寺へ參給。かの折ふし。毎日に出し奉り御舍利壺のうちにとどまりて出給はぬ事累日になりけるを。執行申旨ありければ。

聖七日祈禱して出し奉るに。三粒の御舍利悉出現し給へり。常住の僧侶。奇異のおもひをなし。參詣の尊卑渴仰の信をいたせり。かくて參籠日數をかさねたまふ間に。或時は瑞華風にみだれ。或時は靈雲空にたなびく。凡奇特多しといへども。くはしくしるすにおよばず。

繪

天王寺を出。住吉にまうで給に。社壇のやう神さびて。千木形祖木の宮づくり。松風浦浪の音までも心すみて。異敵を伏せんが爲に面を三韓にむかへ。戰場になぞらへて社を四重にかまへたまへることがら。いとたふとはべりければ。ことに法施を手向く。是より又和泉國へ移りたまひけるとて。

津のくにのなにはの浦を出しより

よしあしもなき里にこそすめ

打なひく一本すすきほのほのと

見たかへてこそよしあしといへ

さて太子の御墓に参りて三七日參籠し給ふ第三日中の後。御廟を拜し給時。奇瑞ありければ他阿彌陀佛一人に示して。かさねて日中の禮讚を勤行し給。後に住侶宗圓。豪海兩阿闍梨。天王寺に参りて。此事を聖にとひ奉りければ。事のやうをかたり給て。此事不信のともがらありて疑謗をなさば。中中よしなるべし。たとひ後記にはとどむとも。披露は有べからずと仰られけり。高野大師の御記云。

西土之三尊。垂權跡於馬臺。東家之四輩。成菩提於安樂。

とはべる事もひあはせられ侍けり。聖一面の鏡を奉り給。今に太子の御帳のうしろにかけられたり。起信論には鏡をもて四種の大義をあらはし。弘決の中には鏡をもて一乘の全喻とせり。又密經には鏡をもて觀音の三昧耶形とす。觀經には鏡をもて佛力觀成の密意を示す。定て深き心はべりけらし。太子の御廟より當麻寺へ参りたまふ。此寺は天平寶字七年

に彌陀觀音化現して。連の絲にて織たまへる極樂の曼荼羅安置の勝地なり。彼偈頌云。

往昔迦葉說法所 今來法喜作佛事

鄉戀西方故我來 一入是場永離苦文

まことにありがたき靈地にこそはべれ。されば平家南都をせめける時。當寺の講堂皆おなじく焼はらひけるに。曼荼羅堂一字のこれり。あやしみて是を見るに。櫓の雫したたりて。砌をうるほせり。法雨くだりてそそぎけるにやと。不思議なりし事なり。聖參籠の間。寺僧寺の重寶稱讚淨土經一卷を奉りけり。此經は本願中將の妃の自筆の千卷の内なり。かの人には勢至菩薩の化身と申説も侍れば。かたがた重物なりとく。祕藏して持給たりけるを。最後の時書籍等やき給し時。書寫山の住侶に付屬し給き。此靈場にして書たまへる誓文云。

我弟子等 願從今身 盡未來際
不惜身命 歸入本願 畢命爲期

一向稱名	不說善惡	不行善惡
如此行人	依本願故	阿彌陀佛
觀音勢至	五五菩薩	無數聖衆
六方恆沙	證誠諸佛	晝夜六時
相續無間	如影隨形	無暫離時
慈悲護念	令心不亂	不受橫病
不遇橫死	身無苦痛	心不錯亂
心身安樂	如入禪定	命斷須臾
聖衆來迎	乘佛本願	往生極樂

繪

一遍聖繪第九

弘安九年冬のころ。八幡宮に参じたまふ。大菩薩御託宣文云。

往昔出家名法藏。得名報身住淨土。

今來娑婆世界中。即爲護念念佛人。文

同御詠云

極樂にまいらむとおもふころにて

南無阿彌陀佛といふを三心

因位の悲願。果後の方便。ことごとく佛の衆生のためならずといふ事なし。しかれば金方刹の月をあふがむ人は。かうべを南山の廟にかたふけ。石清水の流をくまんたぐひは。心を西土の教にかけざらんや。それより淀の上野と申所におはしましし時。大炊御門卿の二品禪門。うちを持たまひたりけるを。柄のいさゝかけがれてはべりけるを。心にかゝりておもひ給けれども。持ておはしたりけるに。聖打見給

ひて何といふ言なく。扇をこひて小刀にて柄をけづりて。かへしたまひたりけり。

繪

又天王寺にして。歳末の別時をはじめたまふ。凡別行のときは時衆の過現の業報を知見し。信心の淺深をかが見給ふ事はべりき。過去の事は人しらずといへども。今生のしわざもたがふ事はべらず。かゝりし程に。聖いかがおもひたまひけん。かやうの事其詮なしとて。其別時よりは無言にて行じ給けり。しかるに。丹波の國に山内入道と申者。善光寺へまうでひとて出立けるが。夢想より善光寺の如來の。我は一遍房がもとにあるなり。志あらばそれへまいれと語させ給を妄想にてもやあるらむとて。なをまいらんとしけるに。かさねて靈夢ありければ。聖のもとにまいりて。歸依し奉り。今は弓箭等を帶すまじき由を申て。常に隨逐し奉りしが。此別時に参りたりけるに。聖の給はく。今はかやうの事はいはねど

も。いかに入道は兵具を身にしたがふまじきよし申ながら。又もつぞとの給ふ。入道さる事候ずと申けるに。正しくさるうつば。しかくの弓と手鉾と化現せり。いかにとおほせられける時。當座に懺悔して下人等があなずり候間。方便に持て候なりと申て。さるうつばと弓と手鉾とをとり出てやさすてつ。刀のありけるをば。なを大切におもひて。かくして持たるに。又聖の給はく。四寸ばかりなる刀を持たるをばなどかくすぞ。不當の入道かな。たゞ今地獄にをちなんずと教誡したまひければ。なくくとり出してありてすてけり。其後はいよく信仰のおもひふかくして。最後のたび。四國までつき奉りて。伊豫の窪寺と申所にて。つゝに往生を遂はべりぬ。又世中の勝事。人のりんじうのさた。かねてのたまひをく事少もたがはざりき。城の禪門の亡ける日は。聖因幡國におはしけるが。空を見たまひて。鎌倉におほきなる人の損ずるとおぼゆるぞとのたまひけ

り。天王寺に如一人と申聖おはしき。もとは佛法上人の門下にして。禪門の工夫。年序つもり給けるが。後に西山の上人にあひたてまつりて。一向専修の門にいり給へり。此聖と相たがひに志あさからぬ中にておはしまししが。廿八日のあした聖の道場におはして。對面し給てかへりてのたまひけるは。けふいなばやおもへども。このひじりの別行にてあるに。心しづかに結願せせんとおもふなりとて。いとわづらふ事もなくて。朔日の曙に頭北面西にて往生したまひぬ。かねてりんじうの事を人の問たてまつりければ。父のやうにてこそまからんずらめとの給けるに。父はたれ人にておはしますぞと申ければ。三衆界生悉是吾子ととかるれば。釋迦佛ぞかしとの給けるにたがはず。涅槃像のごとくしてをはりたまへり。聖は別時結願してとのかたを見出して。如一房の往生したるとおぼゆるゆきてきけとて人をつかはしければ。りんじうの所よりはこの事聖に告

奉らむとて。人はしり参けるに。道にてゆきちがひたりけり。たがひに皆しりたまひたりけるにこそ。やがておはして見給て。誠によし法師もかくこそあらむずれとのたまひて。手ずから葬送したまひけり。年月こそかはるといへども。聖のりんじうも廿二日にてはべるべかりしを。事のゆへありて廿三日のあかつきにのべられき。りんじうの體もすこしもかはらず。同生のちぎりひとつなりといへども。かゝるためしはありがたき事なり。

繪

さて天王寺をたちて播磨のかたへおはしけるに。尼崎にて土御門内府于時をくりたまひける。

なかきよのねふりもすてにさめぬなり

六字の御名のいまのひとこゑ

聖

なかきよもゆめもあとなし六の字の

名のるはかりそいましひとこゑ

或時よみたまひける歌

わかとおもふひとのこゝろにひかれつゝ

をのれとおふるくさ木たになし

おもふことなくてすきにしむかしさへ

しのへはいまのなけきとそなる

我見はや見はや見はや色はいろ

いろめくいろはいろそいろめく

兵庫におはしましけるとき。光明福寺方丈。

いつまてか出入いきをたよりにて

彌陀の御のりのかせをつたへん

聖

いつまても出いる人のいきあらは

彌陀の御のりのかせはたえせし

同九年に印南野の教信寺にまいりたまふ。本願上人の練行の古跡なつかしく思ひ給ながら。やがて通り給べきにてはべりけるに。いかなる事かありけん。教信上人のとどめ給ふとて。一夜とどまり給。人あ

やしみをなし侍りけり。

繪

弘安十年の春。播磨の國書寫山に參詣し給。この寺の縁起云。大聖文殊異僧に化現して。性空上人誘云。山名書寫。鷲頭分土。峰號一乘。鷄足送雲。踏此山者發菩提心。攀此峰者清六情根。云云。又天人紅櫻の木を禮して唱偈。

稽首生木如意輪 能滿有情福壽願

亦滿往生極樂願 百俱底心所念

誠にこれ一乘純熟の勝地。六根清淨の靈場なり。聖渴仰のあまり。本尊を拜し奉るべき所望ありけるに。久修練行の常住僧の外。餘人すべてこれを拜し奉る事なし。後白河法皇。承安四年に七日御參籠の時。本尊并香水の巖峴觀覽ありしほかは。尊貴高德を論ぜず。曾其例なきよし。高僧申ければ。ひじり冥慮をあふぎ。祈請をいたして。四句の偈一首の歌を奉り給ふ。其詞云。

書寫即是解脫山 八葉妙法心蓮故

性空即是涅槃聖 六字寶號無生故

かさうつす山は高ねの空にさえて

ふてもをよはぬ月をすみける

本尊納受し給けるにや。寺僧ことさら評定して。此聖の事は他にことなり。所望もだしがたしとてゆるし奉りければ。紙燭さしてひとり内陣にいり給。本尊等を拜し奉り。落涙して出給けり。人皆あくゆかしくどもひはべりける。聖の給ひけるは。上人の佛法修行の靈德。言葉も及びがたし。諸國遊行のあもひいて。たゞ當山巡禮にありとて。一夜行法して。あくれば御山を出給けるに。春の雪おもしろくふりはべりければ。

世にふれはやかてきえゆくあは雪の

身にしられたるはるの空かな

この山を出て。なを國中を巡禮し給ひ。松原とて八幡大菩薩の御垂跡の地のありけるにて。念佛の和讃

をつくりて時衆にあたへたまひけり。

身を觀ずれば水のあは

きえぬる後は人ぞなき

いのちをおもへば月のかけ

出入いきにぞとどまらぬ

人天善處のかたちは

おしめども皆とどまらず

地獄鬼畜の苦しみは

いとへどもまた受やすし

眼のまへのかたちは

目しひて見ゆる色もなし

耳のほとりの言の葉は

耳しひてきくこえぞなき

香をかぎ味なむる事

たゞしばらくの程ぞかし

息のあやつり絶ぬれば

この身にのこる功能なし

過去遠々のむかしより

今日今時にいたるまで

思と思ふことはみな

かなはねばこそ悲けれ

聖道淨土の法門を

さとりと悟る人はみな

生死の妄念つきずして

輪廻の業とぞ成にける

善惡不二の道理には

そむき果たる心にて

邪正一如とおもひなす

冥の智見ぞ恥かしき

煩惱すなはち菩提ぞと

いひて罪をば造れども

生死すなはち涅槃とは

さげども命を惜かな

自性清淨法身は

如々常住の佛なり

迷ひも悟もなき故に

しるもしらぬも益ぞなき

萬行圓備の報身は

理智冥合の佛なり

境智二つもなき故に

心念口稱に益ぞなき

斷惡修善の應身は

隨緣治病の佛なり

十惡五遮の罪人に

無緣出離の益ぞなき

名號酬因の報身は

凡夫出離の佛なり

十方衆生の願なれば

ひとりももるゝ科ぞなき

別願越世の名號は

他力不思議の力にて

口にまかせて唱ふれば

聲に生死の罪さえぬ

初の一念よりほりかに

最後の十念なけれども

思をかさねてはじめとし

思のつくるを終とす

おもひつきなんその後

はじめをはりはなけれども

佛も衆生もひとつにて

南無阿彌陀佛とぞ申べき

はやく萬事をなげすて

一心に彌陀を頼みつゝ

南無阿彌陀佛と息絶る

これぞ思のかぎりなる

この時極樂世界より

彌陀觀音大勢至

無數恆沙の大聖衆

行者の前に顯現し
一時に御手を授けつゝ、

來迎引接たれ給ふ

繪

一遍聖繪第十

弘安十年。備中の國輕部の宿と申所にをはしけるに。
花のものと教願。四十八日結縁せむと申てしつき奉
りはべりけるが。日數みちければむかへの人なんど
くだりたりけるに。ありふしわづらふ事ありければ。
むかへをばかへして。一すぢにりんじうの用
心にてぞはべりける。病中に冷水に有曙アサトケの月をいれ
てのまばやとねがひものにしてはべりけるこそ。や
さしくはべれ。りんじうちかくなりて。聖に奉りけ
る歌。

とにかくにまよふころのしるへせよ

いかにとなへてすてぬちかひそ

聖

とにかくにまよふころのしるへには

なもあみたふと申はかりそ

知識の教のごとく。りんじう正念にして往生をとげ

にけり。花のもと月の前の昔のたはふれまでも。寶
樹蓮臺の今の縁となりはべりけるにや。同年の春。
十二道具の持文をかきたまふ。

南無阿彌陀佛第一遍當信用十二道具心

一 引入

南無阿彌陀佛無量生命名號法器心是則無量光佛德也

一 箸筒

南無阿彌陀佛無邊功德入衆生心心是則無邊光佛德也

一 阿彌衣

南無阿彌陀佛善惡同攝彌陀本願心是即無礙光佛德也

一 袈裟

南無阿彌陀佛除苦惱法無邊名號心是則無對光佛德也

一 帷

南無阿彌陀佛火變成風化佛來現心是則炎王光佛德也

一 手巾

南無阿彌陀佛一念彌陀即滅多罪心是即清淨光佛德也

一 帶

南無阿彌陀佛惠光圓鏡照行者身心是即歡喜光佛德也

一 紙衣

南無阿彌陀佛行住坐臥念念臨終心是則智慧光佛德也

一 念珠

南無阿彌陀佛畢命爲期念念稱名心是則不斷光佛德也

一 衣

南無阿彌陀佛是人人中芬陀利華心是則難思光佛德也

一 足駄

南無阿彌陀佛最下凡夫乘最上願心是則無稱光佛德也

一 頭巾

南無阿彌陀佛諸佛密意諸教最頂心是則超日月光佛德也

本願名號中有衆生信德衆生信心上顯十二光

德他力不思議凡夫難思量仰唱彌陀名號蒙十

二光益

南無阿彌陀佛一切衆生往生極樂

弘安十年三月一日

一遍

此行儀は徒衆引具したまへるはしめよりさだめられ

けり。時衆も番帳には僧衆四十八人。尼衆四十八人。其ほかの四部の衆は數を知らず。又十二光の箱をつくりて。道具をいれ給ひき。四接法をもて機に應じてたはふれなどしたまひしかども。度を失し禮をたがふる事はなかりき。たゞししりて信ずるともがらもあり。しらすで誘するたぐひもあり。信誘ともに益を得は。大乘の源意なれば。みな度生の因縁ならずといふ事なかるべし。

繪

同年備後の一宮にて。聖人供養の爲とて。秦皇破陣樂といふ舞を奏しけり。彼所にはつねさまには舞ざる曲なりとぞ申侍ける。此曲は唐太宗の製せられたる四破陣樂の其一なり。聖人の作なれば。其ゆへもや侍らむ。又同年の秋。安藝の嚴島にまうで給ふ。内侍等歸敬し奉りて。臨時のまいりををこなひて。妓女の舞を奏しけり。

繪

正應元戊子年。伊豫へわたり給て。菅生岩屋巡禮し。繁多寺にうつり給。當寺は昔當國刺史賴義朝臣。天下泰平衆生利益の爲にとて。國中に七ヶ寺を建られたける其一也。本佛は醫王善逝なり。効驗誠にあらたかなり。聖三ヶ日參籠して。三部經を奉納し給ふ。

此經は親父如佛多年の持經として。西山上人。華臺上人の座下にして訓點まのあたりけり。讀誦功をつむ間。相傳の後祕藏して所持し給へるを。末代利益の爲にとて施入し給ふなりけり。表紙の上自筆 名號書給云云 同十二月十六日に。三島に參詣し給。垂跡の濫觴を尋ねれば。文武天皇の御宇。大寶三年癸卯三月廿三日あ

とをたれ給。依一それよりこのかた。五百餘廻の風曆をかさねて。八十餘代の龍圖をまほりまします不老不死の妙法をかたどりて。迹を三の島にたれ。實修實成の壽量をしめして。嶺を靈山と名く。山高くそびけて。無上高妙の大智を表し。海ふかく湛て。弘誓深重の大悲を顯はす。聖の曩祖越智益躬は。當社

の氏人なり。幼稚の年より衰老の日にいたるまで。朝廷につかへては三略の武勇を事とし。私門にかへりては。九品の淨業をつとめとす。鬢髪をそらざれども。法名をつき。十戒をうけき。終に臨終正念にして。往生をとげ。音樂空にきこえて尊卑庭にあつまる。かるがゆへに。名を往生傳にあらはし。譽を子孫の家によぼす。又祖父通信は。神の精氣をうけて。しかも其氏人となれり。參社のたびにはまのあたり神體を拜し。戰場の間にはかねて雌雄をしまし給き。これによりて聖道世修行の庭に出給へりといへども。垂跡の本地をあふぎて法施奉り給てかへりたりけるに。同二年正月廿四日。供僧長觀に夢想の告あり。大明神とおぼえさせ給て。束帯にて御寶殿の正面の廣椽に西むきにたゝせ給て。おぼせられけるは。いにしへは書寫の上人。此處にまうで、説戒ありしによりて。鹿の鬘をとゞめをはりぬ。今一遍上人參詣して。櫻會の日。大行道にたち。大念

佛を申。此所にして衆生を濟度せしめむとするなり。是に値遇合力せざらん輩は後悔あるべしと。云云又同廿七日。地頭代平忠康示現をかうぶる詞。大略これに同じ。其ほかの夢想をかうぶるものあまたありけり。聖を召請せよとしめされけるに。僧供のなきよしを申ければ。櫻會の料物もちて供養すべし。それかなはずば太刀をうれなどくはしくしめさせ給けるによりて。同二月五日召請し奉る。よて同六日參詣し給。御縁日たるによりて。同九日櫻會をおこなふ。大行道の最中に。御寶殿のうしろにして。聖昔大明神とあらはれ給し山を見あげて。一遍をばなへの要にめしたるどとともひたれば。贊をとゞめさせん爲にてありけり。元三霜月の經營。魚鳥をとゞむべし。此ほか夢想にしめされける事ども。いまだなき給はざるに。聖の詞一もたがはず。人皆申けるはむかしをおもへば。永觀二年に。叡山の湛延。ならびに性空上人相ともに參詣し給て。七日説戒し。

不殺生成を授奉られしとき。御寶殿震動して。隨喜隨言不殺と唱給御音有き。それよりこのかた。恆例の贊をとゞめ給て。佛經供養をおこなはるゝ所なり。いままた靈夢の告。昔にかはらず。感應のおもむきあらたなるうへはとてまいりあへる。神官國中の頭人等已上廿七人。夢の告ならびに聖のをしへにまかせて。制文をかきて連判をくはへて。記録にそなへ畢ぬ。

繪

一遍聖繪第十一

正應二年。讚岐の國にこえて。善通寺曼陀羅寺巡禮し給て。阿波の國にうつり給。聖いかと思ひ給けむ。機縁すでにうすくなり。人教誡をもちひず。生涯いづくばくならず。死期ちかきありとの給けるを。人々あやしみおもひけるに。いくほどなくして。大鳥の里河邊といふ所にて。六日一日より心神例に違し。寢食常ならずおはしましけるに。

おもふこと皆つきはてぬうしとみし

よをはさなからあきのはつかせ

此詠につきて。時衆ならびに參詣の人々も。心ぼそくぞぼえける。しかるに病惱は日をかさねて増るといへども。行儀は時をひてさらにかはる事なし。七月の初に。阿波の國をたちて。淡治の福良の泊に移り給とて。詠じたまふ。

きえやすさいのちはみつのあはらしま

山の端なから月そさひしき

あるしなき彌陀の御名にそ生れける

となへすてたるあとのひとこゑ

當國に二の宮とて。往古の神明まします。靈威あらたかにて。賞罰はなはだし。本は西むきにましますけるが。海上にすぐる船人等あろかにして。禮なければ。たゝりをなし給ふによりて。南むきになし奉れりけり。縁起傳はらざれば。垂跡のをこりたしかならず。本地の春の朝に尋ねれば。松柏蕭澹としてものいはず。和光を秋の月にとふらへば。雲雨渺茫として定がたし。祝部わづかに傳へて。伊弉册尊にておはしますとぞ申ける。聖おほせられけるは。出離生死をばかゝる神明に祈り申べきなり。世たゞしく人直なりし時。勸請し奉りしゆへに。本地の眞門動く事なく。利生の悲願あらたなるものなりと。さて聖社の正面に札をうち給へり。

名にかなふこゝろはにしにうつせみの

もぬけはてたるこゑをすしき

聖戒。淡州修行の時も。此札なをはべりき。かのいはほのうへに。うつしをかれけん半偈の文も。かくやとおぼえて感涙をさへがたかりき。

繪

同國志津幾といふ所に小野の天神を勸請し奉れる地あり。聖をいれ奉らざりけるに。

世にいづることもまれなる月影に

かゝりやすらんみねのうさくも

といふ歌社壇に現じたりければ。このゆへにやいそぎいれ奉りぬ。聖ことに信敬の掌をあはせて。法施奉られけり。凡天神は西土補助の薩埵として。蓮臺を迎接の砌にかたふけ。東域垂權の明神として。華夷を安寧の世にまほり給。現當の利益ならびなければ。尊卑の歸依たゆる事なし。仁和寺の西念。臨終の事を熊野に祈申けるにも。小野に申べきよし示現ありけり。されば此神はかりに左遷の名をのこして。

濁世末代の人をたすけ給のみにあらず。ことに終焉の障をのぞきて。淨土無生の門をひらきましますにこそ。託宣のをもむき。まことにゆへなきにはあらざるべし。

繪

其後なをなやみながら。こゝかしこすしめありき給けるに。みちのほとり。つかのかたはらに。身をやすめたまひて。詠じたまひける。

旅ころも木のねかやのねいつくにか

身のすてられぬところあるへき

此國はさかひせばくして。往反のともがらもいくばくならず。結縁のものなをすくなしとて。七月十八日に明石の浦に渡り給。をのく洲蘆の夜雨に涙をあらそひ。岸柳の秋風に情をもよほさずといふことなし。漁翁釣をたれて生死の海に身を苦しめ。遊女掉をうつして癡愛の浪にわかれをしたふさたまで。生者必滅のことはりをしめし。會者定離のなら

ひをぞあらはし侍りける。さて兵庫の島より御むかへに船を奉りたりければ。印南野の邊にて。りんじうすべき由おもひつれども。いづくも利益の爲なれば。進退縁にまかすべしとて。兵庫へ渡りて。觀音堂にぞ宿し給ひける。

繪

八月二日。聖繩床に坐し。南にむきて法談し給事ありき。巽の方に因幡の蓮智上人。南に兵庫光明福寺方丈坐せらる。其外道俗敷をしらず。聽聞す。右のわきに聖戒が侍りしに。筆をとらせて法門をしるさせ給ふ。清書してよみあげはべるに。かさねておほせらるゝやう。我りんじうの後。身をなぐるものあるべし。安心定りなば。なにとあらむも相違あるべからずといへども。我執つきずしてはしかるべからざる事なり。うけがたき佛道の人身をむなくすてむ事あさましき事なりとて。落涙し給て。是をかきをくも。この爲なり。よくく用意あるべしとて。

十二光の箱におさめられき。其時因幡の聖。衆中を見廻して。此事人々能く御存知候へとて。感歎にたへず。同じく悲涙をながし給き。かの遺誠詞云々。

五蘊の中に衆生をやまする病なし。四大の中に衆生をなやます煩惱なし。但本性の一念にそむきて五欲を家とし。三毒を食として。三惡道の苦患をうくる事。自業自得果の道理なり。しかあればみづから一念發心せずよりほかに。三世諸佛の慈悲もすくふ事あたはざるものなり。云々

同十日の朝。もち給へる經。少々書寫山の寺僧の侍りしに渡し給ふ。常にわが化導は一期ばかりぞとの給ひしが。所持の書籍等。阿彌陀經をよみて手づから焼給ひしかば。傳法に人なくして。師と共に滅しぬるかともことになしおぼえしに。一代聖教皆つきて南無阿彌陀佛になりはてぬとの給ひしは。世尊說法時將了。殷懃付屬彌陀名の心にて。五濁増時多疑謗。道俗相嫌不用聞とあれば。能々しめし給し

にこそ。夫八萬の正教は有流の見解を治し。五智の名號は果海の本源をしめす。此故に釋尊無際慈悲。三寶の滅時に念佛をとめて。難思の密意をさづけ給ける。雙樹林下の往生樂もかくやとおもひ出られ。あはれもつきせずなごりもやるかたなかりしありさまなり。同十二日より。番にむすびて十五日まで面々各々に隨逐給仕し奉るに。ひじりの給はく。志のゆく所なれば。皆ちかづきぬ。結縁は在家の人こそ大切なれば。今日より要にしたがひて近習すべし。看病のために相阿彌陀佛。一阿彌陀佛。ちかくあるべし。また一遍と聖戒とが中に。人居へだつる事なかれとの給。他阿彌陀佛は。一化の間かはる事なき調聲にて侍りしうへ。ありふしわづらひありしに。聖いたはるべしと仰せられしかば。本座をさらずして居たまひき。それを始として。時衆は此内陣に坐す。但爾阿彌陀佛。他阿彌陀佛等四五人は。時にしたがひて御そばに伺候ありき。

一遍聖繪第十二

正應二年八月九日より十日。紫雲の立侍るを其由申しかば。さては今明は臨終の期にあらざるべし。終焉の時はかやうの事はゆめ／＼あるまじき事なりとおほせられしにたがはず。其後はさやうの瑞相もなかりき。故人の筆に諸天無語捧華。鷹外不見行蹤不見是真出家とかゝれたるも。此ことはりなるべし。聖の常の教誡には。もの／＼おぼえぬものは。天魔心とて變化に心をうつして。眞の佛法をば信ぜぬなり。なにも詮なし。唯南無阿彌陀佛なりとぞはべりし。まことにかの瑞華も紫雲も。出離の詮にはたぬ事であらはして。まことときは見えざりき。過去をしろも未來をしろも。因分の智慧は要なきものにこそ。聖歌云。

阿彌陀とはまよひさとりのみちたえて
たゞ名にかよふいきほとけなり

南無阿彌陀佛の御名のいつるいき

いらはちすの身とそなるへき

十七日の酉時ばかり。すでに御りんじうとて人々さはぎあへり。聖西にむきて合掌して念佛し給。しばらくありて。十念唱へ給。其時。聖戒はあからさまに濱に出て侍しが。すでに御りんじうと申あひたりし程に。いそぎまいりたりしかども。人あまた中にへだりて。はるかにとをく見奉るに。聖よび給しかば。人をはけて参りたれば。かくて存せる事。自の爲他の爲。其詮なければ。りんじうして見れば。其期いまだいたらず。たゞ報命にまかすべきか。又しるてりんじうすべきかとの給。御返事にかくて御座候こそ。御利益にて候へ。御報命を機縁にまかせらるべきかと申侍りしに。光明福寺方丈。内陣に居給ひたりしが。まことにかくてはいつまでも御わたり候へとこそ。人々もおもひ給らめ。又是に過たる御利益やははべるべきと。詞をくはへたまひしかば。

さらばとて。本のごとく居なをり給ぬ。

繪

十八日の朝。聖戒をよび給て。我目を見よ。あかきものやあるとおほせらる。見奉るに。赤筋有。すなはちある由を申に。其すぢうせんときを最後とおもふべしと。云云。廿一日の日の中の後の庭のをどり念佛のとき。彌阿彌陀佛。聖戒参りたれば時衆皆垢離かきて。阿彌ぎぬきて來るべき由おほせらるゝとき。時衆は庭にをどる由申せば。さらばよくをどらせよと仰せらる。念佛はて、皆参りて後。結縁衆をのけて門弟ばかり前後に坐せしめ。頭北面西にして念佛し給ふとき。道俗おほくあつまりて。堂上堂下さはがしき事かぎりなかりしかば。今にてはなきぞとて。人をのけよとの給ふ。他阿彌陀佛。其由をふれめぐれども。人あへてしづまらず。さらばとて時衆をものけ。座席をもなをして。本のごとくなをり給たりしかば。皆しづまれり。又在地人に中務入道と申も

の参りて。今日は西の宮の御祭にて候。在地の者ども御行に参る事にて候が。今日御りんじうにて候はゞ。御行にははづれ候べし。いかゞ仕候べきと申ければ。聖さらば今日はのべこそせめとおほせらるゝ。又日中已後。しばしまどろみたまひたりしが。おどろきてたゞ今西の宮の大明神の最後の結縁せんとしておはしまして。おどろかせ給ひつるとかたり給ふ程に。西の宮の神主参りて申やう。去年西の宮に御参詣の時より。知識とたのみまいらせて候が。御りんじうの由うけ給り候て。おがみ奉り十念うけ参らせむと存候て。神明の祭禮。最後の御供と存じて候つるが。わざと御行よりさきにまいりて候なりと申を。聖さゝ給てなげしの上へと召請し給に。神主かしてまりて侍るを存するむねあり。上へのぼりたまへ。しからずば十念をばさづけ申まじきぞとおほせられしかば。上へのぼりて十念うけ奉りき。かずとりをさづけ給しかば。給はりていそぎかへりぬ。ゆへあ

る事もやはべりけむ。人に十念さづけ給事。これ最後なり。されば縁謝即滅の始。利生方便の終とて。神もなごりをおしみ給けるにこそ。六十萬人の融通念佛は。同日播磨の淡河殿と申す女房まいりてうけ奉りしぞ。かぎりにてはべりし。凡十六年が間。目錄にいる人数二十五億一千七百廿四人なり。其餘の結縁衆は齡須もかぞへがたく。竹帛もしるしがたきものなり。

繪

三日に一度かき給垢離を。廿日より廿二日にいたるまで。三日つゞけてかき給しかば。化をととめ給ふべき事うたがひなくおもひさだめて。もとは御枕のかたに給仕して侍が。最後の夜は正面にむかひ奉りて。いさゝかも目をはなち奉らず。于時春秋五十一。八月廿三日の辰のはじめ。晨朝の禮讚の懺悔の歸三寶の程に。出入のいさかよひ給も見えず。禪定に入がごとくして往生し給ぬ。眼の中さはやかに。

あかきものもなし。かねておほせられしにすこしもたがはざるゆへに。これを最後のきざみとするばかりなり。かねてりんじうの事をうかゞひ奉る人のありしかば。よき武士と道者とは死するさまをあだにしらせぬ事ぞ。我おはらむをば人しるまじきぞとの給しを。うたがひをなすともがらも侍しに。はたしてをはりたがふ事なかりき。このほか病中に不思議おほしといへども。事しけき故にこれを記せず。勢至菩薩の化身にておはしますよし。夢想どもあまたはべりしに。廿三日にしもをはりたまひぬるは。あやしき事なれども。いさゝかの靈瑞もある人をば。権者と申す事は。其詮なき事なり。さても八月遺誠のごとく。時衆ならびに結縁衆の中に。前の海に身をなぐる者七人なり。身をすてゝ知識をしたふ志。半座のちぎり。同生の縁。豈むなしからむや。はるかに釋尊の涅槃をおもへば。身子目連は悲歎して雙林の庭にささだち。阿難羅云は憂惱して舍維の砌に

とどまりき。賢聖なをしかなり。いはんや凡夫をや。たゞ闇に燈を消し。渡りに舟をうしなへるが如し。没後の事は我門弟にをきては。葬禮の儀式をとゝのふべからず。野にすてゝけだものほどこすべし。但在家のもの。結縁の志をいたさむをばいろふにおよばずと申されしに。在地人等まいりて。御孝養し奉るべき由申しかば。遺命にまかせて。是をゆるしつ。よりにて觀音寺の前の松のもとにて茶毘し奉りて。在家のともがら墓所莊嚴したてまつりけり。かの五十一年の法林。すでにつきて一千餘人の弟葉むなしくのこれり。恩顔かへらず。在世にことなるは四衆戀慕の涙。教誡ながくたえぬ。平生に同じきは六時念佛の音ばかりなり。緑樹ものいはざれども。秋の霜沙羅林の色をうつし。蒼海心なけれども。曉の波抜提河の聲を傳ふ。雙松に嵐を聞ても。たゞ非滅現滅の夕のけふりをうらみ。孤島に雲をのぞみても。はるかに上品上生の曉の月をしたふ。をのく南浮

の再會を期すれば。花の春にもあらず。月の秋にもあらず。たがひに西刹の同生をちぎりて。こゝにわかれ。かしこにわかれしころのうち。すべて詞のはしにも述べがたく。筆のあとにもしるしがたくこそ侍しが。まさにいま遺恩をになひて報謝しがたく。往事をかへり見て忘却する事をえず。しかるあひだ一人のすゝめによりて。この畫圖を寫し。一念の信を催さんがために。かの行狀をあらはせり。繪四十八段。をのづから六八の誓願を表す。卷一十二軸。是二六の妙體をかたどるなるべし。そもく古人いへる事あり。老莊之作。管孟之流。蓋以立意爲宗。不以能文爲本と。言辭足らずして耳にたのしひなしといへども。畫圖興をなさば。なんぞ目をよるこばしむるもてあそびとせざらむ。たゞこれ毀譽共に縁をむすび。存亡同じく益を施さんとなり。たとひ時うつり事去とも。いにしへを尋ね。あたらしきをしらば。百代の儀表。千載の領袖にあらざらん

かも。

繪

正安元年己亥八月廿三日

西方行人聖戒記之畢

書圖 法眼圓伊
外題三品經尹卿筆

都皇紫苔山河原院歡喜光寺藏板

安永五丙申歲秋天

寺町通四條上ノ處

著 屋 宗 八

寺町通六角下ノ處

著 屋 儀 兵 衛

書 肆

一遍上人繪詞傳直談鈔并叙

昔者我鼻祖一遍大士。遊化諸方。足跡殆遍天下。晚息錫于攝南兵庫觀音堂。無幾示滅於此。徒衆相共荼毘。收拾靈骨。藏諸堂側。建塔識之。又結一字於塔之左。奉安大士所手彫自肖像。香火供事。號爲西月山眞光寺焉。二祖他阿上人。繼踵於此。弘道布化。自時綿綿。四百餘年于今矣。寶永年間。嗣祖四十八世上人。遊化入寺。禮塔拜影。乃集各院。衆謂曰。此寺實係開山入寂之地。有墳塔焉。有影堂焉。誠一方望刹也。衆奉事豈有無狀。然而宜置監寺視之敬也。遂以其職命余。余辭讓不見。許遂來監焉。乃塔洒掃。乃影香火。三時禮懺。自修勸他。一日有清信士。來謂予曰。吾鄉民戶多隸名于此宗。是恐昔親稟開山教化者之末也。而祖師德業。寥無聞者。願大師對衆開示。俾以興起。固信增行。予曰。開山德業。誠盛大而非如予

一遍上人繪詞傳直談鈔并叙

廣學所得而敘悉。然世有圖記其化蹟者。名繪詞傳。請爲誦之。乃且開端而後。每衆參謁。遂段演義。觸而長之。引而證之。支詞蔓說。不知自抵。遂以徹尾。時有二三雜僧在側。隨聞隨筆。載盈卷軸。私題爲一遍上人繪詞傳直談鈔。輒奪之。梨。予聞之。嘆曰。噫。是一時偶語。豈可示諸大方。非獨取笑於識者。恐或傳誤於後。然而刊刻已成。勢不可止。因任其所爲。略書其由。與之冠首云。

于時正德四龍集甲午上陽二十三日

攝州兵庫津西月山眞光寺院代

嗣祖五九世弟子

賞 山 謹 書

一遍上人繪詞傳直談鈔卷之一目錄

- 一 一遍上人得名之事
- 二 上人名義之事
- 三 繪詞傳名義之事
- 四 天竺名義之事
- 五 後漢明帝之事
- 六 佛初渡漢土事
- 七 生死名義之事
- 八 福增比丘之事
- 九 外道涅槃名義之事
- 十 二種勝法之事
- 十一 聖淨二門名義之事
- 十二 娑婆名義之事
- 十三 下和之玉之事
- 十四 三密五相之事
- 十五 涅槃名義之事
- 十六 迦旃延外道十問答事
- 十七 無生法忍之事
- 十八 一心三觀之事
- 十九 大覺然上人之事

一遍上人繪詞傳直談鈔卷一

將解此傳大分爲三。一者釋題名。二者辨作者。三者入文解釋。初釋題名者。凡立題有多義。如涅槃經等約法立題。如阿彌陀經等約人立題。如百喻經等約喻立題。今此題者約人立題。言一遍上人繪詞傳也。一遍上人者。初在天台名隨緣。後歸淨土門號智真。今稱一遍上人。由熊野權現神勅。偈。自字一遍。播州問答序曰。一遍之號亦是神之勅也。謂神勅之偈曰。六字名號一遍法。十界依正一遍體。萬行難念一遍證。人中上妙好華。依此勅偈。自字一遍耳。已上三句號一遍。以下人中上妙好華句。稱上人也。凡述上人名義有多義。如摩訶般若經。不退轉菩薩名上人。經云。何名上人。佛言。若菩薩一心行阿耨菩提。心不散亂。是名上人。已上般若又律述。聞義改事名上人。南山業疏云。聞義改。即從諫如流。斯上人。四ノ上六紙又小乘

說改過名。上人。增一阿含經云。夫人處世。有過能自改者。名上人。已上又古師云。內有智德。外有勝行。在人之上。名上人。釋氏要覽上等。又總念佛行者。名上人。觀經云。若念佛者。當知此人。是人中分陀利華。已上散善義釋。此文云。言分陀利者。名人中好華。亦名希有華。亦名人中上上華。亦名人中妙好華。此華相傳名。蔡華是。若念佛者。即是人中好人。人中妙好人。人中上上人。人中希有人。人中最勝人也。已上今一遍稱上人者。以分陀利華之嘉名也。繪詞傳者。詞謂彩畫。是即彩畫。元祖上一世行狀也。世謂辭言。以其辭言而說之也。傳者。傳記。傳記其語也。次辨作者者。今此傳。二祖上人述作也。問曰。此傳是言二祖述作。何故傳。與書曰。弟子平宗俊。宿因多幸。而奉逢上人之濟度。得聞出離要法。思其恩德。高於天。厚於地。依自建長文永之往事。至永仁正安之行儀。圖師資之利益。備弟子之報謝。類集而爲十卷。殆揚十之一二等。云云。以之

思之。此傳見宗俊之作。如何。答。今案。宗俊。是明畫工。歟。故云。圖師資之利益。備弟子之報謝。況二祖真筆在於本山。不可疑之。次入文解釋者。就之。明。序正流通三段。初。自夫以西天黃老等。至先德遺誠。違故也。是序分也。自爰近來。一遍上人。至三國例證。非一誰不可爲疑者也。是正宗也。自抑弘安等已下。是流通分也。至分細科。向文可辨。凡此傳。爲全部十卷。所分三段。約全部十卷而述之也。於中。前四卷。明元祖行狀。後六卷。述二祖行狀。今此直談。述前四卷。元祖繪詞。而未解後六卷。二祖繪詞。若有餘命。追當解之。夫以西天黃老。教法。月氏。境。ヒロメ。東漢明帝。經典。京師。問傳。ヨリ以來。明佛教傳來也。○夫以者。此傳發語之辭。諸典之中。其例是多。竊以仰以尋以。伏以良以。晶以。倩以。益以。恒惟等。如斯類雖多。皆以發起詞也。起信論筆削記一卷六葉云。夫者發語之詞也。

已上以者玉爲也。古作目。彙以意也。○西天者。指天竺也。天竺又云印度。名義集三十紙云。印度者。西域記云。天竺稱異義糾紛。舊云身篤。或曰賢豆。今從正音。宜云印度。已上天竺國。此南瞻浮州。從中向北有三重黑山。於彼香山雪山黑山四邊下。各有一國。北面名胡。西名波至。東名震旦。南方天竺也。三界義二十五業。天竺有五。謂東天竺。西天竺。南天竺。北天竺。中天竺也。西域記二(二丁)今言西天。五天竺。中非西天竺。總天竺。震旦。西。故云西天也。○黃老者。釋尊事也。釋尊又云黃面老。或曰黃老子。器朴論上云。西土釋迦黃老子。時時所說經經旨矣。○教法者。一代八萬教法也。○月氏者。是亦天竺稱也。夫月氏者。一國別名。名義集三十業云。薄伽羅。應是月支。在雪山西北。或云月氏。已上是月氏。雖別國名。中古以月氏爲天竺。稱有師云。天竺亦名印度。月名復名月氏。頌義十三(十八)今爰言月氏。天竺稱可見之。但據實言之。唯可云月。名義集三十業

云。印度者。唐言月矣。釋迦牟尼如來出世。一代四十九年。在世說法三百餘會。隨機應類。說八萬四千法門。而普利益一切衆生。此教以弘宣。天竺國中。故云西天黃老。弘教法於月氏之境也。○東漢明帝者。唐十四代中第五代也。十四代者。夏殷周秦漢魏晉宋齊梁陳隋唐宋也。漢當第五。漢有前後。前漢云西漢。西方長安都。故後漢云東漢。東方洛陽都。故後漢云後漢。子孫合而十四代。第二顯宗皇帝。是曰後漢明帝也。○傳經典於京師之間者。典者經也。又常也。又法也。釋尊演說經文。總云經典也。依編年通論第一。東漢永平年中。顯宗明帝時。摩騰竺法蘭譯四十二章經。十地斷結經。佛本生經。法海藏經。佛本行經等五經。已上今經典者。非此五經。西土佛法。後漢明帝時。初渡漢土。故云東漢明帝傳經典於京師之間也。京師者。都事也。又都云長安。云洛陽事。是有東西二京時。西京云長安。東京洛陽也。埃十六今不分東西。爲云都。曰京師也。△後漢明帝永平七

甲子年。帝一夕夢。金人長丈六。紫金色。頂佩日輪。臂顯萬字。光明赫灼。飛來在殿前。云明日博問羣臣。曰。是何神異乎。爰傳教也。奏明帝言。案周書說。西域有得通人。是名佛。周昭王時。生穆王。時滅。滅時於此。方天曼地動。穆王此事。問羣臣。扈多臣也。奏曰。是西國聖人入滅驗也。千年後。彼教法此土。可來矣。穆王成奇特思。即此由勅。刻石埋南郊天祠前。今剋之。當千年。然階下。夢。必可佛教流布先兆矣。明帝信是。王遵奏暗秦景等。十八人遣天竺。尋訪佛法。逢迦葉摩騰竺法蘭。秦景傳明帝勅。因之請是。法師誓志佛道。不辭疲勞。即秦景共涉流砂。越葱嶺。綵畫釋迦立像佛舍利。四十二章經。十住斷結經等。負白馬而。永平十丁卯年十二月十三日。渡來漢朝洛陽。相當日本入王十一代垂仁天皇九十六丁卯年。佛滅後一千年也。明帝深崇敬。皇都西門外。建精舍。號白馬寺。迦葉摩騰竺法蘭二人。於白馬寺翻譯四十二章經等。是漢土三寶

流布始也。爰永平十四年正月一日。五岳。恒山嵩山衡山。岱山。華山也。諸道士等奉表云。摩騰將來經教。月氏風俗。西域淺教也。全非往昔已來此土崇敬風儀。都不可被崇仰矣。又聖人奏曰。此經教。天竺國王淨飯大王太子。一代教主釋迦大聖金言也。仰願天皇崇敬弘通。是後雖羣儀區。遂比西方威驗。分勝負而可判邪正矣。然問道士等大悅。彼等聰明利智。通力自在。或往水上如步陸地。或登空走不異平地。積薪烙火入其中。不燒。或陰入大地。人不知所在。頭上出火。足下出水。又足下出火。頭上出水。現大身現小身。降伏鬼神。陰覆日月。如此神變自在。見聞成不思議。實大聖崇程。摩騰云。如來金言。一毫不謬。佛法効驗。今正可顯勝利。云云。法蘭云。龍吟雲起。非蚯蚓所堪。虎嘯風生。非駝驢所及。云云。同正月十五日。明帝勅文武內外官人。可決真偽。宣下之。依諸人悉集白馬寺。邊諸道士等。於白馬寺南門外。道東立三高壇。置而

面道教。聖人於白馬寺南門西方立高座。安佛舍利。並佛經卷。至十五日朝。明帝白馬寺在臨幸而觀。覽。爰道士昇天步虛空。時聖人出風。即吹落。又聖人出火燭。而欲燒道士。道士虛空降雨滅焰。時道士現象王欲踏聖人。聖人現獅子追反象。聖人現大山。道士前。道士現力士。手持金剛杵欲打摧。聖人現那羅延身。忽追反力士。又道士現七日。於聖人上。急急欲照焦聖人。於此極炎難堪。其時二聖人向佛舍利祈念。於此舍利即飛騰虛空。放大光明照奪日輪。爰道士術計悉盡。見無爲方。爾時二聖人上虛空現十八變。還坐本處。時天雨妙花。妓樂響空中。見聞人驚耳目。此時道士重欲現神變。被奪佛舍利威光。本昇天者今不得上。本隱形者今不能隱。乃至入火入水。神變皆不能現。爾時道士奏白。庭上燒大火。聖人經教。道士典籍。以入火中。以不燒可爲真說。云云。聖人最可然。即兩方經書置火中。道士思此驗術。我

家最極秘法。此可顯驗德欣悅之處。道士書籍悉燒失。而聖人經卷歷然有於火中。道士見之。心神迷惑。顏色愁憂。時大會動搖拜經卷恭敬聖人。爾時明帝勅諸道士言。汝等所言悉虛妄邪義。所驗如此。不可證。早可歸西域真教。云云。其時道士等。兔角不能勅答。即南岳道士。褚善費叔二人。大生慚愧。深悲耻辱。衆中而食齒。留息死。畢。時明帝即從座起頂禮二聖人足。勅大衆宣。欲求法者。可近法師。云云。時大衆恭敬圍繞。二聖宛如佛世尊。爾時法師上高座。而歎佛功德不思議。時四岳諸山道士。始呂慧通六百二十人。慚愧先非歸聖人。即出家成弟子。畢。此外五品已上九十三人。九品已上七十人。治民二百七十人。後宮百九十人。婦女百二十人。皆悉發心出家入佛道。同十六日。明帝下勅。剃髮出家。人悉設日日供物。行夜夜燈料。施與法衣瓶鉢。然而起立十寺。七寺安僧。三寺置尼。漢朝佛法自此興行相續。爾後支那四百餘州中。

造寺一千七百三箇所。佛祖統紀。佛祖通載。譯經圖記等。所廣說。近法花直談三末。埃義十六卷。生死ヲ出過シ。涅槃ニ歸入スルニ二種ノ勝法アリ。明佛敎得益。標有二種勝法。○出過生死者。出過猶云出離。生死者。玄應音義二十二八紙云。言生死。案梵言繕摩。此云生。末刺請。此云死。已上名義集六五十八云。勝鬘經云。生者新諸根生。死者故諸根滅。已上凡釋生死有二種七種。二種依唯識百法等意。分段生死。變易生死。分段生死。三界六道衆生。生死。變易生死。依菩薩無漏大悲願力。轉替分段。麤劣身。得細妙果身也。七種生死。依涅槃攝論等。一。分段生死。二。流來。是言依過去無明煩惱。現在母胎託心識初也。三。返出。是迷出癡妄初也。四。方便。是聲聞緣覺生死也。五。因緣。是初地已上所得也。六。有後。是十地菩薩所得也。七。無後。是等覺所得也。器朴論中成佛往生門。今生死。一往言之。二種中。分段生死。七種中。初三種也。再往論之。可通二種七

種。已釋尊一代化導。上從聖人下及凡夫故。又言三界六道流轉生死相。天台四教義云。從地獄至非非想天。雖然苦樂不同。未免生而復死。死而還生。故名生死。集解中(二十一)涅槃經二十六。二紙云。輪迴六道。具受生死。譬如枷。大繫之於柱。終日繞柱。不能得離。一切凡夫亦復如是。被無明枷繫生死。柱。繞二十五有。不能得離。已上安樂集上四十二云。如涅槃經說。取三千大千世界。艸木。截爲四寸。籌。以數。一劫之中。所受身。父母。頭數。猶自不斷。或云。一劫之中。所飲母乳。多於四大海水。或云。一劫之中。所積身骨。如毘富山。如是遠劫已來。徒受生死。至於今日。猶作凡夫之身。何曾思量傷歎不已。已上賢愚經曰。佛在世時。王舍城中有一長者。名曰福增。年百歲。聞說出家功德無量。即來佛所。求欲出家。值佛不在。即至舍利弗所。舍利弗見老。不度。如是五百阿羅漢皆悉不度。即出寺門。住門闕上。發聲大哭。世尊後至。種種慰喻。

即告目連令其出家。目連即與出家授戒。復常為諸年少比丘之所激切。便欲投河沒身而死。目連觀見以神通力接置岸上。問知因緣。目連念言。此人不以生死怖之。無由得道。即令至心捉師衣角。飛騰虛空到大海邊。見一新死端正女人。見有一蟲從其口出。還從鼻入。復從眼出。從耳而入。福增問言。是何女人。答言。此是舍衛城中大薩薄婦。容顏端正。世間無雙。其婦常向鏡照面。自見端正。便起橋慢。深自愛著。夫共入海。船破而死。漂出在岸。此婦由自愛身。死後還生在故身中作此蟲。捨蟲身已墮大地獄。受苦無量。少復前行見一女人。自負銅鏡。着水以火然沸。脫衣入鏡。肉熟離骨。沸吹骨出在外。風吹尋還成人。自取肉食。福增問師。是何女人。目連答言。舍衛國中有優婆夷。敬信三寶。請一比丘。一夏供養。在於陌頭作房安置。自辦種種香美飲食。遣婢送之。婢至屏處。選好先食。餘與比丘。大家

覺問。汝不偷食。不婢答言。不。比丘食訖。有殘與我。若我先食。使我世世自食身肉。以是因緣。先受花報。後墮地獄。次少前行。見一肉樹。多有諸蟲圍咬其身。叫喚啼哭。如地獄聲。福增問之。師答言。是昔營事比丘。以自在故。費用僧物。花果飲食。送與白衣。以是因緣。受此華報。後墮地獄。啖樹諸蟲。爾時得物人。次復前行。見一男子。周匝多有獸頭人身諸惡鬼神。手執弓弩。三隻毒箭。鐵皆火然。競共射之。洞身燦然。福增問師。此人何人。目連答言。此人前身作大獵師。多害禽獸。故受此苦。於後命終墮大地獄。次復前行。見一大山。下安刀劍。見有一人。從上投下。刺壞其身。投已復上。如前不息。福增問師。此復何人。師復答言。是王舍國王。大闍將。以勇猛故。身處前鋒。傷殺物命。先受此苦。後墮地獄。次前行。見一骨山。其山高大有七百由旬。爾時目連於此骨山往來經行。弟子問師。是何骨山。師答。福增言。汝欲知。

者。此即是汝故身骨也。福增聞已。大驚出汗。白和尚言。聞我今者心驚毛豎。願師為說本末因緣。目連告曰。生死轉輪無有邊際。造善惡業。終無朽敗。必受其報。昔過去時。此閻浮提有一國王。名曰法增。好喜布施。持戒聞法。慈悲眾生。不傷物命。正法治國二十年。時王共人博戲。時有一人犯法殺人。臣以自王。值王嘉戲。脫答之言。隨國法治。即依律斷。殺人應死。尋即殺之。王戲罷已。問諸臣言。罪人何所。答。殺竟。王聞此語。悶絕垂淚。而言。我持戒不殺人。今我殺人大悔。其後王命終生大海中。作摩竭大魚。其身長大。六七百由旬。身有諸蟲。啖食其身。一眠經百歲。眠覺飢渴。吸水。水流入口。如注大河。爾時有五百賈客。入海採寶。值魚張口。船疾趣口。賈客恐怖。舉聲大哭。垂入魚口。一時同聲稱南無佛。魚聞佛聲。閉口。魚死後。夜叉羅剎出置海岸。肉消作此骨山。法增王者。汝前身是也。緣殺人故。墮海作魚生死。

輪轉如是。福增聞之。深畏生死。觀見故身解法。無常。修佛道得羅漢果。諸經要集七引之略鈔寔。以生死輪轉無際。遇佛經法。修之行之。出過生死。歸入涅槃。奇哉喜哉。○歸入涅槃者。涅槃梵語。此翻不生不滅。涅槃經云。涅槃言不生。樂言不滅。已上聲師。涅槃論曰。秦言無為。亦名滅度。無為者取其虛無寂寞。妙絕於有為。滅度者。言其大患永滅。超度四流。已上玄昇三藏。翻為圓寂。賢首云。德無不備。稱圓。障無不盡。稱寂。圭山正名圓寂矣。或翻安樂。凡聖大小皆有涅槃。或名彼岸。肇師云。彼岸者。涅槃岸也。智論。樂名為趣。涅槃名為出。永出諸趣故。已上二教論涅槃者。常恆清涼。無復生死。已上又云。涅槃可分有餘無餘少分究竟。如聲聞三界煩惱盡證。有餘涅槃。是少分涅槃。如佛得一切功德。一切種智大乘涅槃。是究竟無餘涅槃。已上諸文。名義集五(四葉)意。又外道雖謂涅槃名義。彼意今大異也。首楞嚴經云。波斯匿王白佛。我昔未承諸佛。誨

勅。見迦旃延毘羅膩子。咸言。此身死後斷滅。名爲涅槃。註經二初。迦旃延毘羅膩子。外道也。名義集二。往見外道見解。不離斷常二見。不知業種相生。妄謂死後斷滅涅槃。故外道死無後生。無地獄無極樂。生大邪見。△佛弟子。迦旃延外道有十重問答。謂外道曰。人死後斷滅無有他世矣。迦旃延曰。天有日月有昨日有今日有明日。若無他世則可無明日。已有明日。何云無他世。外道問曰。若有他世。人死後又還來可說地獄等受苦。我見死人還而無說。故知無他世。迦旃延答曰。如世囚人寧可還。不矣。言墮地獄人如無獄中囚人還。可說苦際也。外道又難曰。若言墮地獄受苦無際。故無還。生天者何還。不說天樂乎。迦旃延答曰。如人墮廁得出。寧又更入廁矣。言自下界生天上。如出糞土。說天上樂墮下界。而受苦者不可有之也。其上天上。一日當此百年。生彼五三日。未遑歸心。設有歸者。其間可命終。故寧

得知之。次外道問云。我罪人入釜密蓋其上。煎煮何之。不見神出。故知無他世矣。迦旃延曰。汝晝眠時。傍人在邊見汝神出否矣。言或文說見。夢魂出遊行。此遊行魂無人見也。次外道問曰。我剝死人皮。削腐肉。碎骨求神不得。故知無他世矣。迦旃延曰。木中有火性。有人以薪寸寸分裂。求火寧有可得。不矣。私云。石中火。金中火。又草木中花。意同。又外道問曰。我秤死人更重。若神去。應輕。若無神去。則無他世矣。迦旃延答曰。火與鐵合。輕。鐵失。火則重。人生有神則輕。死失神則重矣。又外道問曰。我見臨死人。反轉求神不見。魂所出。故知無他世矣。迦旃延曰。如人反轉求於貝聲。寧得聲耶矣。言轉螺貝。如不知其鳴音出所也。次外道曰。汝雖種種破我。斷無執見。我不能捨矣。迦旃延答曰。如人探糞。初見麻。取麻。次捨麻。取麻皮。次捨麻皮。取糞。次捨糞。取布。次捨布。取絹。次捨絹。取銀。次捨銀。取金。捨劣取勝。云何不能捨。

又外道問曰。非但我如是說。諸人亦如是說。云何謂我爲非矣。迦旃延曰。昔商人三人行道。人教曰。一方道。在鬼神惱人。一方道。吉。其中二人曰。我知。故。雖有鬼神可往。常道。行。爲鬼所食。一人雖不知道。聞吉道。行。不逢難。如夫諸人雖同起惡見。可墮惡道。雖一人爲正見。入佛道。修行。可成佛也。又外道曰。我不能捨。斷無見。勸我。則曠矣。迦旃延曰。昔有養豬者。見糞頂頭。行。路逢雨。不淨。懸額。捨其糞之。夫人不捨。而却曠。悉汗。身也。汝亦如是矣。如是。番番折破。廣演諸義。外道便伏。而讚歎言。尊者前說。日月。而我已解。欲聞智辯。故番番執難。善哉妙說。法花文句科解二(十丁)同科註一。法直談五本等意也。○有二種勝法者。聖淨二門是。云二種勝法也。安樂集上四十四卷云。問曰。一切衆生。皆有佛性。遠劫以來。應值多佛。何因至今。仍自輪迴。生死不出火宅。答曰。依大乘聖教。良由不得二種勝法。以排生死。是以不出火宅。何者。爲

二。謂一聖道。二謂往生淨土云云。所謂一ニハ聖道門。二ニハ淨土ナリ。標聖淨二門也。問曰。聖道淨土名義。出有何耶。答華嚴經曰。三乘聖道矣。攝論云。十住十行十迴向菩薩。聖道矣。淨土者。清淨覺經云。若人聞說淨土法門矣。大莊嚴論云。爲大乘志幹機。說聖道。一宗。爲慚悟容預機。說淨土法門矣。播州問答云。聖道門者。談說煩惱即菩提。曉論生死即涅槃云云。器朴論上云。聖道門者。大小權實諸教也。從凡至聖之門。故名聖道門。乃至藏通別圓四教。皆在斷惑證理之域。共期此土入聖之分。故言聖道門。取意聖道。亦二アリ。顯密二教是ナリ。已下釋聖道門也。顯密二教者。凡諸教雖多。不過顯密二教。顯密二教。於真言宗。雖立之。顯教之一通。諸教也。選擇集上云。如真言宗。立二教。而攝一切。所謂顯教密教是也矣。共娑婆得忍ヲ待テ。同穢土ノ成佛ヲ期。

婆娑者。法華文句二(三十四)云。婆娑此云忍。由此
 士衆生安於十惡不肯出離。從人名士。故稱爲
 忍。悲花云。云何名婆娑。是諸衆生忍受三毒及諸
 煩惱。故名忍士。亦名難雜。九道共居。故也。已上名
 義集三八葉云。西域記索詞世界二千大千國土。爲一佛
 之化攝。舊曰婆娑。又曰婆訶。皆訛也。楞伽翻能
 忍。云云。○得忍者。忍辭廣。依仁王經有五忍。謂伏
 忍。信忍。順忍。無生忍。寂滅忍也。地前三十心。名伏忍。初
 二三地。名信忍。四五六地。名順忍。七八九地。名無生
 忍。十地及佛地。名寂滅忍。器朴論中。往生成佛門。今得忍
 者。無生法忍。悟法身究竟真理。稱無生法忍也。楞嚴
 無生法忍。註。眞如實相。名無生法忍。無漏眞知。名之
 爲忍。得此智時。忍可印持。法無生。理決定。不謬。
 境智相冥。名無生忍。已上良貴云。無生忍者。眞理。智
 證。眞理。名無生忍矣。得此無生忍。依華嚴十信
 位。依仁王有七八九地。圓教意。初住眞因位。斷無
 明惑。顯法性理。契無生位也。難得成佛。喫無生

位之難也。契初住眞因位。得無生忍。益是云。分證
 佛也。四教之中。華嚴經。初發心地。便成正覺。大品經。從
 初發心。卽座道場。法華經。龍女成佛等。言初住。成道也。
 契初住無生位。念念入普賢願海。自然至妙覺。朗然
 位也。是云。得忍。所證入聖得果。云得忍也。聖道門
 意。悟無生。得佛身。不期淨土。於婆娑究竟。故云
 待婆娑得忍。期穢土成佛也。選擇上云。聖道門。大
 意。不論大乘及小乘。於此婆娑世界中。修四乘道。
 得四乘果。四乘者。三乘外。加佛乘。已上。夫望最上
 根機。約上知人。可期婆娑得忍。穢土成佛歟。當今
 末法五濁世。鈍根無智。凡下何期之。寔約時。被機
 難。修易。入應分別之。座禪三昧。經下二十四云。行者
 定心求道時。當當觀察時。方便。若不得時。無方
 便。是名爲失。不名利。何者。如鑽濕木。求出火。
 火不可得。非時故。若折乾木。以求水。水不可得。
 無智故。已上。昔楚人卞和。於楚山中。得玉璞。未琢玉
 石。獻楚勵王。王令玉人相。玉人見是石。非玉。

奏之。王卽和氏詐斬和右足。和悲無罪相此刑。
 次及武王卽位。和又獻此璞。王悅。令玉人相。玉
 人見奏石而非玉。武王聞曰。詐我。又別左足。
 捨之。荆山中。和氏尙悲。過二十餘年。和常抱此玉
 石。山中啼哭。泪盡。繼之以血。其後及文王卽位。
 王入彼山。狩三日三夜。帝於之見卞和所斬兩足。
 抱石泣悲。問之曰。天下別者多。子愛哭甚矣。
 和氏曰。我全非悲。刑唯歎君昏。臣諛。君子退。佞人
 進。不知世實。返曰。詐我。二代君所斬兩足。此
 美玉不顯于世也矣。文王聞之。令玉人琢。夫玉。
 其光大映徹。是懸行路。前後八兩車光明赫奕。故是
 名照車玉。又懸宮殿。夜輝。故是名夜光玉。
 故代代天子爲之祕藏寶玉。傳趙王世。趙王是重
 名趙璧。而更不放身。學憲不聚。登雪。跌照光圓
 焉。輦路不得燈月。分道影明焉。爰趙隣國在威勢。
 王名秦。秦王大望此玉。欲乞取。或時催盟會。
 會。次見彼趙璧。而秦謂曰。願我與此玉。以秦十

五城替之矣。趙王聞之。思惟。秦王猛勢。我雖惜
 不可叶。秦一城者。四方三百六十六里也。是並十五
 廣大所領。不意領狀。璧與秦王。秦王得玉。替得
 十五城。是名連城璧。爾後趙王遣使。雖請十五城。
 忽變約。更不出一城。況不返玉焉。爰趙王有一
 臣。名藺相如。奏趙王言。我入秦都。欲奉取返玉。
 來休君憤矣。趙王曰。秦大國兵多。爭得取返。此
 璧。藺相如言。止兵以謀奪之矣。趙王曰。謀以取
 之者可。若爾任汝心矣。相如大悅。越秦國。更不
 具兵。自不帶劍。衣冠正。乘車。調使威儀。入秦
 都。已入宮門。而作禮儀。曰。趙王使藺相如。謹直謁
 秦王。而有當奏之由矣。秦王出。南殿。則面謁。藺相如
 畏而伸言。先年君王所獻夜光玉。有少陰瑕。不奉
 爲知之。凡璧主不知玉瑕。則有難事也。爲奉
 告此義。使也。謹奏之。秦喜。出玉居玉盤上。置藺
 相如前。相如卽執此玉。從懷中拔出。如水劍。伸
 言。夫君子無戲言。約束堅當。如金石。抑此玉作

替十五城不與一城不返玉。同盜賊惡。越文成。偽此璧全非有瑕臣命與玉共碎。君玉座思沐血故參大怒玉。玉釵柄碎。拳腕秦王與玉。有近者忽侵玉體。切破玉。欲捨身命氣色無敢遮之者。羣臣恐不進。相如遂奪得連城玉歸本國。趙王大悅。相如與大祿授高官。法華直談六本。三國傳二。韓非子等出寔此玉雖無比寶不相時。三代不顯光。又今娑婆得忍。穢土成佛雖猶如殊勝寶玉。不合未代下根時。則不能顯。已心佛性玉光。故當今愚鈍輩。憑他力本願玉。可預攝取光益。是ヲ以テ一心三觀ノ窓ノ前ニハ。真如一實ノ月光ヲ瑩。三密五相ノ壇ノ上ニハ。心城八葉花薰ヲ翫フ。一心三觀等者。台家意也。夫衆生一心本覺真如普。一法不可得。然處處忽然念起。成十界三千諸法。此十界即十如實相。十界三千諸法。併衆生一心生。雖成十界十如。而不出空假中三諦。荆溪云。一念無相謂之空。無法不備謂之假。不一不異謂之

中。已上中論云。因緣所生法我説即是空。亦名爲假名。亦是中道義。二文田名義集四。三觀。空假中三。知三千諸法在無始一念無明。總觀空假中。是一心三觀也。存海口決此。一心三觀一念三千。即真如實相觀之云。真如一實也。真如者。起信論云。唯是一心故名真如矣。一實者。一不二義。一真實相。亦是一實中道義。實實相。十界三千諸法。即真如實相。釋云。理極眞實。以實爲相。故云實相矣。諸法欲言有悉歸滅無常。又欲言無。地獄鬼畜等顯。十界色像宛然。是有而非有。空而非空。非有非無。所不互有無。謂實相。是云。一實中道悟。夫花歸根。鳥入雲。是非誰所教。四相遷流相。只是法爾自然境界。所具。真如一實功德云。諸法實相。我等於一心上修行之。則如虛空。一雲不起。大海一波不動。住無相寂然心地。一念不起。則本真如一實內證也。一念起而此念相續。異實相。悟而輪迴生死也。故一心觀三諦。住真如一實境界時。中道月光明了。證

一佛乘覺體也。○此中。窓前月光者是喻也。窓前取明之義。謂成一心三觀之觀。除生死長夜闇時。真如一實中道實相。月光明了。此喻。窓前月光。瑩者云。修行。是觀義也。○三密者。身口意三業。三密辭。雖通四箇大乘。表真言宗名目。三密有二種。一。有相三密。謂手足舉動。身密門。一切語言。口密門。一切觸。心意密門。大日經疏一本五下云。入真言門。略有三事。一者身密門。二者語密門。三者心密門。已上祕藏記云。吾身即印。語即真言。心即本尊。已上但此三密。上根上智所知。下根下智人。身密結印。口密唱真言。意密念我身大日。是云。有相三密。二無相三密。謂以心傳心。不假有相方便。直指不生心地。傳無念本佛也。○五相者。五相成身。菩提心論。明五相成身。彼論十三紙云。五相成身者。一。是通達菩提心。二。是修菩提心。三。是成金剛心。四。是證金剛心。五。是證無上菩提心。已上初通達菩提心者。謂觀自心如滿月在輕霧中。今於第九識真如理處。

通達得本有佛性大菩提心。故名通達本心也。二修菩提心者。謂觀自心如清淨滿月輪也。菩提心義云。於本有性德。菩提心發。修德菩提心名。修菩提心。已上三成金剛心者。謂觀心月輪中有金剛蓮華也。四證金剛心者。謂想此心蓮臺五部。總合成一塔婆身也。五證無上菩提者。謂觀身爲本尊也。謂如本尊。衆相具足。二利圓滿也。付此五相。有自證門。有化他門。自證門前云。初地即極發心則到。又談三大僧祇越一念阿字也。化他門。日立次位階級。長時修行也。頌義九。直牒九等委曲也。○壇上者。三密五相。觀念加持壇場。○心城八葉者。五相成身中。成金剛心時。觀心月輪中有金剛蓮華。又證金剛心時。想此心蓮臺五部總合成一塔婆身也。夫我等衆生。曾中有如蓮華物。是云。曾中八葉蓮華。醫道云。心臟。真言宗云。八葉心蓮。是八分肉團也。指此心蓮而云。心城八葉。心城。蓮華三昧經云。歸命本覺心法身住心城矣。是衆生心蓮云。心城也。夫成三密五相。觀顯。本有法

身佛體言。既心城八葉華。薰也。花勻者。以喻顯法。詞也。△凡真言行法三密加持奇特。其靈驗不淺。舉之。和朝。始弘法大師。密法傳授。人師顯。其德用。不可勝言。昔近江國坂田郡大乘峯伊吹山長尾寺有。覺然上人深有沙門。初生下總州。俗姓千葉助門葉。志學。初上洛陽。隨玄慧法印習外典。壯年。比移河東。謁虎關和尚看禪錄。其後入真言宗。修三密加持。成五相觀行。文和元年。至大和國忍上嶽毘沙門堂。一百日間。斷十穀醬水。行求聞持法。既及八十八夜。時。到汲闕伽水之路。伏長二十丈計。物橫徑路。老木交枝。古藤垂蔓。山與深夜。月光幽。物色難分。能見之。兩角耨耨。連鱗歷歷。山嶺。覺然無怖。勵力。跳其背。通大蛇。下谷。逃去。不知行方。其後覺然夢。天子一人來。曰。我昔行者。以一念惡心。生蛇身。而住此山。已八萬歲。常妨諸善。進諸惡。今為障礙。上人行法。後夜現大身。橫切道。雖爾遇。上人三密即一。一躍。轉生於兜史多天。真言上乘行者。欲

成敵。却預。值遇結緣。如彼釋尊。登切利天時。現目速神通故。難陀跋難陀。遂得其益。作是言。而上天。覺至翌日。尋彼跡。下溪。幽邃。深洞。大蛇蟠死。上人見之。雖心寒股慄。結印誦陀羅尼。造立塔婆。然尚凝信心。修行法。滿一百日時。極上乘意。前五部相應。月圓滿。瑜伽中臺道場。三業即是星燦然。時本朝佛法。元祖上宮太子端嚴美麗。姿化現。手持二卷經。示覺然曰。此一卷汝演。從今已前事。今一卷說。從今以後事。是與覺然。太子即不見。上人披之。過去。事毫釐不違。閱未來。事有存命八十五。二世悉成就。有驗勝世。智德越人。然。厭名彰時世。停公私用。爰有長尾寺。御手洗河。源出。自大乘峯龍馬庭池。輻朝宗。湖海。閻魔大王。姉龍。栖河。故。是云。姉河。矣。彼河上。有瀨水所。兩峻對峙。如立屏風。是大靈石也。屹然高丈餘。恰似二龍蟠。中瀧水漲。白浪亂絲。深洞有水。不異探藍。其勢尚過。黃河龍門。三汲。千介萬鱗類。到此所。打波觸石。皆悉。

死。貞治年中。覺然見此由。而思念。自無始以來。至未來際。至此瀨。失命畜類。寔可憐。如何。祈倒此巨石。達魚鱗。到源。望得。桴筏。流棹。便。一心誓之。一夏九旬間。夜夜行彼處。口誦真言。身結印。意成。六大無礙。觀修三業平等。加持。誠驗德新。感。彼盤石俄動。忽沈沒。地中。繙素見之。無不隨喜。從其以來。杓杖不苦。桴筏捨掉。然而覺行法不怠。談密法。極理。了佛法。內證。祈四海安寧。成一天福利。行年八十五歲。十二月四日。身浴蘭湯。手結法印。如眠化。長尾寺記三國傳六等

界相。華嚴經中。明之。夫。自力聖道門。意雖云。四土。唯心所現。隨其心淨。即佛土淨。密嚴華藏。不可覓於外。即身觀之。故云。己心。設實報寂光土。即身望密嚴華藏界也。

一遍上人繪詞傳直談鈔卷一終

故ニ己心ニ實報寂光ノ土ヲ設ケ。即身ニ密嚴華藏ノ界ヲノゾム。

實報寂光等者。天台大師依淨名經立四種淨土。謂

一。染淨土。凡聖共居淨土。又云同居土。二。有餘方

便土。三。果報國。又云實報土。純法身所居。四。寂光

土。妙覺所居。淨名疏。名義集七等所出。○密嚴華藏。共

是淨土。密嚴淨土相。大乘密嚴經中說之。華藏世

一遍上人繪詞傳直談鈔卷之二目錄

- 一八 正像末三時之事
- 一九 龍華之事
- 二〇 遠州櫻之池之事
- 二一 源光入櫻之池事
- 二二 特留此經之事
- 二三 長者爲娘讓如意珠事
- 二四 蘇耽爲母與寶櫃事
- 二五 超世願之事
- 二六 釋法知之事
- 二七 三輩九品隨機說之事
- 二八 并州張善和之事
- 二九 離三業念佛之事
- 三〇 時宗得名之事
- 三一 野干失耳尾牙譬之事
- 三二 宗旨安心之事
- 三三 彌勒出世時歲事
- 三四 難藏待彌勒出世之事
- 三五 末法萬年之事
- 三六 長者爲子與一金喻之事
- 三七 念佛無上功德之事
- 三八 難信之法之事
- 三九 那先比丘除王疑事
- 四〇 一形十念往生之事
- 四一 荆王夫人往生之事
- 四二 耳四郎之事
- 四三 平生不可忘臨終事
- 四四 閻魔王五天使之事
- 四五 三人渡愛智川事

一遍上人繪詞傳直談鈔卷二

教ノ本意然ベシトイヘドモ。正像已過テ末法忽ニ至リ。行證共ニ絶テ教法獨殘レリ。
 述末法難證義。是約時明之。○教本意者。聖道門此土入聖得果本意也。其教所爲本意。最唯心淨土即身成佛之義可然也。○正像者。正是正法。像即像法。正像末三時說區。一正法五百年。像法五百年。末法萬年。是大集經意也。二正法五百年。像法五百年。末法萬年。是三聚懺悔經意也。三正法千年。像法千年。末法萬年。是大悲經意也。四正法千年。像法五百年。末法萬年。是悲華經說也。雖有此多說。今依器朴論卷下末法弘通門之意。可用正法千年。像法千年。末法萬年說也。或曰。用正法五百年。像法千年。末法萬年說矣。○行證共絶。教法獨殘者。良貴仁王經疏七三十四云。有教有行有得果證名爲正法。有教有行而無果證名爲像法。唯有其教無行無證名爲末

法矣。垂裕記一(十八丁)頌義九初同之。夫如來正法。雖教行證三共有證果人。至末法今。根機劣弱。有其教。少行證。二故云行證共絶。教法獨殘也。
 依即身證ヲキテハ。自退心發。或五十六億七千萬歲。震隔遙龍華。春朝待。或三生曠劫流轉生死。雲重。遠覺月秋空。望結緣誠貴イヘドモ。即證既空。似。
 即身證者。即身成佛證也。退心者。怯退心也。○五十六億七千萬歲者。明彌勒出世時也。就之又有諸經論異說。賢劫經云。五億七千萬歲。泥洹經云。一億四千萬歲。上生經及仙人慈心經云。五十六億萬歲。菩薩處胎經。寶愚經云。五十六億七千萬歲。彌勒上生經疏下(四十丁)又婆沙百三十五。六業同百七十八。二業云。五十七俱低六十百千歲也。今依處胎經卷二。八業賢愚經三。十四業云。五十六億七千萬歲也。○龍華等者。彌勒化生去。天竺鷄頭城。不遠有道樹。名曰龍華樹。彌勒座。此樹下成正覺也。彌勒來時經。二紙云。彌勒得道。

爲佛時。於龍華樹下坐。樹高四十里。廣亦四十里。乃至彌勒佛初會說經時。有九十六億人。皆得阿羅漢道。第二會說經時。有九十四億比丘。皆得阿羅漢道。第三會說經。九十二億沙門。皆得阿羅漢道。胎經云。佛告彌勒。汝所三會人。是吾先所化者。一稱南無佛。皆得成。佛道。諸經要集一(二十二丁)法苑廿二(十八丁)引之問云。何故此樹名龍華樹乎。答。諸經要集一。二十三丁引大成佛經云。華枝如龍頭。故名龍華樹。亦有別傳云。子從龍宮出。故名龍華樹也。已上大部補注十一卷三十一丁云。華如龍頭。故曰龍華。又復其枝猶如寶龍吐百寶花。故曰龍花。已上○或重。多生曠劫流轉生死。遠望覺月秋空者。夫一切衆生。從無始曠劫以來。重無窮生死。世世流轉若此。生不出生死。而又經生生後待彌勒出世者。是生死上重生也。故云重多生曠劫流轉生死雲。往生要集。上末二十三云。從釋尊入滅。至慈尊出

世。隔五十七俱低六十百千歲。新婆沙意。其間輪廻劇苦幾處乎。何不願終焉之暮。即託蓮胎。而期留愆々生死。至龍華會耶。已上惠心。○遠望。覺月空者。此喻也。覺月云彌勒。正覺也。望空云待慈尊出世人也。上。隔霞春朝。亦是以喻顯法也。喻意易解。△中比幡州書寫山。邊法花持經沙門。名曰難藏。內誦經典。外信熊野權現。有精進德。誦功積三千部。參詣日重。三十度。難藏心中念。不改此生。而值遇彌勒出世。常誓之。情以月氏五天。大義雖乖。日本一州圓機獨熟。此是神明權現和光垂跡。播其冥助擁護之故也。就中晉遠公。嗜權宗。感來迎於廬山。月。梁。珍師。密教。任遊放。於淨界風。是皆依其人誓願。又詣熊野山。三年山籠。祈值彌勒出世。漸千日滿夜。白髮老翁。出御殿示曰。汝所願雖難叶。我廻方便。自是下向關東。至陸奥。出羽界。彼有山。名言兩。汝任彼山。當到彌勒出世。曉矣。難藏夢覺。信夢相新。則下向關東。尋入

彼山。山花開似錦。澗水湛如藍。至山頂有大池。圓而底深。古松老檜蔽其天。奇岩怪石峙其峰。池邊有松樹。其下有岫。藏此結艸庵。居林花落庭。調朝食。滿艸生。蘭營夕。煙於之讀誦。法華苑如仙人。香煙微。無礙月。僧步閑。不穿苦。或時年。程十八九計。容顏端正。女性來聽。聞讀經。不知何來。難藏乍怪。思誦經。女曰。我結緣。希有難得。妙典。五障雲忽晴。竝慧光於南方無垢月。三。明。露正暖。添覺葉於西利。寶池蓮。願來我棲。而誦法華。化導群類矣。藏云。我依神。告入此山。移他境。難叶。我待慈尊下生矣。女云。妾棲即此池。吾是池主。龍女也。龍兒。一生之中。值千佛出世。故與吾結夫婦。契而待慈氏下生矣。藏思惟。彼妙莊嚴王。往昔求眞實。菩提。貪王位。愛光榮。失菩提。道往還。生死。鬱頭藍子。當初得有漏禪定。耽女色。起染欲。退非想定。沈惡趣。底。爲何。思惟。龍女語曰。若實待彌勒出世。隨我矣。藏又思。正是權現方便。歟。亦是可爲。

濟度利生。終隨龍女入住彼池。有時龍女語曰。此山西方去三里。有巖。名奴可。巖。彼有大池。池有八頭龍。以吾爲妻。一月中。上十五日。住奴可池。下十五日。住此池。今既來時。至得其意矣。難更無怖氣。以法華八卷。頂頭則成九頭龍。已彼八頭龍來。風飄飄。雨斜斜。時兩龍出合。互食。合。相戰。七日七夜。動搖如雷轟。力耀似電光。遂八頭龍戰。負曳欲入大海。雖爾路大。松樹出生。不能通。終威勢盡。成小身。入元奴可池。難藏得勝。彼龍女。共住言兩巖。池中。傳並。國十二。△又遠江國笠原。庄有池名櫻之池。昔彼國。國司初。下向時。自洛陽云。櫻前。具足寵愛美女來。時國民等。彼池。泮。構假屋。儲種種酒肴。禮國司。彼女性。下輿。垂幕。隔座。遊興。雙席歌。萬歲。一座祝千秋。酒宴歡樂。半。彼池。俄色變。逆浪忽起。打懸櫻前。女性。共浪沈入池底。國司醒。與諸人失色。則令水練者。入池底。尋求之。不知何方。國司大歎曰。此池主奪我妻。難可退治池主。

欲竭水。山廻無便。欲及刀劍底深。有餘。即思惟集國中。薪。山邊燒岩石。轉入池中。已。七日七夜。時池水色變。磨。墨。黑。又色變。按藍青。後成血色。沸上。如八熱地獄釜中。爰其形。如犍牛。大毒蛇。背連黑鱗。頂戴白角。口如獅子。爪如猛虎。浮出忽死。國司於是止憤。送三年。住。自爾此池名櫻池也。其後有沙門持寶房。阿闍梨源光。戒行全。慧解共具。都率行人。法華持者。或時思念。受生於生者必滅境。送體於老少不定國。今度不離生。死。當流轉三塗。願不替肉身。值彌勒出世。修屈身行。成大蛇身。而無主池。故入於此池。終入池而住。其後弟子法然上人。下遠江州。至彼池邊。初元。姿。對面。後依上人。所望。現大蛇形。見。三國傳記十一。正源明義鈔二。此等名聖。於即身證生退心。待五十六億七千萬歲春朝。重生生死。雲人乎。是則理深。解微。キ力故也。此總結。聖道難證。義也。理深。解微。故者。約機明難

證。○理深者。聖道門意證真理入聖得果。其真理是真理。是深遠。有思議外。以言不可說。以義不可名。故謂之理深。大集經云。甚深之理不可說。第一義諦無聲字。已上○解微者。此有二意。一解者。解知解了。微者。微賤。謂所解理深遠。而凡夫能解智微賤。如何輒解了之。嘉祥云。觀心微劣。煩惱強盛。已上二理及解微。謂真理深遠。以所解已幽微。然則塵味凡夫。以淺識何輒測其深遠。神迴文句序云。圓極沖微。不可得而言也。已上微說文。少也。細也矣。此二義中。初義解約能解。是觀智方也。後義解約所解。是謂理之深密也。問云。聖道教法深理而難證。可言淨土教淺理。故易證耶。答。一往依理勝事劣之義。聖道以理性為所期。故謂甚深。淨土法門立指方立相教相示。凡夫故似淺近。雖然再往論之。淨教深聖道淺。所以者何。彌陀教門不混餘門不共別談。故雖有相不乖無相。雖事帶理縱橫也。菩提流支三藏云。雖是

云。相。即相之相。非隔相相。故空。兼色。色亦兼空。理。即事之理。事。即理之事。已上如是。教。聖道。雖有之。機情所解。故。落。因分可說。淨土不然。皆是佛智所照。佛願所構。故。談。果分不可說。此任位諸佛。談不可思議功德。不演是非。何況凡夫淺識。何識量佛力。不可思議。唯仰可信。法然上人。大原云。使人欣慕之教門。且似淺近。自然悟道。密意極是深奧也。已上

次淨土門者。末法萬年流通。慈悲餘經悉滅時。施入壽十歲利物。本誓無有出離機發給。已下明淨土門意。播州問答曰。淨土門者。旋下身心樂欲往生。三界六道之中。無一希望也。故知萬物不足可用。特地思量。於此界中保護此身。則無出離生死之期也。已上器朴論上云。淨土門者。彌陀如來本願所成淨土。念佛眾生往生極樂要門也。乃至聖道難行。曾無證。故今開淨土易往門云云。○末法萬年流通施。慈悲於餘經悉滅之時等者。此詞取慈

恩。末法萬年餘經悉滅。彌陀一教利物偏增詞。末法萬年流通者。大經曰。當來之世。經道滅盡。我以慈悲哀愍。特留此經。止住百歲。已上善導大師云。萬年三寶滅。此經住百年。已上器朴論下云。末法者。為至萬年之終。為後五百歲。如何。答曰。或言五百歲。或言後五百歲。言五五者有二義。一五五後五百年。是諸經漸滅時也。二萬年終五百年。是念佛弘通時也。言止住百歲。同是萬年末。故云末法萬年餘經悉滅。彌陀一經利物偏增云云。此經釋意。至末法萬年終。人壽十歲。間經百年。刀疾饑三災起也。是有異說。且依俱舍等說。十歲百年末。七年七月七日。間饑饉災起。無人可食物。煎人白骨等。飲之。漸續命。又其末七月七日。間疾病起。悉病臥。後七日。刀兵災起。取艸木成劍。辛苦也。是云眾生滅盡也。至此時。諸經悉滅盡也。此時多經教陰龍宮。又滅於中小教先滅。大乘經後滅。又大乘經有法滅。前後佛祖統紀三十一曰。南州人壽至十歲。刀兵起。互相

誅戮。是時佛法當暫滅沒。增至四十九歲。入末法一萬年也。月光菩薩。出震旦國。說法滿五十二年。度眾生。入涅槃後。首楞嚴等次第滅。無量壽經後。住百年度。眾生已上。又釋迦譜卷十。引法滅盡經云。首楞嚴般舟三昧先滅。化去。十二部經等尋復。化滅盡。已上○施慈悲。於餘經悉滅時者。經我以慈悲哀愍。特留此經。止住百年。已上謂法滅時。諸大小乘經悉滅盡。然釋尊哀愍。法滅百歲時。眾生故。以大慈悲。獨留淨土。無量壽經。施利益也。又付諸經滅盡。特留此經時。諸師意見。且千。道綽善導慈恩等三師。末法萬年後。止住百歲。定。託何上人器朴論意。又同之。憬興大經疏。單依法住記云。增劫人壽七萬歲。後百歲止住。望西鈔七。並大經科註。往見懷感禪師云。一末法萬年後。百歲。一增劫人壽七萬歲。後百歲止住。不判是非。羣疑論。三私曰。末法萬年後。滅盡。增劫人壽七萬歲。後滅盡。雖二義乖角。終成一意。其故約暫滅永滅談之。先萬年後。

滅盡者。人壽十歲時到。小三災起故。諸經悉滅。淨教特留利益。眾生。是云暫滅也。又人壽十歲之時。百年增一。至人壽百歲時。爾時十六大阿羅漢與諸眷屬。復來入中說釋迦正法。度無量眾生。統紀。月光菩薩出震旦國。說法矣。如上。是云傳持法。言釋迦正法雖滅。人壽百歲時。羅漢等傳持釋迦正法說之故。此傳持法盛流布世利眾生。而此法又人壽七萬歲時悉滅盡。是云永滅。此時淨土教法百歲止住。利益眾生也。暫永兩時滅盡共淨教。止住百歲施利益也。然諸師云。末法萬年後約暫滅。法住記云。增劫七萬歲後約永滅。故二義非相違也。暫滅永滅等。大經科註往見。○人壽十歲利物者。謂初初人壽八萬歲。百年滅一。今人壽五六十時。此末百年滅一。至人壽十歲時。十歲定命間百年。其時者經滅淨教獨留利益。眾生。故云人壽十歲之利物。問云。人壽十歲時淨教特留。以釋尊慈悲也。若以佛慈悲留之。可留餘經。何故淨教特留耶。答。依善導意。此經之中。

說彌陀如來念佛往生本願。釋迦如來慈悲。為留念佛殊留此經也。選擇上往見問云。止住百歲。為念佛留。將為色經卷留。答。此有二義。一。獨留念佛。則特留此經。言餘經滅。而雖淨教特留。所苦三災無讀誦人。但讀誦行非本願正意。三經所說。有念佛一行。故特留念佛。特留此經。二。淨土經雖同餘經滅。名號一法。留人口殘百歲。例秦始皇帝時用臣下李斯之語。五經以火燒之。或土坑埋之。其中毛詩思無邪三字。留人口有云思無邪事。人人。口覺。故此事云燒書跡。此詞殘。本直二十五丁。今例之知。雖淨教滅。念佛留人口有之。大外記類業考也。見黑谷大經講釋。△觀佛三昧經。卷十八葉佛說。六臂中。佛告阿難。譬如長者將死。不久以諸庫藏委附其子。其子得已隨意遊戲。忽於一時值有王難。無量眾賊競取藏物。唯有一金。乃是閻浮檀那紫金。重十六兩。金錠長短亦十六寸。此金一兩價直餘寶百千萬兩。即以穢物纏裹真金。置泥團中。衆

賊見已不識是金。賊去之後。財主得金。心大歡喜。已上今以此譬合此。如釋尊以諸經庫藏附與眾生。忽值末法。王難曰。災眾賊競起。取餘經寶物去。唯有淨教。一金。賊去後用之。△又同經云。譬如長者將死。不久告一女子。我今有寶。寶中上者。汝得此寶。密藏令堅。莫令王知。女受父勅。持摩尼珠及諸珍寶。藏之穢中。室家大小皆不知。值世飢饉。持如意珠。隨意即雨百味飲食。如是種種隨意得寶。已上今又合之。如釋尊持淨經摩尼珠珍寶。與眾生。值三災飢饉時。隨口稱念佛意語。往生極樂寶。隨意得之。△昔漢昭帝始元年中。有人名蘇耽。此人得神仙道。諸仙集來。授秘符。傳神術。一日忽掃洒庭而曰。仙侶來。俄紫雲變空。異香薰榜。白鶴數十下。來其庭。而化作人。衣服鮮。無言量。蘇耽對面于此。而入內語母曰。我今得神仙道術。昇天上。我仕母榜。不能盡孝養。如何。八間。天仙其境遙異。故也。則留一櫃曰。若

有所用不足則。扣此櫃。隨所望。悉現前。不可有所乏。又來歲郡內當疾病天行。至其時。以橘葉洒庭前井水。疾病悉愈。今謂是迄。乘雲昇天。明年果疫癘天行。衆人皆累死巷。家家哭泣。母即汲井水。以橘葉洒之。則死者忽甦。百姓競來告郊。如曳絲。又常有不足之物。則扣櫃。傍其物至目前。三年後感其奇特。櫃內有何術。惟疑之。終開蓋。見中雙鶴飛出。分入雲路。其外無一物。從是後。扣櫃。復其望物不出來。神仙傳意。寔蘇耽留寶櫃。與母。令無所乏。今釋尊以慈悲留念佛寶號。與末法眾生。令往生望無所乏。○發本誓於無有出離之機者。本誓者。彌陀本願也。凡本願雖六八。殊以念佛為往生規。故導師釋曰。弘誓多門。四十八。偏標念佛最為親。已上故知。四十八願之中。既以念佛往生願。而為本願中之王。故以此王本願為本誓也。此本願者。為曠劫以來常沒流轉。凡夫所發本願。故云發本誓。於無有出離之機也。釋。

云。曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣矣。最下根機ニ蒙ラシメテ。無上ノ深法ヲ與ヘ。意地ノ動靜ヲ用スシテ。口業ノ稱名ヲ勸ル。是ヲ超世ノ本願ト名ケ。是ヲ難信ノ法ト云フ。

最下根機者。對上根云最下機。凡人根有上中下。今淨土機以末法五濁惡世極惡最下機爲本。所勸念佛。然又非斥聖人上機。元曉遊心安樂道云。本爲凡夫。兼爲聖人矣。○無上深法者。無上。是對有上之言也。以餘行而爲有上。以念佛而爲無上。經下云。佛告彌勒。其有得聞彼佛名號歡喜踊躍。乃至一念。當知此人爲得大利。則是具足無上功德。已上深法。即是念佛。○不用意地動靜。勸口業稱名者。意地。心地。動靜。起居造作也。言今此念佛。非觀念。念非無念念。任口稱名。故云不用意地動靜也。或云。意地。意業。是觀察也。動靜。身業。是禮拜也。雖有觀察禮拜義。是念佛助業。非正業。正業。口稱一行也。故云不用意地勸口業稱名矣。思可知之。

○是云超世願者。經云。我建超世願。必至無上道。斯願不滿足。誓不成正覺。已上超世願者。指四十八願也。彌陀本願。勝諸佛願。故云超世願也。望西云。法藏菩薩。選集諸法之中。善妙建此願。故超世流布諸佛本願。是名超世。如下文云。無量壽佛。威神光明最尊第一。諸佛光明所不能及。又云。清淨莊嚴超逾十方一切世界。已上身上兩願。既超諸佛。攝衆生願亦應然。故已上望西問。云以何彌陀本願勝諸佛耶。答。諸佛未發凡夫入報土願。彌陀獨立凡入報土願。故云彌陀本願勝諸佛也。法然上人。大原云。諸佛無極慈悲。哀衆生迷倒。示現法藏發心。發起超世弘願。以易行易修之口稱令得頓悟頓入之往生。已上問。凡入報土本願。云何勝諸佛耶。答。大凡如來一代說教。立三身三引諸機時。同居土。凡夫所居。方便土。三乘所生。實報土。法身。大士所生。國土。然今極樂報土。凡聖上下五乘齊通入。所諸佛未誓。彌陀不共別願。以之云諸佛超世願也。安樂集

上云。今此無量壽國。是其報淨土。由佛願故。該通上下。已上觀經玄義分云。問曰。彼佛及土。既言報者。報土高妙。小聖難階。垢障凡夫云何得入。答曰。若論衆生垢障。實難欣趣。正由託佛願。以作強緣。致使五乘齊入。已上以此釋應知。○是云難信之法者。問。難信之法者何法耶。答。慈恩云。一日乃至七日念佛。即拔玄澤。高昇淨境。微因著果。俗情難信。人恐如來引接之語。故云難信之法。已上靈芝云。念佛之門。不簡愚智。不擇豪賤。不論久近。不選善惡。唯取決誓。猛信。臨終惡相。十念往生。此乃具縛。凡愚。屠沽。下類。刹那超越。成佛之法。可謂一切世間甚難信也。已上仁岳疏云。難信之法者有二。一淨土依正莊嚴難信。二凡夫往生因果難信。已上此二種。俱疑佛願力也。淨土依正二報莊嚴。並凡夫往生。則是彼佛別願妙德也。凡夫不知此願力。動不起疑。以之難信也。又此難信略舉十種。一衆生今居雜穢土。聞淨國莊嚴。疑無此事。二十方皆佛國。

何定生。西方耳。易。三十萬億土道遙。何輒往生。四薄地。凡夫何得生。高妙土。五淨業多種。唯名號。而何可得往生。六難修名號。不歷歲積功。行不可生。七以一日七日念佛。難得往生。蓮華化生難信。八假令雖託蓮臺。由退緣亦可流轉。九西方爲鈍機。教。利智者必不生。十惑他經說。淨土及佛菩薩等實有耶無耶。狐疑不決。此十箇疑心。非愚昧難信。賢智猶疑。非初心疑。久修亦難信。而一實寶國。得無上佛果。證悟。如焰中蓮生。水上燭出。奇特捷徑要道。不可思議妙術。是故或以愚夫情量疑之。或以邪智邪義不信。今此於世間演說此法。猶如向井蛙說巨海。對生盲陳黑白。是爲難信。故云難信之法。林宏疏鈔等意。今付難信之法。文雖諸師會釋不一。微。今宗意。因小果大。入門。凡情生疑。故說難信也。又初心愚夫。其心未練。故行此。一法。尙謂有苦。故云難信。大本云。雖一世勤